

---

# 気分屋な神様の横暴

建宮

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

気分屋な神様の横暴

### 【Nコード】

N1240U

### 【作者名】

建宮

### 【あらすじ】

「性別を返して下さい!!」「いいわよ？ただしゼロの使い魔の世界に行ってきた」「このやり取りにより神様の気紛れの被害をもちに受けていた少女？が雪風の名を持つ少女の下に送られた

## プロローグ

「ゼロの使い魔の世界に行ってきた〜」

「はい？」

「いや。だからーゼロのー使い魔のー世界にー行ってきてーって」

この馬鹿上司はまた意味不明な事を

「突然何ですか！そもそもゼロの使い魔の世界って何処ですか？！  
管理世界ですか？！何で私が行かないといけないんですか！！」

矢継ぎ早に質問する私に奴はなんと

「楽しそうだから？」

の一言で片付けやがった

この方。私の上司こと神様は毎度意味不明な事を言い出す事で有名だ。前日も唐突に「この中で一番強いのは誰か決めてもらいま〜す」とか言って全部下総動員のデスマッチを開催しやがった

まあそれでも仮にも神様な訳で・・・従うしかないのです

「そんな理不尽な理由で誰が行くもんですか！」

「えー我が俣言わないでよー」

「貴方だけにはその言葉は言われたくありません!」

全く。大体私が居ない間は誰が貴方の身の回りの世話をすると思っ  
てるんですか

「えーなにー私から離れたくないってー? きゃ〜可愛い」

「じゃかしい!」

貴方が世話係に因縁付けて止めさせるから悪いんでしょうが! それ  
に地味に心を読むな! 鬱陶しい

「因縁つてなにおー。いいじゃん私だって男より貴方みたいな可愛  
い女の子が良かったのー」

「わ・た・しは! お・と・こ・です! ! ! ! ! いい加減返して下さい  
性別を!」

「やーだー。私は貴方が男だって認めないー。あ! そうだ! ゼ  
口の使い魔の世界に行ってくれたら性別返してあ・げ・る!」

この馬鹿上司〜! ! !

「分かりました! 絶対ですからね! でどうやって行けば良いんです  
か!」

「んーそだ! 召喚のタイミングに潜り込ませよう!」

召喚？まさか魔法のある世界ですか・・・厄介ごとのある世界か

「だ、れ、に、し、よ、う、か、な、て、ん、の、か、み、さ、ま、の、い、う、と、お、り！！」

なるほど下界の選択方法ですか・・・でも天の神様って・・・

「ってそれ！結局貴方の好きな所って意味じゃないですか！」

「決定！行ってこーい！蒼髪の孤独な少女の下へ！！」

そんなこんなで馬鹿上司は一時的に力を奪い私を真つ暗な穴へと突き落とした

主様はクールな方でした

side タバサ

現在トリスティン魔法学院で二年生へ進級した学生達が生涯のパートナーとなる使い魔召喚の儀を行っていた

「ミス・タバサ」

「頑張つてねタバサ」

名前が呼ばれ親友のキュルケに応援され召喚の魔法陣に立つ

不安で胸が一杯になる。生涯のパートナーを決めるのだから当たり前かも知れないが私には叶えたい野望がある

その為には力になるモノを呼び出す必要がある

だが偽名を名乗っている私にキチンとした使い魔が召喚されるのか

「我が名はタバサ・・・五つの力を司るペンタゴン・・・我が運命に従いし使い魔を召喚せよ・・・」

魔法陣は神聖な輝きを放ち周りを覆う

そこから現れたのはまだ幼い風竜と真っ白な蛇の様な形をした大きな竜が居た

「うそ。使い魔が・・・複数」

「聞いたことあるか？しかも両方ドラゴン！」

周りからヒソヒソ話が聞こえてくる。しかし今の私には如何でも良い、幼い風竜はまだこれからだけど真っ白な竜は成体。しかもかなりの年月を生きている

「凄いわ！流石タバサね！」

キュルケが後ろから抱き着く

「まだ・・・コントラクトサーヴァント」

「あ、そうだったわね！」

私は二匹？に近付いて此方に近付いて貰うように示す

「きゅい！」

「・・・。」

二匹とも大人しく私の所まで降りてきて近付く

「我が名はタバサ・・・五つの力を司るペンタゴン・・・この者に祝福を与え・・・我が使い魔となせ」

口付けをすると二匹にルーンが刻まれる

そして契約は順調に終わり私は二匹に空で待機して置くように命じた

side ????

あの馬鹿上司！！本当の姿見せちゃったじゃん！帰ったら断固抗議してやる！もう恐くないぞ！一週間の擦りだつて耐えてみせましよう！え、えっちい事だつて私は恐くないですよっ！！

「きゅい？」

ん？そう言えば先程一緒に召喚された風の竜

「此処の世界にも竜は居るんだね」

「それはいるのね！貴方は何竜さん？」

元気な子だなー才能溢れるし馬鹿上司が見たら欲しがりそう

「特に秀でた属性はないかな。んーあえて言うなら万能型？」

「万能つてそれは凄いのね！・・・そう言えば貴方も人語を使つてるけど韻竜？」

「え？あ、うん。 そうなの」

「更に凄いのね！お仲間なんて何年振りなのね！」

希少種なのか。それより感覚を広げて此方の常識を覚えないと・・・そろそろ力も戻った頃だろうし



力と言っても私の力はそれ程大層なモノではない。せいぜい空を支配する事くらい・・・陸や海は専門外

とは言っても空から見下ろせば大体は見えてくる

「・・・面倒な世界」

一体あの馬鹿上司は何をやらせたかったのか

side 馬鹿上司

・・・馬鹿上司は名前じゃないわよ？

「うんうん。順調、順調！あの子の力ならあの世界の精霊にも愛されるだろうし十二分に力を発揮できるでしょうね！」

全く。まさかあんな可愛い顔して私の精鋭達を全滅させるなんて思わなかったわ

「それにしても・・・あの子。自分が女のままって気付いてないのかしら？」

まあどうせ戻った時も十分可愛い顔付きで男の娘だったし変わらな  
いようなモノだけど

長い間女の子だったし口調とかも染み付いちゃってるわよね

「ま、別に良いか！何か言ってきたらまたベットで泣かせるだけだもんね！」

あの子の涙と鼻水で濡れた顔でもう最高なのよ！思わずsっ気が擦られて何時間もやっちゃう！あー！やっぱり連れ戻しましょうかしらっ！

それにしてもあの風竜ちゃんにタバサちゃん。可愛いわね。ブリミルの子孫も可愛いし私も行きたくなるわ

side タバサ

ブルツツ

何かとても嫌な感じがした

「如何したの？タバサ」

「・・・大丈夫・・・それより」

「ん？」

「・・・ヴァリエール」

ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。通称ゼロのルイズ・・・前々から不思議な気はしていたが、まさか人

を召喚するなんて

「あー平民を呼んだのは驚いたわ」

「・・・有り得ない・・・事」

「それは貴方も同じよ。複数の使い魔を召喚するなんて初耳よ」

使い魔は召喚者の力量によって決まる。つまりルイズはそれだけ特別なメイジと言う事になる

「・・・餌・・・あげてくる」

「え？ああ、分かったわ」

大きなお肉とかで良いのかな？だったら厨房で貰えば良い

大量の肉をレビテーションで浮かべ森の中で二匹を呼ぶと蒼髪の女性と銀髪の少女が現れた

「きゅい！だから如何見たって女の子なのね！」

「やめて〜！私は男だー！あの馬鹿上司〜！！私の性別返せー！」

・・・誰？

「それよりご主人様が混乱してるのね！」

「ご主人様？私、その呼び方には若干トラウマしか無いのだけど」

「・・・誰？」

私がそう言うと二人は首を傾げて顔を見合わせると「あー」と納得したように手を打った

「風韻竜のイルククウなのね」

「龍神のウラノスリーです。気軽にラスリーと呼んで下さいね。主様」

韻竜に龍神？韻竜と言えば既に絶滅種とも言える希少種で龍神は何か知らないけど多分人語を使えるし韻竜の種類なのだろう

混乱してきた

「・・・食事・・・お肉」

「やったあ！なのね！！」

「すみません・・・私はお肉はちょっと・・・」

イルククウはお肉が好きなのだがラスリーは違うようだ

「・・・野菜？」

「あ、はい。私は脂っこいのは苦手で・・・ちょっとトラウマが」

何だか見ると此方の方が大人びている

「ラスリーもお肉如何なのね！」

「イルククウにあげる」

「なら遠慮なく貰うのね」

仕様が無いので二人ともに人の姿のまま厨房に来てもらう事にした

side ウラノスリー

主人から受けた命令は三つ。一つ、むやみに人前に出ない。二つ、魔法はなるべく使わない。三つ、人型は許可無しにはならない

「私に常時龍であれと言うのですか・・・」

「・・・そう」

恥ずかしい。だって基本龍の状態って裸同然ですよ？羞恥プレイと言うんですかっ！

「断固拒否します！私だって知恵ある者です！衣服の着用の許可を求めます？」

「・・・？」

ナチュラルに首を傾げられた〜！

「大体イルククウはまだ幼態だから恥ずかしいとか分からないかも知れませんが私はこれでも大人ですよっ！」

「・・・見えない」

「貴方に言われたくない！大体今だってこれ一枚ですよ?!」

私はイルククウから貰った布切れのマントをパタパタさせる

「・・・竜なら・・・気にならない」

「貴方がならなくても私はなるんですよー！お願いですから〜！」

「・・・とにかく・・・もう寝る」

なっ！この人。誤魔化す気満々だー！

「これでも男なんですから女の人の前で裸とか恥ずかしいんですけどー!!」

「・・・ん・・・男？」

へ?・・・まさか

「まさか主人。私の事、女と思ってました？」

「・・・うん」

「如何見たって男じゃないですかー！見て下さい！この凛々しい顔付き！」

「……可愛い」

主人は私の顔をマジマジと見つめる。今気付いたが主人の方が背丈が私より若干大きい

「……じゃ、じゃー！見て下さいよ！この逞しい胸筋！」

むにゅ

「……軟らかい……それに膨らんでる」

「……うわああああん！！やっぱり戻ってない！」

馬鹿上司の嘔吐き〜！！！！どうせ見てるんでしょうがー！返せー！今すぐ返せー！

「……男？」

「……ひぐつ……う……えう……おとこだもん……わたしはおとこだもーんー！！」

side イルククウ

ラスリーとペチャンコとの話が終わってラスリーは少し目元を腫ら

して帰ってきた

「何があつたのね？」

「聞かないで」

「そう言えば私、ペチャ・・・じゃなかった姉様から新しい名前をもらったのね！シルフィードって言うのね！覚えておいて欲しいのね！」

「・・・うん。分かった」

それにしても姉様と何があつたのね。泣いていたみたいだし喧嘩でもしたのね？

その後立ち直ったラスリーは再度姉様の所に交渉？しに行ってしまったのね・・・



原初は無。創造は光と闇。そして世界に火と水と土と風が満ちた。それが世界の

「あつはー可愛いわー、ウラノスリーちゃん！格好付けて囃んじやうなんてっ！やっぱり貴方は最高よ！」

「馬鹿上司ー！私の性別返せー！」

「そんな女の子の喋り方が定着したような子に言われてもねー」

「む・・・なら！ぼ、僕の性別返せー！」

「きゃー！僕っ子可愛いっ！！！！」

「うわぁあぁ〜ん！もうこの神様、駄目だぁあぁー！！！！！」

原初は無。創造は光と闇。そして世界に火と水と土と風が満ちた。それが世界の

side キュルケ

私の使い魔はサラマンダーとかなり上位だったけど流石タバサね！  
ドラゴンなんてタバサくらいだわ。親友の私も鼻が高い！

「あ！おはよー！タバサ！」

手を振りながら近付くとピタツと止まり此方を振り向く

ってあの子。寝癖とか全く治してないし・・・

「・・・ようじ」

朝は弱いよね。この子

「ほーら。人にぶつかるわよ」

私はタバサの肩も持って食堂まで誘導させる。この時だけは親友と  
言うより手の掛かる妹みたいと思ってしまう

「主様ー！」

食堂に入るとすぐに銀色の髪に澄んだ空のように青い瞳の少女が駆け寄ってくる

「タバサのメイド？」

私の質問にタバサは眠そうに首を縦に振る

「始めまして私はタバサの親友のキュルケ。宜しくね」

不思議と第一印象に可愛いと思わせる少女

「はい！私はラスリーと申します！主様の御付メイドをさせて頂いております！」

それにしても私程じゃないけどかなりの美少女ね

「で？なんでそのメイドさんが食堂に？」

「それはですね。主様の護衛として離れる訳にはいかないのですよ  
トライアングルメイジのタバサに護衛なんて逆に足手纏いじゃない  
のかしら？」

「んーそれでも貴族の食事に平民が立ち会つのは無礼じゃない？」

成り上がりの多いゲルマニアではそんな風習は少ないけど此処は貴族至上のトリステイン頭の固いが多い

「だめ、なのですか？」

「うゝゝゝ駄目じゃないわよ？ただ一般的な事を言ってみただけ」

可愛い。むしろ私が欲しいくらいだわ。その辺の男を連れてくるよ  
り全然マシね

「・・・お腹・・・空いた」

まあタバサが良いなら良いけどね

私、ラスリーちゃん、タバサの順で席に座る。本来貴族のみの席なのだが可愛い正義よ！

「あら？ヴァリエールじゃない」

「げ！キュルケ」

げ！って失礼ね。それにしても冴えない平民を連れてくるわね。平民でもやっぱり見た目の差があるのよね

「ど、ども」

タバサは結構注目してたみたいだけど。んーやっぱりただの失敗じゃないのかな？

「あら、どうも。私はキュルケ・・・大変ねえーそんな”貧相”な胸の貴族がご主人様で〜！」

「ツエルプストーの垂れ乳の何処が良いのよ！貴族は胸じゃなくて心構えなのよ！」

えっへんとこれ見よがしに胸を張る。・・・胸？あれを胸と言って良いのかしら？

「はっ！そんな有りもしない胸を張っても一緒よ」

私はラスリーちゃんとタバサを挟んで言い合う

タバサもラスリーちゃんも良く食べるわねー。ハシバミサラダとか貴方達くらいしか食べないんじゃないかしら

「それになに？その平民。実はその辺の村から拾ってきたんじゃない？」

まあその可能性は既に私の中では捨ててるから本意では無いけどね

自分の目で見た事くらい信じるわよ

「ちゃんと召喚したわよ！」

結局ヴァリエールと言いつている内に食事の時間は終わりパンくらしいしか食べれなかった

更にその後、ラスリーちゃんが私の分の食事を残して置いてくれた事に涙した

side ウラノスリー

なるほどねー精霊を操る血族が貴族として、もてはやされている世界。精霊を操る方法なんて星の教程あるのに、その一つを知っただけで此処まで偉くなれるんだね。人間って

私は授業を聞きながら心の中で先生方の理論に数箇所間違いがある

のを指摘する

そもそも始祖ブリミル。神様がブリミルなんてのが有り得ない。本当の神様はあんな優男ではない

もつと我が侘で意地悪で横暴で・・・やさ、しいとは思ってませんよ？けして昔、撫でられて喜んでいたとか黒歴史は無いよっ

「私の二つ名は赤土のシュヴルーズです。これから一年、土系統の魔法を皆さんに講義しますわね。さて、魔法の四大系統はご存知ですな？ミスタ・マリコルヌ」

マリコルヌよ呼ばれた、ふくよかな少年が立ち上がる

「はい。ミセス・シュヴルーズ。火・水・土・風の四つです！」

四つ？光と闇は？創世の属性を知らないの？それとも何等かの理由で失われたのか

「はいその通りです。今は失われた系統の虚無を合わせて五つの系統がある事は、皆さんも知ってるの通りです。その中で土の魔法は最も重要なポジションを占めていると私は考えます。これは私が土の系統を使うから、と言う訳ではありません」

無。原初の属性は知ってるのに・・・でも失われたって言うてるし気付かれる前に失われたのかな？

「土系統の魔法は、万物の組成を司ります。この魔法が無ければ、重要な金属も作り出せませんし、加工する事も出来ません。大きな石を切り出して建築する事も、農作物の収穫も今より手間取るでし

よう。この様に、土系統の魔法は皆さんの生活に密接に関係しているのですよ」

別に魔法が無くとも人は金属を作り出す方法を見つけるし加工や建築、農産物だってその内如何にかしてしまふ。まあこの世界は魔法だっただけ

「今から皆さんには、土系統の魔法の基本である錬金の魔法を覚えて貰います。一年生の時に出来る様になった人もいますでしょうが、基本は大事です。もう一度おさらいする事に致しましょう」

シュヴルーズ先生は小石を卓上に置くと魔法を唱え表面を変化させる

「ゴゴ、ゴールドですか？ミセス・シュヴルーズ」

「いいえ、これは真鍮です。ゴールドを錬金出来るのはスクウエアクラスのメイジだけです。私はただの・・・」

シュヴルーズは、そこで勿体ぶる様に言葉を溜めて・・・

「トリアングルですから」

トリアングル。その人のランクの話をしているのだろう

「主様。ランクの上昇の条件って何ですか？」

「・・・ん・・・精神力・・・かな」

曖昧定義らしい。私は一体どのランクになるのだろうか。まあ人よりは上位の存在なのだから人の定義に納まらない可能性もある

「ミス・タバサ、ミス・ヴァリエール、授業中に私語は慎みなさい！おしゃべりをする暇があるのなら、貴女達にやって貰いましょう」

「！！！！」

ん、意外と周りを見ている先生だ。上司にも見習わせたい

「先生！ミス。タバサはともかくヴァリエールは・・・危険ですから」

きけん？あの動作の何処に・・・そう言えばあの子の周りには精霊が寄っていつてないけど・・・

んー精神力が魔力に変換出来ていないって訳じゃなさそうだし体質的なモノの可能性が高いか

でもその場合は何の現象も起きないから危険では無い、よねー？

「やりますー！」

「・・・やる」

待って下さい主様ー

「主様ー。少し確認の為に私がしても良いですか？」

「・・・隠れてなら」

私は許可を貰って主様が唱えている所で魔法を使う



(土の精霊さん。小石を金に創り変えて)

お願いをすると予想以上に集まり小石を黄金に変えた

何か可笑しい・・・変換効率が良いすぎる精霊に愛され過ぎていて。  
まるで私の為の世界・・・まさかね、何時も通り神様が咄嗟の思い  
付きで選んだ世界が偶々私に都合の良い世界だったただだよ

不安になってきた

「流石ミス・タバサ。見事な・・・オウゴン？」

「「「「はあああああ！！！！」「」「」」

やっぱりやり過ぎたよね

## 私達の紹介です(前書き)

「自己紹介文ねー」

「ん？神様、何時に無く神妙な顔で・・・」

「ウラノスリーちゃんの弱点は「わー！ー！！！」なのよねー。つて何するのよ」

「何言ってるんですかつ！」

「何って「あー！あー！」って言うて・・・もーウラノスリーちゃんたらつ、二人だけの秘密にしたいのは分かるけどももう！可愛い！」

「全く神様はえっちい事しか考えられないんですか？」

「え？勝手に弱いつてそんなに・・・ふふつ、えーウラノスリーちゃんは何でそれがエッチだと思ったの？」

「なっ！えっ！だつて何時もか、神様がっ、私に、神様がっ「あらあら、それ以上は健全な内容じゃないわよ？」・・・馬鹿神様あゝ！うわあああゝん！！！」

「混ぜてるわよ。結局最後は泣き逃げになるのよね。あの子・・・可愛いっ。捕まえて悪戯しちゃうかしら・・・ふふっふふふっ」

## 私達の紹介です

オリキャラ設定（簡易版）

馬鹿上司こと神様

本作題名キャラ。思い付きで生きているような性格だが実はかなりの曲者

キュルケより巨乳。女性らしい女性。単なる女好き

戦闘面においては最強無敵などとはとうに超えており同じ土俵ですら無い。神の前では戦いすら成立しない。もし戦闘になれば相手はサンドバツク決定

龍神のウラノスリー

本作主人公。優しく思いやりのある少女。馬鹿上司（神様）のセクハラには困り果てている。その昔は男の娘だった

愛称ラスリーで第一印象が可愛いから始まる銀色の髪に澄んだ空のように青い瞳の少女、本当の姿は大きな白い龍だが普段は人型、滅多な事では姿をみせないように心掛けている

戦闘面。龍の姿でなければ、ゼロの世界でも最強や無敵と言つ程ではない

グスツ・・・汚されました

side タバサ

強いとは思ってはいたがまさかスクウェアクラスとは。しかもやはり先住魔法

「タバサ！貴方何時の間にスクウェアになってたの？！しかも土つて！！」

キュルケが慌てて近寄ってくる。流石に周りにバレると面倒なので耳元でラスリーがしたと耳打ちする

「ツッ！」

やはり驚く。私があとで部屋で事情を話すと言つと真剣な表情で頷いてくれた

「主様！キュルケ様！」

突然ラスリーが私達を無理やり屈ませて目の前で光の壁の様なモノを展開させていた

次の瞬間、爆風が起こり壁の後ろ以外はかなりの被害が出ていた

「本当にメイジなのね」

それにしてもあの爆発が直撃したらと思うとゾッとする

「・・・しかも・・・スクウェアクラス」

やはり侮れない。失敗と罵られていてもあんなのを武器に使い始めたら私でも敵うかどうか

「跪け！！！！」

低く唸るような声

見上げると・・・

白く大きな龍が途轍もない威圧を放ちながら存在していた

ウラノスリーが何か叫ぶと皆が一様に倒れ付す

そして大口を空けたウラノスリーがルイズを飲み干そうしていた

side ルイズ

「あの先生、危険ですからやめておいた方がいいですわ」

「危険？どういう事です？」

なっ！私だって今日は出来るわよ！何時も練習しているんだから！

「ルイズを教えるのは初めてですよね？」

「ええ。あまり実技の成績が良くない事は存じています。しかし、座学に関しては学年首席であると、非常な努力家である事も存じております。さあミス・ヴァリエール、気にせず頑張ってごらん下さい。数多くの失敗から、成功は生まれるものです。」

「はい！やります！」

私の宣言で皆の顔が蒼白になっていたが見てなさい！ピカピカの黄金に変えてみせるんだから！

「錬金！」

爆発した・・・見事に爆発した

「跪け！！！」

その瞬間何か声がして体が勝手に地面に平伏す。周りをみると皆もそうなのか机に隠れて姿が見えない

「え？」

そして白く大きなドラゴンの口が見えた

side 馬鹿上司

いい加減治らないかしら？

「ウラノスリーちゃん。本当のご主人様が来ましたよ」

私は後ろで気絶しかけのピンク髪を見る・・・可愛い

「小指一本で止められるような突進じゃ駄目よ」

近くに転がる黄金を拾って口の中で転がす

「んーウラノスリーちゃんの神気。美味しい」

私が口の周りをペロツと舐めるとウラノスリーちゃんの目が正常に戻る

「この世界に合ってるとは思ってたけど合い過ぎね。ルーンの縛り程度で本当の姿みせちゃうなんて」

ウラノスリーちゃんが人の形に戻る・・・ちっ服にちゃんと防護を掛けていたわね。折角素っ裸のウラノスリーちゃんを弄くろうと思つたのに

「げ！か、神様！なんでこんな所に！」

「なんでって可愛いウラノスリーちゃんの為よ」

「ってそうだ！私の性別返せー！！！」

突然殴り掛かってきた片腕を取り拘束する。そしてウラノスリーちゃんの胸元に手を這わす

「んっ」



「相変わらず敏感ね」

「う、うるといっ」

さて。この子が蒼髪の子を助けた所に時間を戻しておきますか・・・でもその前に・・・

「ウラノスリーちゃんにお仕置き」!

神様の補佐が世界の一つに左右される程度じゃ駄目だもんね」

「ちょ!そこは・・・ダメえ!え、えっちいのはらめええええええええ!」

「ぐへへってね」

side タバサ

光の壁が私を爆風から防いでいた。しかし次の瞬間壁を作っていたラスリーが倒れる

「・・・ラスリー!」

「だ、だめですー。い、ま、さわっちゃ」

ラスリーはビクツと体を震わせ上気させた顔で何か言っている

「タバサ」

キュルケが私の肩に手をおいてそっとして置くように言ってきた

「・・・なんで？」

「なんでって貴方・・・そのーとにかく！守ってくれてありがとね。幸い皆気絶してるしレビテーションで部屋まで運ぶわ」

私はキュルケが何故顔を赤くしていたのかわからなかったが取り合えず頷いておいた

side ウラノスリー

もうやだ・・・帰りたい

まさかあの程度の攻撃で主様に危険が迫ったとルーンが判断するなんて此方の魔法を侮っていた

そしてたかがルーン程度で本能的に主様を守るように強制されるなんて思わなかった

そのせいで・・・そのせいで・・・

「大丈夫？」

「・・・はい」

赤い髪に大きな胸（神様より少し小さいくらい）が特徴のキュルケ様がベットに寝かされた私を覗き込む

「タバサから聞いたのだけど。貴方。没落貴族なんだってね・・・」

ああ、そう言う設定ですか

「主様は？」

「ん？タバサ？あの子は・・・まだ幼いから私の部屋に居るわ」

はあー幼い・・・ですか

「ところで貴方。何であの時イってたの？もしかして欲求不満？」

「違います！！私、魔法を使うとああなる体質なんです！！」

無理が有り過ぎるー！！

思いつきりニヤニヤしてるしー！

「まあー男に困ったら言いなさい！紹介するわよ。きっと貴方可愛いからモテモテよ？」

「勘違いですってー！それに私は男ですよー！」

「・・・は？」

またか。またですか。飽きましたよ、その反応！でも私は男です！  
きっと神様が来たのも性別を返す為の・・・

ぴらっ

「タバサよりはあるわね」

「~~~~~!!」

「痛い痛いってー悪かったわよー突然洋服捲っちゃったりしてー」

やっぱり戻ってなかったー！！！！！！

その後私はニヤニヤするキュルケ様をポコポコと叩き続けた

人の話はきちんと聞きましょうー（前書き）

「あら？良い事言っわねーウラノスリーちゃん。頭でも撫でてあげるわ」

「にやう・・・ちょっと恥ずかしいです」

「そう？こつ言つ時は素直に喜んでたら良いのよ」

「神様」

「なあに？」

「左の手でお尻を撫でるのを止めて下さい」

「あ、あははー」

「・・・嬉しい気持ち半分です」

「ふふっその照れながら頬を膨らます顔も大好きよ」

人の話はきちんと聞きましょうー

side キュルケ

「やつほータバサ」

今日の私は朝早く目が覚めたのでタバサの部屋に突撃していた

タバサは淡い青色のぶかぶかパジャマを着て寝ている。そしてそのすぐ隣に白いネグリジェを着てタバサに抱かれるようにしてラスリーちゃんが寝ていた

「ふふっ、姉妹みたい」

似てないけど

「・・・キュルケ様」

暫らく見ているとラスリーちゃんが目を覚ました

「おはよう」

「・・・はっ！もうこんな時間！」

慌てて飛び起きたラスリーちゃんは物凄い速さでメイド服に着替えて小さな冊子を取り出す

「なにそれ？」

それにしてもラスリーちゃんの肌って綺麗よね。羨ましいわ・・・  
何か秘薬でも使ってるのかしら？

「予定帳です」

へー綺麗な紙ねー。羊皮紙とは違うみたい

「えー使い魔との交流日・・・焦って損したあゝ」

使い魔との交流の日。召喚したばかりの使い魔とのコミュニケーションを取る為に作られた日つまり今日は授業無し・・・よってゆつくり寝ていても問題は無い

「あはは。慌てん坊さん」

「では主様の使い魔にご飯をあげてきますね」

「分かったわ。その間にタバサを起こしておくわ」

side ウラノスリー

何故こうなったんだろう。神様は私が嫌いですか？

『大好きよ!』

幻聴

そうに決まっています！そもそもこの場合の神は比喻であり貴方ではありません！馬鹿上司！

「怖気付いたのかい？」

私は今、この方。若干聞き手をイラつとさせる話し方のキザな男。ギーシュとか言う人に八つ当たり気味に喧嘩を売られています

「いや・・・そうですね。怖気付きました」

うんざりする。私はこのタイプの人間は余り好きになれない。何を持ってそんなに偉そうなのか自分を過大評価出来るのか理解出来ない

まあこの程度の個人差なら私にとっては些細な事ではあるんだけど・・・所詮一杯居る内の一人？と言った感じだ

「そうかい。まあ当然だろうね！なんたって相手がこの僕、青銅のギーシュなのだから！」

もうそろそろ主様も起きた頃です。早くしないと

「頭を下げ僕に奉仕するってなら許してあげない事もないよ」

イルククウ用のお肉。厨房の人に頼んでおいたけど届いてるかな？

「流石にこの僕も平民とは言え可愛い女の子には寛容だからね」

私は出来れば和食の類が好みなのですが。此方の食事はどれも味が濃すぎますね。もっと体に気を使うべきです。神様のお世話係をしていた身としては受け入れがたい現状です



「ちょ、キミ聞いているのかい？」

まあでもそれがこの世界のモノですから仕方無いですよ。文句を言っても何も変わりません。前向きに生きましょう

「キミ!!」

「あ、はい。なにか？」

「聞いていたのかい？僕の話を！」

・・・話？

「クックベリーパイですか？好きですよ」

「何の話?!」

この人は人の話を聞いてなかったんですかね

「だから、クック・・・あ、決闘の話もしてましたね。では”生き埋め”で」

死なれても困るし頭は出しておきますか

「ま、魔法?!キミ、メイジだったのかい?!」

杖を構えるのは忘れないつと・・・全く何で杖なんか使うんだろ？

「あれは・・・主様!」

今思えば確かに僕のした事は完全に八つ当たりだった。とは言え憂さ晴らしに平民のメイドを躰けようと決闘を挑んだ

・・・けして下心があった訳では無い。そりゃ平民にしては可愛いなあとは思ったさ。でもその時の僕はそんな事より優先すべき事があつただよ

まあ結果は話も聞かずに彼女は僕を地面に埋めた

「何やってんのよ。ギーシュ」

「やあキュルケ」

彼女が主と呼んでいる人物は遠目で確認しずらかったがあの蒼髪は恐らく雪風のタバサだろう

で、ミス・タバサ唯一無二の親友であるミス・キュルケが生き埋めの僕に話し掛けてきたのは偶然では無いと思う

「全く。聞いたわよ？一年の子とモンモランシーとで二股してたらしいじゃない」

赤。火の系統魔法の使い手たるキュルケに相応しい色

「えい」

彼女を見上げていた僕の顔面に彼女は軽い掛け声で蹴りを入れた

「ぬあああああ！！な、なに、するん、だい！」

「いや。別に貴方にサービスする必要は無いかなーって」

そう言っただけで散歩程下がる。すると僕の視界には先程の光景はスカパーに隠れて見えなくなる

「それより。あんまり複数の人を愛するのは良く無いわよ？」

「それはキミには言われたと思うんだが？」

「ふふつ。私はちゃんと一線は守ってるわ。それに私はあくまで微熱よ。微熱のキュルケ」

それって男には酷な言い分だよね。だって情熱にはなってくれないんだろっ？

「まあ反省の色がなかったらタバサの代わりに私が貴方を潰そうと思っただけで止めにするわ」

潰そうって物騒な

「二人には謝ってくるよ」

「宜しい・・・あと」

去ろうとしたミス・キュルケが唐突に止まって此方を向く

「あの子は気にして無いだろうけど、謝っておきなさいよ」

「なんでへいみん」・・・わ、わひやりました」

ミス・キュルケは・・・魔法より蹴りの方が強力なんではなからう  
か

人の話はきちんと聞きましょうー（後書き）

どうも建宮です・・・

今更ですが時々書く前書きの談笑は面白いでしょうか？って言うか  
この際全ての話に前書きを書いた方が良いでしょうかねー？  
ご意見募集します！

## この世界の人はバトルマニアのようです

side 才人

俺こと平賀才人十七歳はファンタチックな体験をしている・・・異世界だぜ？異世界

確か。ルイズ・フランソワーズ・ル、るー。なんだっけ？と長ったらしい名前のピンク髪の少女に召喚されたらしい

にしても自然な髪色がピンクとかありか？

まあ何だかんだで召喚されちゃったもんは仕様が無いので俺は俺の出来る範囲で使い魔をしていた

「これ何処で洗えば良いんだ？」

渡された衣服。洗濯機も無く手洗いと言う昔話みたいな方法で洗わないといけないのだが如何せん場所が分からん

・・・お、あのメイドさんに聞くか

「あの！すいませーん！」

ポニーテール。確かに馬の尻尾みたいだ。などと失礼かも知れない事を思うとメイド服の少女はその場で止まって此方を向いた

「・・・はい。なんですか？」

十代前半だよな？。この世界ではそんな年から働くのかーすげえー。  
てか何か間があった？

「あの、洗濯場って何処ですかねー」

「洗濯場ですか。．．．あー確かあそこでしたね、厨房も近いです  
ね。案内しますよ」

可愛い。それが第一印象、笑顔がとても似合っていて何だか癒される  
ボーっとしていたせいか彼女は不思議そうに近付いてきて顔を近く  
に寄せていた

「どうしました？」

「うえ？！あ、いえ。なんでも。あーお名前は？」

「私ですか？ウラノスリー。気軽にラスリーって呼んでください」  
何処かで聞いたような言葉だったが気に留めるほどでも無いのでス  
ルーした

「俺は平賀才人。宜しくな！」

案内して貰う事約数分。洗濯場は意外と近くに存在していた  
てか気付けよ俺！

「では私は別の用事があるので〜」

「おう！サンキューなー」

ラスリーちゃんはペコリと小さくお辞儀をしてタッタッと小走り  
走り去った

さて！気合入れて洗うか！

side ウラノスリー

平賀才人かー。明らかにこの世界の人間じゃなかった。でも世界移  
動なんて神様以外に出来るんですかね？

確かあの桃色のルイズ……さん？が召喚したらしいですけど……  
なんだろ？この気持ち

「ん。余り思い出さたくないかも」

ルイズさんを思い出すと連動して馬鹿上司にされた事を思い出す

「すみませーん」

「よう！嬢ちゃんか！」

大柄な男性コック長のマルトーさんが出てくる。昔、城で料理を振  
舞っていただけあって腕前はかなりの物だった

和食派の私には物足りないけど



「何時ものお願いします」

「おう。何時ものなー。大丈夫か？なんなら若いのに手伝わせるが」  
優しい人だ。今まで扱き使われる事が多かったから涙が出そう

「大丈夫ですよーこのくらいなら持てますから」

よいしょつと私は大きな肉の塊が入った包みを持つ。当然イルクク  
ウのご飯

「そうか。疲れたらすぐ呼べよ！」

「はいつ！」

「今日も良いお肉なのね！」

竜の姿で美味しそう食べる

「その姿だとシルフィードだっけ？」

名前はとても大切なモノだ。名前はそのモノの姿を現し力を現し主  
を表す

それを変える意味を主様は知っているはずだ。名前を変えた主様なら

「ん？そうなのね！不服だけどラスリーがあのかのペタンコを主と呼ぶならあのかのペタンコは私の姉様なのね！」

・・・ペタンコってそれは流石に言い過ぎじゃないのかな？まあ龍種はプライド高い生き物だから当たり前か

私も馬鹿上司の思い付きじゃなかったら使い魔なんてしていない

「ラスリ〜食べたりないのね〜」

「んー我慢して。お昼にまた持ってきてあげるから」

と言つか適当に狩りして捕まて食べばいいのに。この森なら人は滅多に来ないし

「じゃ、またお昼」

「分かったのね〜」

side ルイズ

あのかの駄犬ツツ！！

ただの洗濯にどれだけ時間を掛けてるのよ！

私が怒って早歩きで歩いていると曲がり角でメイドとぶつかった

「あ、すみません！」

普段なら余り気にしないが今回は虫の居所が悪かった

「ちよつと！何処見て歩いているのよ！」

「本当にすみません！」

ん？この子何処かで・・・あ、数日前にツエルプストーが連れてきた子ね。ってことはツエルプストー家のメイドかしら？

「全く！ちゃんと前見て歩きなさいよ！」

まあ私も悪いけど

「おーい！ルイズ〜」

遠くから駄犬が走って近付いてきた

「あ、才人さん」

「ん？おーさっきのー。ラスリーちゃんだったっけ？」

「そうです。ラスリーですよ」

駄犬はメイドの笑顔に鼻の下を伸ばす

・・・発情犬ね

「なにメイドにニヤニヤしてんのよー！！！」

「おう!? な、なにが?!」

「きゃっ」

私が叫んだ瞬間サイトが驚いて飛び上がり横のメイドを押ししてしまいメイドがバランスを崩す。そしてたまたま通り掛かった上級生の人にぶつかり持っていた飲み物を零し貴族の服を汚してしまった

そこからはまるで芝居のように事が進み格好良く庇いに入ったサイトがメイドの代わりに決闘することになった

神の楯。それは誰が決めるでも無く自然と出会い自然と惹かれ合うモノなのよ

「乗っ取りですか？神様」

「いやねーウラノスリーちゃん。私だって目立ちたいのよ」

「はあー。目立ってますよ十分」

神の橋。それは誰が決めるでも無く自然と出会い自然と惹かれ合うモノなのよ

side 馬鹿上司

・・・意地でもこれで通す気ね

大体偉大な神様を馬鹿呼ばわりは頂けないわ

「にしても暇ねえ」

何時もはウラノスリーちゃんを弄くって遊ぶけど今は居ないもんなー

必要だったとは言えなんで私が・・・まあそれは過ぎた事ね

あー、ひまあー

そもそも何で神様って皆、可愛くないのかしら。そりゃ動物が神格化したモノとか可愛いなーとは思っけど・・・なにか違うのよねー

ウラノスリーちゃんって言う最高に可愛い子を見つけたせいで他が霞むのかしら

「そだつ。暇だし今のウラノスリーちゃんの状態でも見てみようかしら」

ちなみに私の居る空間は何でも有り何でも無い空間。理解はしなくても良いわ出来るモノでも無いし

「やっ」

テレビの電源を付ける感じでリモコンのボタンを押した

『才人さん！才人さん！もう止めて下さいよお！！』

なにこの状況。なんであの子が泣いているのかしら？

ボロボロの少年が青春を描いているようにしか見えないけど。でも何でウラノスリーちゃんは力を使わないのかしらね

「あ、蒼髪の子に制限でも掛けられてるのね。納得納得」

にしても青春ねえー。あれはーガンダールヴ・・・だったわね。

神の左手ガンダールヴ

神の楯ガンダールヴ

神の盾と言う観点ではウラノスリーちゃんと全くの同類。唯一の違いはその質

「んーにして身のこなしが・・・」

あの子もブリミルの子孫に制限でもくらってるの・・・かな？

いや、そもそも武器を持っていないガンダールヴってちょっと笑える

「ふふつ。なにあの子。もしかして気付いてない？ふふふー良いわーなにその天然。それにウラノスリーちゃんがあんなに氣遣ってるし主として私も何かしないといけないのかしら？」

でもどうせ巡り合うべき武器にちゃんと合えるのよねー。なら今回のみくらい力を貸してあげましようかね

ついでに力に気付く切っ掛けを与えましよう

ブリミルの子孫の力も気付かせて・・・ま、あの子はまだね。タイミング悪い

もっと私に有利なタイミングで登場しましようか

side 才人

異世界に来て如何やら俺は割とストレスが溜まっていたらしい

アホらしい挑発にのり未だに負けを認められない

「もう諦めたらどうだ?!この冷風のシールに勝てると思っただのかい?平民の分際で!」

平民、平民、平民

魔法がそんなに偉いかよ。コイツら皆、見下しやがって・・・

「才人さん!もう良いから!私が悪いの!」

はっ。泣いてんじゃねえーよ。可愛い顔が台無しだろ?



「悪く・・・ねえよ」

「あん？なにいつているんだ？」

「ラスリーちゃんは謝ったろ？ならもう悪くねえよっ！」

再び立ち上がり俺は貴族の坊ちゃんに殴り掛かる

貧弱そうな奴だし一撃入れれば勝てるはず

「はぁー諦めが悪いねー。これだから平民は嫌いだよ」

奴が杖を振るうと妙に冷たい風が俺を襲う。・・・冷たいと逆に熱く感じる

俺はアツサリ吹き飛ばされ数メートルずると背中を擦りながら下がる

見上げた空が青い

そしてふいに影が入りラスリーちゃんの泣き顔が見え、その瞳に悔しそうな表情の俺が写っていた

「もう止めて下さいよお」

「ははっ、俺の為に女の子が泣いてくれるなんてな」

嬉しい限りだ

「私だけじゃないですよ」

視線を逸らして方向を見ると目に涙を一杯溜めて何かを持って走ってくるルイズの姿が見えた

「ル、イズ？」

「サイト！もう！なんでこんなボロボロなのよ！」

「それは？」

「え？ああ！先生を呼びに行った帰りに変な女性に貰ったの」

そう言っつて棒を俺に渡した

「棍か」

棍。ただの棒切れと言っつてしまえば終わりだが立派な武器

これがあれば・・・

いや、武器一つ持った所で吹かし不可視の冷風と捕らえられるとは思えない

でも

それでも俺は武器を受け取った

「ようやく準備が出来たようだね。平民の分際でよく立ち上がったと言えばいいのかな」

相変わらずム力つく

「待ってくれてありがとよっ！」

幾度かの再戦

奴は同じように杖を振る

でも今までと違う事が起こった

見える。奴の魔法の流れのようなモノがハッキリと分かる

俺は風を叩き落とし奴に向かって駆ける、そして近づいたら驚く奴の顔を思いつきり殴った

奴は綺麗に吹っ飛び気絶した

「勝った？・・・よつつっしゃー！！！！！！・・・しゃ〜」

side キュルケ

凄い。勝ったちゃった

偶々帰りの遅いラスリーちゃんを向かえに来ると先輩とヴァリエー  
ルの使い魔との決闘を見付けたので影で傍観させて貰った

「あ！キュルケ様！才人さんを！才人さんを助けて下さい！！」

使い魔の平民は勝ち誇り武器を手放した瞬間、気が緩んだのか倒れ付す。それに心配したラスリーちゃんはヴァリエールに助けを求めその後辺りを見渡し私を見つける

「平民。」

って本来切り捨てるんだけど。あの戦いには惚れたしラスリーちゃんに頼まれたら・・・ね

「はいはい。ごめんごめん。助けるわよ。水の秘薬ね・・・ヴァリエール」

「なに」

「えーっと。サイトだったわよね？借りるわ」

「・・・、」

「大丈夫。貴方は嫌いだけどサイトは好きよ」

大体レビテーションも使えないのに如何やって運ぶ気だったのかしらね

私はそのままサイトを救護室に運んだ・・・それにしてもラスリーちゃんのサイトへの懐き様が異常ね。兄を想う妹のようだわ

## 私の知らぬ間の出来事だそうです

side かみさま

はぁーい！皆お待ちかねの神様の出番だよっ！

と元気良く挨拶をしたは良いけど正直暇なのよねー

あ、そうだ。つい最近、ウラノスリーちゃんの様子見ついでに蒼髪の子の様子も見てきたのよね

そしたら何時もと違う場所に居たから何だろうなーっと思って覗いてみたら従姉？さんの前で裸になってたのよ

正直無反応は私の趣味じゃないし共感はお出来なかったけど

で本題はそれから、何でも吸血鬼と戦うらしい

吸血鬼と言えば星の使者とも言われる事が多いし大概の世界では最強種の中に名前が入っている。精霊の使い方が上手いのは勿論、やはり生きた年月が関係している

吸血鬼が神格化したと言う話もザラに聞く

長い説明になってしまったわね。兎も角蒼髪の子は単体で吸血鬼を倒すらしい

・・・くすっ

## サビエラ村

「私はサビエラ村の村長、アイザックと申します。この度は騎士様  
において頂き誠に光栄で御座います」

「あ、そう。私はガリア花壇騎士、神<sup>シン</sup>よ。まあ仮の名で本来の名は  
明かせないの。御免なさいね」

「いえいえとんでも無い。秘密裏のお仕事もあるでしょうから当然  
でしょう」

と言う訳で先回りしちゃいました！

年代物の吸血鬼だったら危ないしね。まだ蒼髪の子には死んでもら  
う訳にはいかない

にしても家の中からジロジロと陰気な村ね

「では詳しくお話を」

「はい、最初の犠牲者は僅か12歳の少女でした。・・・それから  
二ヶ月で9人。うち一人は王宮から来た騎士でした」

ふーん、正規の騎士でも手に負えないか・・・それだけ強いのか騙

まし討ちが得意なのか

「失礼ですけど死人鬼ゲールの存在はお知りで？」

「ええ、だから私達もお互い疑心暗鬼になって誰もが誰をも信用しなくなっているのです」

ふん、此処が人の弱い所ね。築き上げた信用を簡単に崩せるんですもの

私が少し考えていると木の軋む音がして扉が開いた

「……おじいちゃん」

「……へえそお。そう言うことお

「エルザ。部屋で大人しくと……エルザ、騎士様だよ。ご挨拶なさい」

「……エ……エルザ……です……」

「エルザちゃんね。……では村長、まず貴方方二人から吸血鬼に噛まれたあとが無いか調べさせて貰っても？」

ま、村長さんは有耶無耶にしてエルザちゃんを入念にね

「……！わ、ワシは構いませんが！この子は！エルザだけは勘弁して下さい」

「それは無理です。私も任務ですから……ではまずエルザちゃん

から・・・村長さんはお外に。エルザちゃんは女の子ですから」

「・・・わ・・・わかりました」

ようやく二人つきりになれた。私は部屋を外部と隔離すると服を一枚一枚剥いで行く・・・そしてエルザちゃんが裸になった所でソファーにゆつたりと腰を降ろし鑑賞する

「・・・騎士・・・さま？」

「なにかしら？」

「あ・・・あの・・・もういいでしょうか？」

上手い演技ね・・・うん。この子は私の物にするべきだわ・・・神様が言うのだから絶対よ

「ええ、もういいわよ」

「あ・・・じゃあ・・・服を」

「は？良いつて言うのは貴方の演技の事よ。安心して此処は既に外部と隔離してるわ。精霊も今取り除いた」

あら？精霊については気付くと思っていたのに・・・もしかして「この子、吸血鬼になって年が浅い？」



「ッ！ど、何処で気付いたの？私は完璧だった」

「ええ、完璧よ。でもね・・・それ以上に私が絶対なの」

私はエルザちゃんの影を操って床に括り付けた

「なっ！精霊は居ないのに！」

「居ないわ。四系統の精霊はね」

吸血鬼なら影や血の操り方くらい覚えていて欲しいモノね

「さて殺したのは合計で10人だったわね・・・ん？あら、最初の彼女が始めてだったの？」

「なんっ」

なるほど。やっぱりこの子成り立てね。吸血衝動を抑えられなくて友達の血を吸って殺した

「なら良いわ。貴方への罰を思いついた」

罰と言っても吸血鬼に取って吸血行為は食事。何も食事をした程度で咎める程私は器の小さい神様ではない

「ば、ばっ？」

ああ、その恐がっている顔。最高に良い・・・若い子ばかり襲っていたのは自分と肉体的特長が近いからかな

「ええ、罰よ。せいぜい闇で恨み言を聞いてきなさい」

私がこの子に掛ける罰はこの子が殺した人達が永遠と傍に立ち恨み言を重ねると言う地味に恐い罰・・・聞いたただだと恐くないかもだけど。考えてみなさい？一時間くらいなら我慢出来るだろうけど永遠よ？永遠！永遠に耳元でボソボソと恨み言言われるのよ！隔離したから此処に時間概念は無いし・・・そう聞くと地味に恐いでしょ？

「な、に、を？・・・ツツ！！！」

さて、あと何時間。我慢してられるのかしらね

「あ、あのエルザは」

「ああ、話を聞いたら偶々あの子の親戚の名前が私の知り合いの貴族の名前だったの、だからすぐに馬車で向かわせたわ。村長さん、あの子。貴方にとても感謝していたわ。私からもお礼を言わせて貰うわ。有難う」

「い、いえ」

「ああ、そうそう。吸血鬼の根城が分かったから私はすぐに討伐しに行くわ。確実に仕留めれるからもう安心しなさい」

「え？！ああ！重ね重ね有難う御座います！」

「ええ、じゃまたね。一応念の為に少し期間をあけて騎士が来るかもだけどその時は歓迎してあげてね」

あとは蒼髪の子が此方に向かうルートに手紙でも置いておけばいいわね。事後確認とかって名目で村に来るようになってね・・・

「おねえしゃまあー」

よっしゃ〜！可愛い吸血鬼ちゃんゲットおー！下界におりたかい合ったわー！

「で？どうだった？罰は」

私の言葉にビクツと反応してエルザちゃんは涙を流す

「ひぐっ・・・ほんとう・・・に・・・だめ・・・なことを・・・した・・・と・・・おもい、ます」

「そうね。貴方の吸血衝動は私が如何にかしてあげるわ。いずれ貴方を見てくれる人に合わせてあげる」

「・・・おねえ・・・しゃまは？」

きゃー！小首を傾げる姿可愛い〜！

「あー私はね。もう心に決めた子が居るのよね。ま、ハーレムはありだと思っているけどね」

あれ？つて事は私・・・ウラノスリーちゃんもエルザちゃんも共に遊んで良いんじゃない？3Pね・・・うん！良いわ！

「ま、そしたら私の事はその呼び方でもう一人貴方の姉的存在が居るからその子の事は御姉様と呼びなさい。ついでに子供らしいのは良いけど涙は私だけよ？」

「は、はい！」

side エルザ

はじめまして、吸血鬼のエルザです。わけあって神様なるじんぶつに拾われて可愛がって貰っているモノです

「エルザちゃん」

「はい！なんですか！おねえしゃま！」

妾わらわと神様の住んでいる所はとても不思議な所です。聞いた所によると「神様クオリティー！」だそうです

「貴方を向こうに返す・・・ああ、返すと言っても貴方が私の物である事には変わりはないわよ？で、ともかく。向こうに送る為に着て貰う衣装が決定したわ」

・・・衣装？。それは、給仕のふくでしたっけ？

「はあ妾にはふつつの給仕のふくにしか見えませんが」

「メイド服よっ！」

「きゅ「メイド服！口答えしない！」は、はあ・・・ですか」

「さ、着替えて着替えて」

おねえしゃまは妾にメイドふくを渡すと椅子に腰掛ける

「あ、あ・・・後ろをむいて頂けると・・・」

「嫌よ」

「ですよねー」

もう今更なので恥ずかしいとは・・・思います。女の人どうしなのになんでだろ？

「うんうん！似合うわ！少しフリルを多めにあしらったのはやっぱり正解ね！流石私！エルザちゃん！ご褒美のキスは？」

「なんの「ほづびで」「うるさいわ」「はい」

結局おねえしゃまに取って妾は暇つぶしの玩具に過ぎないと言つてとでしようね。妾の御姉様もこんなかんじの対応をつけているのでしょうか

「じゃー貴方の出番まではあともう少し先だからその辺で体操座り

でも置いて置いて」

「はい」

ただ

ただ幾ら扱いが悪くてもおねえしゃまの手はやさしくあたたかいです

最近私の女の子化が進んでいるように感じます（前書き）

「って事で性別返せー!!」

「わっ、突然叫ばないでウラノスリーちゃん」

「これが叫ばずにいられますかっ!!」

「居て頂戴。出来たら撫で撫でしてあげる」

「誰がそんな方法でだま・・・そんな方法・・・優しくですよ?」

「ええ、勿論」

最近私の女の子化が進んでいるように感じます

side ウラノスリー

才人さんを初めて見た時の違和感が武器を手にして変化を見せた時にハッキリした

この人は神の盾だ

絶対であるはずの神を守る盾。同じ役割を持った先輩

才人さんとラスリーで私、ラスリーが年上だけどガンダールヴとウラノスリーだったらガンダールヴの方が上・・・かも。まあ時間概念の無い空間に居た私が年齢を言うのも可笑いけど

「・・・才人さん」

でもこの神の盾は中々不便のようだ。私は常に盾である事が出来るのに対しこの人は武器を持つと言う限定条件があるようだ

しかも肉体は人間のまま

・・・痛そう

「え、つと・・・これで」

癒しの力。過ぎた力なので多用は控えたいけど才人さんになら良  
よね



「なっ！ななななな、なにを?!ラスリーちゃん」

「へ?ツ!!!」

起きてた?起きちゃってた?・・・わーーーー!!!

side 才人

滅茶苦茶体が痛かった。目を開けるのにも指を少し動かすだけでも鈍い痛みが走る。そんな時、唇を通して暖かな力のようなモノが流れ込んできた

心地よく懐かしい。不思議とそんな気持ちを抱き痛みは消えていた

だから静かに目を開いた

・・・?

えーつと

?

目の前に居るのは目を瞑ったラスリーちゃんが居て・・・

俺にキスするラスリーちゃんが居て・・・

え?

「え、つと・・・これで」

これで・・・なに？なにが？！

「なっ！ななななな、なにを？！ラスリーちゃん」

「へ？っツ！！！」

ラスリーちゃんは目を見開き口をパクパク閉じ開きした・・・まるで予想外の展開にあったみたい

そして早業で枕を抜き取り俺の顔に押し付けた

「あたっ」

落下に抑えられる力が加わってぶつか

ふかふかで良かったー

ってそんな場合じゃねえ！

「わ、忘れて下さい！！！」

声だけでも何と無くラスリーちゃんの顔が赤いだろうとイメージ出来る

「わ、忘れないとこのまま殺します！！！」

物騒過ぎる！！

「んー?!?!」

っ、っよ！抑える力強すぎ！息がっ！いきがー！

「如何なんですかつ！忘れますかつ！忘れないんですかつ！」

その意思を如何伝えれば?!てかもうやべえ!・・・まじ、やべえ

「・・・あれ?才人さん?才人さん!才人さーん!」

リアルなドジッ子って生命の危機があるんだな・・・あはは

side かみ・・・馬鹿上司

・・・流石の私でも泣くわよ?

「にしても才人・・・君ね。覚えるに値するわ」

ふふっ。ウラノスリーちゃんったら折角助けたのに自分の手で殺るつもりなのかしら?

・・・でも

「これで完全に組み込まれたわね」

物語に

ウラノスリーちゃんが才人君に力を送ったからウラノスリーちゃんと才人君との間に絆が出来た

ま、元々そのつもりだったんだけどねー

でもまさか

男が最初になるとは思わなかった

「んーでもあの子の反応」

まるつきり女の子ね。何あの恥ずかしがり方、新鮮で可愛いけど・  
・なんで私時はああじゃないのかしら？

にしても

「もう戻れないんじゃないかしら？男の娘に・・・ねえエルザちゃん」

「え？なんの「ね？」あ、はい」

体操座りが様になってきたわね

side ルイズ

大丈夫かしら。サイト

「も〜！なんで私がこんなもやもやしなきゃいけないのよー！」

でもキュルケは秘薬の効果効いてるし明日には起きるって言ったし・・・はぁツエルプストーに借りが出来たなんか言ったら母様怒るわよね・・・

「って言うか何でご主人様の私が面会二番目なの？」

私は何をしても落ちつかず救護室の前をうろつろつろとしていた。そして暫らくすると大きく音を立ててメイドの子・・・ラスリーだったかしら？が出てきた

「で、では！・・・あ、ルイズ様。才人は・・・その・・・まだ眠って起きてきませんでした！！では失礼します！」

まあ明日くらいって言ってたし当然ね。にしても妙に顔が赤かったのは気のせいかしら？

ともかく医務室に入ると顔を隠すように枕を顔に乗せたサイトが静かに寝ていた

「・・・？」

よく分かんないけど枕の使い方が違う・・・

私はサイトの重い頭を持ち上げて枕を頭の下に置く

「ふう〜。・・・って何で使い魔の為に此処まで・・・」

まあ今日くらいは良いか。サイト寝てるし……うん、怪我人に鞭打つ程私も鬼じゃないわ

暫らく見ているとサイトは少し呻いて目を開ける

「い、息が……つて。はっ！ルイズ?!……あれ？ラスリーちやんは？」

「はあ？アンタが寝てる間に帰ったわよ」

あれ？もっと目を覚ますのには時間が掛かると思っていたけど……

「寝てる間に?……あーそか。やっぱり夢か」

「どんな夢なの？」

怪我も見た限りでは無くなっているし、どれだけ良い秘薬使ったのよ。キュルケの奴

「んあー忘れちゃった。夢だしな」

……怪しいけど。ま、夢なんてそんなモノよね

大きくて、立派でした（前書き）

「・・・きゃー！テンション上がるっ！」

「何がですか？神様」

「うっん？こっちの話っ」

大きくて、立派でした

side ウラノスリー

才人さんが完全に元気になって少し経ったある日。私は貴族様にお呼ばれしてヴェストリオ広場にやってきた

むう、折角主様がキュルケ様に街に誘われて買い物に行くと言っていたから・・・洋服此方の服も欲しいと思ってたのに

「やあ、えーつとラスリーちゃんて良かったよね」

「・・・失礼ですけど誰でしたっけ？」

私がそう言うと相手はかなり落ち込んでいた。もしかして知り合いらしかったのかな？んーあれ？

「ギーシュだよ。青銅のギーシュ・・・キミに生き埋めにされた貴族だよ」

「・・・え？」

「はあー完全に忘れてるんだね。まあ良しさ。それでも言わせて貰うよ。あの時はすまなかった」

「・・・あ、はい。許します」

「それは有難う。・・・どうだい？暇なら僕とお茶でも」



暇・・・そうですね。主様は街ですし今の所は暇ですね

「では少しだけ」

「そうかい。じゃ紅茶とお菓子を貰ってくるよ。待ってて」

・・・優しい貴族様ですね

side ギーシュ

謝らなければキュルケにボコボコにされそうだったとは言え素直に謝るのは悪い気はしない

「そう言えばラスリーちゃんはどうしてミス・タバサの専属メイドをしているんだい？」

「えっと家が没落してしまって・・・そこを主様に拾われたんです」  
ミス・タバサ。ああ見えて結構優しいんだね。貴族としてその行いはとても尊敬するよ

「ところで呼び出して置いて何だけど今日の予定は大丈夫だったのかい？」

「大丈夫ですよ」

そう言って微笑む彼女は本当に可愛いと思う

んー何時も平民、平民と言っているが貴族は平民が居るから生活が成り立っている点もあると言えるか

「没落したとは言えキミもメイジ。実力はどの程度だったんだい？」

「・・・スクウェアです。得意系統は風」

スクウェア？！しかも風と言えば個人戦最強と言われている・・・でも確かあの時使われたのは土系統の・・・

「ではあの時の使った土系統のレベルは？」

「んートライアングルかな」

此処までの才能の持ち主なら幾ら没落貴族とは言え知っておいてもよさそうなんだけど

「は、はは。僕はそんな命知らずな事をしていたのかい」

「今度から気をつけて下さいよ？あと二股はメツですよ」

彼女は笑って僕の額と人差し指で弾いた

ああ、敵わないな・・・僕もドツドで甘んじていては駄目だね

「そつだね。じゃ、僕はこれから特訓してもっと強くなるよ」

「？・・・あ、頑張ってください」

トライアングル！とまでは言わないけどラインにはなりたい

この日から僕は実家から送って貰った書物で特訓を始めた

side ウラノスリー

「ヴァリエール！」

「ツエルプストー！」

「あ、主様！才さんが宙ぶらりん！危ないですよっ！」

ああ、危ないです！頭に血がのぼってクラクラになっているはずですよ！

買い物から帰ってきたルイズ様とキュルケ様が何やら言い合いをしていますが、聞いた所によると二人が買った剣のどちらが才さんに相応しいかを揉めているようです

それに才人さんは剣の目利きが出来ないのでどちらにして良いか迷っているそうです・・・

そして何故か才人さんを先に魔法を縄に当てた方の勝ちと言う勝負をし始めてしまった

「二人共！喧嘩は駄目です！」

「ラスリーちゃん！これは女の戦いなもの！ツエルプストー家としてヴァリエールなんかには引けないわ！」

「私だって同じよ！」

「主様」

主様は早々に諦めて木陰で本を読んでいた

「ふんっ！最初は譲ってあげるわ、ゼ・ロ・のル・イ・ズちゃん」

「なにおー！」

あ、ヤバイ！無の魔法なんてこんな所で発動したら！

龍化して才人さんの楯になろうとした瞬間私の体が一瞬だけ硬直する・・・恐らく神様の仕業だ

ルイズ様の魔法は才人さんを大きく外し後ろの塔の外壁を爆破した。あれだけ強力な守りの魔法を一撃で崩した・・・やっぱり危険過ぎる

「やっぱり失敗ねー。ファイアーボール」

次の番のキュルケ様の魔法は綺麗に縄を焼いて才人さんを落とす

あ、

落下していく才人さんを見てみると主様が起こした風のクッションに落ちた

「才人さん！大丈夫ですか？！頭クラクラしませんか？」

そう言っただけで私は寝転がって起き上がるうとした才人さんを一度寝かせて膝の上に頭を置く

「あれ、なんだ？」

寝転がった才人さんは空を指差す

「なにつて・・・」

つられて空を見ると土の人形が聳え立っていた

「『『『ゴレム!!?』』』」

「ですって」

「まさにファンタジーだな」

ゴレムはルイズさんの魔法が作ったヒビを殴り穴を開けるとゴレムの肩から女性が現れ塔に入りすぐに出てきた

「ハハハ！アンタらには感謝するよ！」

「え？あ、はい。如何致しまして！」

何故かお礼を言う女性に取り合えず返事をすると皆様の視線が痛く

刺さった

・・・あれ？私なにか違っていました？

side 馬鹿上司

・・・今度は馬鹿を抜いてくれるかしら？

「んーウラノスリーちゃん才人に対して少し気を許し過ぎかなー？」

向こうで始めての同姓の友達だからか・・・それとも境遇的に惹かれるのか

どちらにしても面白くないわね

兄か・・・確かにウラノスリーちゃんには初めての存在かもね。ふ  
ふっ

新しいメイドさん仲間が増えました

side ウラノスリー

あれから主様達は学院長の下へ呼ばれて行った

・・・泥棒さんだったそうです

んー悪意が無かったから気付かなかった

「馬車準備出来てますか？」

「おう！出来てるぜい！」

私は主様に言われ馬車を準備している・・・そう言えば少し前に急いで外から泥棒さんが戻って来たけど物を返しに来たのかな？

でもフードは外していたし姿変えているつもりだったのかな

「・・・あ、馬は二頭で・・・あれ？」

人が消えた

そしてこの感じは・・・

「久しぶりね。ウラノスリーちゃん」

「神様・・・」

性懲りも無く登場ですね。神様

「私の性別返して下さい!」

昔の哲は踏まないように距離を取って言う

「えー?やーよ」

やーよってそんな軽く言われても・・・あれ?それより後ろに隠れているメイドさんは?

「そうそう!この子!」

神様は自分の後ろから嫌々と隠れる女の子を引き釣り出した

流石神様。嫌がっている子を見て楽しんでますね

「エルザちゃんよ!ほら、挨拶」

「・・・エルザ・・・です」

「どうも、ウラノスリーです。龍神のウラノスリーです」

「あ・・・吸血鬼のエルザ・・・です」

あー神様・・・また・・・ですか

「またってなによお」

「そのまんまです。気分気俣に他世界の子を自分の物にしないで下



さい！しかも吸血鬼といったら星と繋がっている生物じゃないですかっ！」

「あー大丈夫よ。此処の吸血鬼にそれ程の力は無いから・・・全く独占欲が強いんだからっ！」

はあーそんなんじゃないありません。後処理が私に回ってくるって言っているんですよ

「大丈夫。この子は今日から此処で働くから」

「はい？」

「じゃ！宜しくね！ウラノスリーちゃん・・・」

何時ものようにふざけた笑顔で笑っていた神様はふと真剣な表情になって私に近寄る

私はさつと身構えるが神様が目の前に来た頃には自然と警戒を解いていた

「・・・御免ね。頑張った」

そう言っつて私の頭をゆっくりと一回だけ撫でた

「なにをっ！」

私が驚いた時にはもう居なかった

「あ・・・あの・・・御姉様？」

「・・・あ、ああ、はい。大丈夫です。はあーあの人の勝手にも困ったモノです・・・あとで主様に紹介しますね」

「はい！」

全く。相変わらず神様はズルイですね

side タバサ

フーケ捕獲と破壊の杖の取り返し。楽な作戦では無いけど出来ない作戦では無いと踏んでいる

「・・・ラスリー？」

「あ！主様！馬車の準備は出来てますよっ！」

ラスリーはそう言うとかかなり質の良い馬が繋がれた荷台を持ってくる  
どつやら馬の目利きも出来るらしい

「あら？準備が良いわね」

「主様に言われていたんですよ」

「タバサが？」

キュルケが此方に確認を取る為に向いたので頷く

「・・・ラスリー、そっち」

同じメイド仲間か何かだろうか

ラスリーの後ろに隠れて此方を伺っている

「あ、皆さんにご紹介しますね。エルザちゃんです」

「・・・エルザ・・・です・・・どうも」

少しだけ前に出てペコリと頭を下げるとまたラスリーの後ろに隠れる

「ちよつとお！貴族に対して失礼でしょ！」

「ひゃうー！」

「ルイズ、怯えてるじゃない。全くトリスティン貴族は頭が固いから嫌なのよね・・・宜しくね。エルザちゃん」

「よろしく、です」

それぞれエルザに話し掛け馬車に乗り込む

「宜しくエルザちゃん！俺は平賀 才人な」

「？、あの御姉様。この方」

ん？御姉様？つて事はエルザはラスリーの妹？似てないけど、そし



近くに居たのも作用したのかラスリーの胸を触って確かめた

「ぶはっ！」

「ダーリン?!」

サイトが鼻血を出し、それを見たヴァリエールが不機嫌になる

「神様の馬鹿あああー!!」

そしてラスリーは泣き出し・・・

「ええつと・・・皆さん？フーケの討伐は・・・って聞いてないですよね」

「・・・私は聞いている」

もう無茶苦茶になりフーケ所では無くなっていた

ちょっと昔の話です（前書き）

「ねえ、全く関係無い事言っても良いかしら？」

「？。別に構いません・・・けど」

「ウラノスリーちゃんって水着とか着たがらないけど何で？」

「あー・・・それはですね。貴方の目が何か恐いからですよ神様・・・  
・こう、飢えた獣と良いますかなんと言いますか」

「え、私そんな目してた？」

「はい。もうバッチリと」

「・・・。」

## ちょっと昔の話です

side ロングビル

ガキばつか。折角破壊の杖を手に入れたは良いが使い方が分からないじゃ、ただのガラクタ、なので学院の教師に調べさせようとしたのだがどうもコイツも腰抜けばかりで結局生徒が出てきちゃった

まあ良い。あの少年は伝説のガンダールヴとやら、らしいからね

などと思っていたのは朝方で出発前のゴタゴタで結局学院を出たのは昼頃になってしまった

「すみません。皆様」

この可愛いメイド、ラスリーがゴタゴタの中心にいた。にしても平民の割に貴族に可愛がられている

「あの・・・今日はのじゆく、するんですよね？」

ガンダールヴことヴァリエールの使い魔、才人の後ろに隠れて話しているのが何故か付いてきた、まだ幼いメイド、エルザ

「そうよ。もしかして怖い？」

「・・・すこし」

「大丈夫よ。一応此処に居るメイジは一人を除き優秀だから」

一人の所で良く教室の破壊で有名なミス・ルイズを見る。当然ミス・ルイズは怒って食って掛かるが軽くあしらわれていた

「誰の事よ!」

「誰?誰でしょうね!。タバサ、貴方のランクって?」

「・・・トライアングル」

「私もよ。・・・ミス・ロングビルは?」

「あの学院の教師は皆、トライアングル以上ですよ。ちなみに私はトライアングルです」

「えーっと残りメイジは、っと・・・あ、ヴァリエール!」

ワザとらしく今思い出したと言った感じでミス・ルイズを指差すミス・キュルケ

「・・・コモンよ」

「コモン?!え〜?貴方コモンマジック出来たかしら〜?」

「うるさいわね!どうせアンタは魔法が出来たって実戦じゃ使えないじゃない!」

「はっ!実戦だろうと練習だろうと使えないゼロのルイズに言われたくないわよ!」

段々と二人のボルテージが上がって言っている。まあツエルプスト



「家とヴァリエール家は両国の国境付近に居るせいで度々小競り合いを起こしているから当然その子息も仲が悪いのよねー」

「やめて下さいー！」

「二人共！喧嘩は駄目ですよっ！」

とうとう我慢出来なくなったのかメイド二人が仲裁に入る

「「でも！」」

「もう、ルイズ様もキュルケ様も今日の夜ご飯は無しが良いですか？」

「・・・一時休戦ね、ヴァリエール」

「そうね、ツエルプストー」

クハハ、碌に自分の飯も作れない貴族には効果的な謳い文句だね

side ウラノスリー

ふっふっふーん

エルザちゃんが料理が出来るのは良い誤算でしたね

「そう言えばエルザ。神様は向こうでも元気にしてましたか？」

「げん・・・元気だったよ？うん、すごく」

？。元気なら良いんですけど

基本的に食事や睡眠などの行動は私達にとっては嗜好品でしか無い。別に起きてようと思えば幾らでも起きていられるし空腹だって実際は全く無い

とは言えあんな何も無く何でもある空間では何か趣味の一つくらい無いと退屈で消えなくなるそうだ・・・神様曰く

「神様は気紛れな方ですからね。一緒に居るのは大変でしたでしょう？」

「主に体操座りですみにいましたから」

・・・あれ？

「その間、神様は？」

「テレビみてました」

あれあれ？私の時とは違う？私の時は付きっ切りだったのに・・・

「御姉様」

「ん？」

「御姉様はかみさまと何かあったのですか？」

「何かって？」

「むかしは仲がよかったって聞いてます」

「あーそれですか」

「貴方になら教えても良さそうですね。同じ徹を踏んで欲しくくないですしね」

あの時の事は今も全く許す気になれない。神様で無かったから殺したくなるくらいだ

「はあそれほどですか」

「実はですね。その昔、時間概念が無いのは知っているでしょうから何時かは覚えてませんが、あの人。おふざけで私の饅頭を食べたんです」

「は？」

「私の為に皆が想いを込めて作ってくれた大切な。たった一つの饅頭をあの方はパクリと食べたんです」

あれは生みの親から貰った大切なモノだったのに

「なるほど、そういう話があったのですか」

「うん、だからエルザも気を付けてね」

「はい」

よし。人数が多いから味にムラが出そうで不安だったけどエルザが居てくれたおかげでそれも心配なさそうだ

side 馬鹿上司

うう、あの話のあとだと否定出来ない

「はぁーやっぱりあの事怒ってるのかー」

だってさぁ。皆さー。例えば物凄く美味しそうな物が目の前にあってさぁー。手に届く範囲にあつたらさー食べるじゃん

・・・はぁー私だってあの子のまだ人だった時の生まれ親から貰ったモノだって知っていたら食べなかつたわよ

その事のせいで昔は私にベツタリだったに今ではああだし

はぁー

「はぁーテンション下がるうう」

ウラノスリーは元からの神では無く人から神になったタイプの神様。しかも龍神が気に入った特別で特殊な神

だからこそ普通の神と違って私の命令に逆らえるし意見出来る・・・

だからこそ可愛い

「はぁー如何にかして仲直り出来ないかしら？」

駄目だ。良い案が思い浮かばない

「詰まらない。ああ、ウラノスリーちゃんに会いたい。エルザちゃんを交えて遊びたい」

まあ良いか。まだ時間はあるしゆっくり考えよう

エルザには我慢を覚えさせようと思いました

side タバサ

フーケのアジトに夜向かうのは危険なので早朝に仕掛ける事になり  
一夜だけ野宿となった

私は任務でなれた事だがキュルケやミス・ルイズにはやはりキツイ  
ようだった

「美味しいわ！ラスリーちゃん！エルザちゃん！」

「有難う御座います。キュルケ様」

ラスリーとエルザが作った料理は現地調達で材料で作ったとは思えない程の出来栄え。普通に学院のパーティーとかで並んでいても不思議に思わない

にしてもこうしてゆっくりと出来る時間が出来るとミス・ロングビルの話の嘘が見えてくる。短時間で一教師がプロの盗賊のアジトを見破れるはずが無い

共犯者

この可能性を捨てないでおこう

「みなさん。ゆっくり食べてくださいね」

「そうですよ。多少は多めに作ってありますから」

はぁーシルフィードもこのくらいのスキルがあれば良いのに・・・  
ま、幼態だから仕方ないか

夜明け。予定通りに急ぎでフーケのアジトまで向かい強襲する事になった

「まずは足の速い人が偵察」

私がそう言うと一緒に皆、サイトの方を向く。しかしウラノスリーとエルザだけ何か話し合っていた

「はぁー仕方無いか・・・皆女の子ばっかで男俺だけだもんな」

渋々と言った感じで剣を抜きフーケのアジトだろうと小屋を偵察しに行った

大丈夫そうだ

「では皆さん。私は辺りを見回ってきますので」

「主様。エルザに馬車の見張りをさせておきますね？」

そう言ってミス・ロングビルとエルザが抜けた

「さ、行くわよ。ルイズ、タバサ」

一気に皆で中に入るとそこは蛻の殻だった・・・外れ、だったのだ  
ろうか

それでも一応と皆中を調べる

「これ一時使われてなかったなあー」

「主様。掃除しません？」

「・・・しない」

はあもうフーケには逃げられた

・・・ん？

「・・・あった」

「「「え？」」」

「破壊の杖」

ケースも資料通り重みもあるので中もある

「「「ええええええー！！」」」

皆が驚いて大声を上げた途端。行き成り屋根が吹き飛んだ



s i d e エルザ

皆様と離れて数分。すぐに御姉様が見張れと言う人物を見つけた・  
・御姉様の説明ではあの方の行いに悪意、悪行のようなモノは感じ  
ないので事情を聞いて欲しいとの事

見張っているとロングビルと呼ばれる監視対象が魔法を使い大きゴ  
ーレムを作り出していた

結構の使い手だなあ

そして黒い笑みを浮かべると小屋に突撃させた

「ロングビルせんせい？」

「あ、メイドの・・・」

「すこし、話をきかせてもらっても？」

「チツ。見られていたのかい・・・なら悪いけど死んでくれ」

大きな土の塊を幾つも飛ばす。ゴーレム操作をしているのに同時に  
魔法を使うなんて不思議な人だ

土の塊を飛ばす程度ならランクは低い魔法なのだろうけどやはりゴ  
ーレムを出している状態なので普通は不可能に近い

「それ・・・できない、おねがいだよ？」

爪で土の塊を弾きロングビルの首を掴むと手近な木に押し付け先住

魔法で縛った

「ごめんね・・・わたしさぁー御姉様程、やさしくはないの」

木で簡単な槍を作る。そしてそれを首に当て何時でも殺せるようにする

「さあはいて？あなたはだれ？なんでぬすみを？」

「アンタ本当にただのメイドかい？」

「うん。ただの吸血鬼のメイドだよ」

さぁーっと相手の血が引くのが分かる。集中が途切れたのがゴォレムも破壊されている頃だろう

「き、吸血鬼？」

「私の事はどうでもいいでしょ？私の質問にこたえて」

「・・・私はロングビル。巷で噂のフーケ。盗みの理由は、言えない」

死なない程度に薄皮を切る

「答えるっていつてるの。しかもあなたの名前はロングビルじゃない」

名前には敏感な神様の補佐が言っているのだから間違いない

「……マチルダよ！マチルダ・サウスゴータ！」

「で？盗みの理由は？」

「言えない」

はぁー……

思わず腹に蹴りを入れた。しかも割と本気で……

「早く、言え」

「嫌よ」

次は違う場所を蹴る

「言え」

「嫌」

爪で服を切ってみる

「言え」

「嫌よ。絶対」

「はぁーもう良い。いつまでも面倒。御姉様にはあなたのでいいことが強過ぎたって言うから……じゃあね」

side ウラノスリー

ゴーレムの強襲。奇襲だったとは言え主様の魔法のおかげで皆無事だった

「早くルイズも乗るのよ！」

そんな中、ルイズ様が勇敢にもゴーレムに立ち向かう

確かにルイズ様の魔法ならゴーレムなんて木っ端微塵だろう

「主様」

「・・・なに」

「少し。席を外しますね」

そう言った私の事を不思議そうに見たが主様は普通に許可を出してくれた

だから皆が盛り上がっている内にコッソリと抜け出した

「大丈夫かな？エルザ」

あの人の事をエルザに任せはしたがエルザは吸血鬼なのに見た目通りの年齢らしい

判断を間違えなければ良いけど・・・

なんて思っていたのも束の間

あー

あーやっちゃったのかな？

上の服をバツサリ切られ右肩から左腰に掛けて大きく切られている  
ロングビル先生とその横で言い訳を考えるエルザを発見した

「エルザ！」

「御姉様」

「もう！やりすぎ！」

「ですけど！」

急がないと死んでしまうので私は急いで治療の力をロングビル先生  
に流し込む

「……ん、んー！つぷは！行き成りなにするんだい！」

「治療です！あくまで治療行為です！他意はありません！意見がある  
なら記憶飛ぶまで殴りますからね！」

「御姉様……私よりひどい」

酷くないです。必要最低限の行為です

「で？エルザ。名前だけでも分かりましたか？」

「あ、はい。マチルダさんです」

「・・・マチルダ」

優しい名前。自己犠牲の愛。何と無くだけどその人を大雑把に理解する

「どうしました？御姉様」

「放していいですよエルザ。その方は悪い人じゃないです・・・交渉しましょう？」

ハシバミ草は不思議な味です（前書き）

「具体的にはどんな感じなの？」

「えつとですね。苦味が強いですね、灰汁抜きなどキッチンと処理を  
施せばまあ如何にかなると思うんですけど」

「ふーん。食べている人とか居るの？」

「あ、はい。主様は好きみたいですよ？ただ他の方は食べていない  
ので食卓に並べる意味は無いのではと思いますね」

「なるほどねー」

ハシバミ草は不思議な味です

side マチルダ

交渉。可愛い笑顔で案外えげつない事を言う女の子だよ・・・吸血鬼を従えてるって有りなのかい？

「乗った・・・って言うしかないんだろう？」

いまの私は拘束さえされては居ないモノの囚われの身と大差ない

そして私には金を稼がないといけない理由もある

「ん？別に拒否したいなら良いですよ？」

アンタは良いだろうけど隣の子は良くないとかそんな落ちが見えるのは私だけだろうか

「乗らせてもらおう」

「そうですか」

そう言ったラスリーは地面に手を当てて目を瞑る・・・すると不思議と手がズブツと地面に入っていく

魔法？何か違う気がする

肘の辺りまで来たところで今度は手を地面から抜く・・・その手に袋を持って



「こんなところですね・・・はい」

「はい？」

「はい」

受け取った布袋を開けてみると様々な宝石が入っていた

「・・・どれが一番高いとか分からないですからテキトウに選びました」

「・・・前払いつて事かい？」

「そうですね」

売り捌くには少し大変そうだがかなりの額になる

嬉しい反面。要求される対価が恐い

「貴方に行なって貰うのは一つです」

「なんだい？」

「修道女です！」

「・・・んーな・に・を・言・って・いるのかしらー？」

「ちょっと引かないで下さいよ。理由ありなんです。実はかみ・・・じゃなくてシンと言う人がですね？変わった人として特別な子を集

めるのが大好きな方なんです・・・で大方この子みたいな吸血鬼以外にも捕獲・・・鹵獲？・・・誘惑？・・・んーともかく変わった子を集めているはずなんです。で。私は基本その後処理をしないといけないんですけどやっぱり特別と言うのは人に避けられて身寄りが無い場合が多いんです・・・だからその子達の為に建てた教会で修道女をして欲しいんです」

思ったより真剣な話だね・・・って言うか余りにも勝手じゃないか？その人

「で？受けてくれますか？」

「分かったよ。私は子供は好きだからね」

「そうですね！良かったです！これが場所ですね！少し変わった教会ですからすぐに分かりますよ」

「分かったよ雇い主さん」

いっそあの子達もそこに引っ越させようか

side ウラノスリー

マチルダさんはフーケ捕獲任務後すぐに学院を止めた。ちなみにフーケ捕獲は出来なかったけど破壊の杖は帰ってきたので問題無しとなった

そして祝いの席

「主様は踊らないんですか？」

主様も一応オシヤレをしているのですが殆ど食べてばかりでダンスに誘われても断っている

エルザはと言うとイルククウと楽しく会話をしている頃だと思う

「・・・踊らない」

壁に寄り掛かり全体を見渡す

キュルケ様は男の人に囲まれて特徴的な赤い髪がちらっとしか見えない

ルイズ様は才人さんとダンスを楽しんでいる

主様は変わらず食事を堪能中

「思ったより暇ですね」

「なら。私とダンスを踊りませんか？」

黄金の長い髪を私のように後ろで一括りに纏め似合いもしない黒スーツを着ている

「普段のラフな格好は如何したんですか？神様」

誰も神様を見ない。これだけ目立つ容姿で見ないと言う事は認識の

阻害かその類のモノを使用している

「あのねーこう言うのは雰囲気よ・・・あとウラノスリーちゃん。神社を作るなんて手の回しが早いのね」

何時気付いたのか・・・監視していたとかって可能性もありますね。ストーリーとか平気でしそうですし

「伊達に補佐をしませんよ」

ついでに伊達に貴方の気紛れの相手をしていませんよ

私は神様の手を取って踊る

くるりと回るとメイド服がドレスになっていた

「エルザ。あの子はどう?」

「どつってまだ幼いですけど問題無く良い子ですよ」

「そう」

流石に今日は性別返せは無粋ですかね

「『』様。何を企んでいるんですか?」

「・・・何も。それに私は企むなんて面倒な事をした覚えは無いわ。自由気儘で気紛れな神様だもん」

この後、神様は「エルザちゃんとかに会ってくるね」などと言って

何処かに消えた。その瞬間に私の服もメイド服に戻る

・・・とか？今度の気に入った子はどんな子なんでしょうかね

side エルザ

「きゅい！それでエルザはメイドさんになったのね・・・でメイドさんって何してるのね？」

「んー最近はおあなたにご飯をあげに来たり、主様の身の回りのお世話をしたり・・・かな？」

正直なんで私が・・・と言いたいところだけど我慢しないと。おねさま、こと神様のお仕置きが怖い

普通に痛みによる恐怖ならある程度慣れが来るのだから神様のはそんな生易しいモノでは無い

墜ちる

墜ちてきつと何も考えられなくなる

「きつと私も半分くらいはそまっているんだらうなー」

「きゅい？」

「あ、なんでもない」

「ふーん、変なエルザね。ふあゝ今日は眠いのね」

不自然にそう言ったシルフィードは丸くなるとすぐに寝息を立て始める

「ん？竜って夜行性じゃないんだ」

「そうねえ。獣は基本夜行性が多いわよね」

ツ。誰か居る・・・私にもシルフィードにも気付けないような大物が近くに

「そう警戒しないで頂戴。悲しくなるわ」

森の暗闇から神様がゆっくり歩いてくる

「神様？」

「そう、貴方のご主人。神様よっ・・・ウラノラスリーちゃんとダンスもしたし貴方とも遊んであげようと思って・・・あと呼び方には気をつけてね」

「おねえしゃま？」

「うん！そっちが可愛い！」

ああ、そうかーシルフィードが急に寝たのも神様の仕業か

「とは言っただけ来たモノの如何したものかしらね・・・エルザ。何か

したい事でもあるかしら」

何かと言われてもパツと思ひ浮かばない・・・いや前にした事を思  
い出したけど言いたくない

「ん？そう言うのもありだけど今日は気分が乗らないのよね。キス  
くらいならしてあげるけど」

心を読まれた

「あ、あははー」

「エルザ。ウラノスリーちゃんは如何かしら？」

「どう？とても良い御姉様です」

「そうね。綺麗で澄んでいて可愛いわ」

神様の御姉様に対する評価の高さは凄いですね

「おねえしゃま。おねえしゃまは私の事、如何思ってますか？」

「え？吸血少女？」

間違っ  
て無い！間違っ  
て無いけど何か違  
う！

「もっと何か無いんですか？！」

「もっと？我俣ねえ」

おねえしゃまがそれをいいますかあー！

「そうねえー・・・吸血鬼メイド？」

この差別は酷すぎるうううー！

「で、では！御姉様は？！」

「可愛い。済んでいて綺麗で我侂でお人好しで・・・体の相性も私と良いわねえー。あ！あの甘えた時の声も良いのよー潤んだ瞳も、もー襲いたく成る程にツ！最終的に可愛いのよ！あの子は！手に届かないってのもあるのかしらねー？」

ん？手に届かない？

ってそんな事よりテンションから違っー？！

「もう良いですよ・・・私にして欲しいの事はギュウってして貰う事です」

「・・・あら？案外可愛い事言うのね？良いわよ」

神様は私を抱きしめると優しく丁寧に頭を撫でた



神様的には巫女さんはストライクゾーンだそうです

side マチルダ

新たな雇い主。ラスリーから受け取った通りの場所に辿り着くと大きく赤い塗装を施された木製の囲いが立っていた

「入り口のようにけど」

幾つも建てられているそれは見えないトンネルみたい

見た事も無いモノだがこの位ならまだ許容安易。恐れず進んでいると横に広い屋敷が立っていた

貴族が建てる教会は城を模した形状のモノが多い。だがこれは明らかに城とは異なる・・・しかし何処か教会とは違うが教会のような神聖な雰囲気をかもちだしている

とても澄んだ空気

鬱蒼とした竹林はそれを連想させないが呼吸をする度に心が表れるような錯覚を覚えてしまう

「誰ですか」

突然背後から声がした

先程までは確実に人は居なかったと記憶している。しかし現に話しかけられた以上存在している

「ラスリーの嬢ちゃんに雇われた新しい修道女だよ」

「・・・新しい巫女ですか」

何故か聞き覚えの無い言葉に変換されたが気にしないでおう

何処にも存在しないと思っていた少女は上から現れた

赤と白の衣装を身に纏い剣を一本、腰に差している

「どうも。翼人の鈴と申します」

「土くれ。・・・マチルダ」

もうフーケの偽名は要らないか

「貴族ですか」

「没落のね」

特に恨みと言ったモノは感じずただ興味本位で聞いたと言う感じだ。  
いやもしかしたら保護を受けている子の中に貴族を恨む子も居るの  
かも知れない

「まあラスリーお兄ちゃんの推薦なら・・・」

「ブツ！「何か？」い、いや何でも？」

ククッ・・・その無表情のキリッとした顔付きでお兄ちゃんとか可

愛らしく言われると少し吹くね・・・気を付けないと

・・・って言うかあのラスリーって子、何歳な訳？見た目で言えばこの子が断然年上そうだけど・・・お兄ちゃん？

「では案内しましょうか・・・ああ、あとっておきますけど、この神社に立ち入る際に妙な気は起こさないで下さいね・・・死にますから」

死ぬ？！しかも妙な気って・・・まあ最初から信用はされないのは当たり前か

「勿論だよ・・・スズ・・・さ」呼び捨てで良いです」

スズは興味の無さそうに前を向いてそう言うと建物に向かう

後ろに付いて行くと近付く度に気持ち悪いくらい綺麗な感覚に襲われる

「着きました・・・圧迫されているようですね。でも慣れてくださいラスリーお兄ちゃんが張った結界の副産物で仕方の無い事ですから」

結界?! シールドをこの規模で張って維持しているってかい? 未恐ろしいね、あの子は

「あと説明し忘れていましたけど今見える神社の距離と実際の距離は違いますから」

そう言えば先程から一向に景色に変化が無い。幻を見せるタイプの

マジックアイテムを併用している？

「とは言えそれ程遠い訳でも無いので気にせず歩いて下さい」

それから少し歩くと目の前に木製の横開きの扉が現れる

ついでにその隣にボーっと少女が立っていた

「・・・あの子は？」

「カガミです。精霊の忌み子カガミ・・・私も詳しくは知りませんが現象に近い生物だそうです」

少女は此方には反応せず遠くを見ている

取り合えずスズが放置して中に入って行くので今回は放置させて貰う

「この建物はラスリーお兄ちゃんの故郷である日本の神殿。神社と言われる物を模して作ってありラスリーお兄ちゃんを神に拝し加護を受ける形にしています」

中々風情のある建物だね。落ち着く雰囲気結構好きになれそうだよ

「・・・貴方の部屋は此方です」

案内された部屋は不思議な床で特にこれと言って不思議なモノは置いてなかった

「畳と言う物は此方には無い物ですから不便でしょうが慣れて下さい。あとラスリーお兄ちゃんからの伝言ですが金銭面で不便が出る

ようであれば何時でも言ってお下さいとの事です・・・では私は警固に戻りますので。貴方も巫女装束に着替えたのち、この神社でも見回ってください」

スズは軽く会釈をして出て行った

にしても本当に如何したモノか・・・取り合えずあの服に着替えれば良いのだろうけど

「着かたを教わるべきだったね」

後、四苦八苦した結果。まあ着れた

適当に見回っておいてと言われたので気分のままに歩いていると廊下に入り口の所に立っていた子が座っていた

「何やってんだい？」

話し掛けると先程とは違い微かに肩が動き見上げるように此方を向いた

「始めまして。アタシはマチルダ。よろしくね」

「よろしく」

不思議な聞こえ方だった。耳元と言うか空間と言うかとにかく何処から聞こえているのか分からなくなる聞こえ方だった

「新しい人？」

「そうさ。アンタの名は？」

「鏡。精霊の忌み子のカガミだよ、マチルダのお姉さん」

「で？アンタは此処で何していたんだい？」

カガミはゆっくり自然な動作で立ち上がる。そして自然にスカートの埃を払うと腕を組む

「強いて言うなら自分の存在について考えていた・・・かな？」

「存在？」

「うん。私は空に見える雲と対して変わらない。ただそこにあるからそこに居る。水を熱したらお湯になるように冷やしたら氷になるように自然の現象の一つ」

極々自然にそう言ったカガミはアタシに手を差し出す。その手を掴もうと手を伸ばしたが空を切った

「あれ？」

「やっぱりね。鏡花水月・・・それが私の本質らしい。ごめん、長く話し込んだじゃった。またね。マチルダのお姉さん」

「ちよー！」

呼び止めた時には元々居なかったのではと疑うくらい自然に消えて  
いた

我が神社の住み人の紹介です！（前書き）

「お疲れですね。ラスリーお兄ちゃん」

「うん・・・ほら、神様。あの人さ、欲しいモノがあると何が何でも手に入れようとするけど手に入った途端そのモノに対する情熱が無くなるって言う性質の悪い人だからさ」

「・・・そうですね。私も基本あの人がラスリーお兄ちゃん以外に執拗に固執している所は見た事ないですね」

「はあー何で私なんですかね」

「それは私にも分かりません・・・ただ、私はあの人は余り好きでは無いですね・・・特に（ラスリーお兄ちゃんを独占している所が）」

「特に何ですか？」

「い、いえ。大した事では有りませんよ」



我が神社の住み人の紹介です！

神社社の住民（登場のたび追加）

親殺しの翼人 鈴

白の混じる黒髪に鷹の目。巫女装束に刀を差している

穏やかな性格でラスリーを尊敬している。神社では皆の姉的存在になっ  
ていて警固も勤めている  
ちなみに数少ない神様嫌いでウラノスリーを男とキチンと認識して  
いる

精霊の忌み子 鏡

伸びっ放しの深緑色の髪に手足の完全に隠れるワンピースを着ている

何を考えているか分からない素振りばかり行なう、感情やモノの考  
え方、個性と言ったモノが常に変化し下手をすれば姿形さえ変化する。  
存在自体現象のようなモノなので力の満ちた場所や力の強い人  
しか触れない

現象だけにその行動は極々自然な物で言葉は口からと言うより空間  
から聞こえるように感じる

狂い天使 乱

全身を包帯を隠し見えている部分は偶に包帯が緩んでいるのでそこから見える箇所くらい

発音が微妙な英語を使い何時も楽しそうな口調で話す。マチルダがお気に入りに

強い訳では無いが傷付くのも気にせず攻撃を重視する狂戦士タイプなので余り相手にしたくない相手

## 宿り神 巻

### 黒いゴスロリ姿の幼児

基本的に神社の書庫で本を読んでいる、基本無口。他人が注意しない限り恐らく永遠と読み続ける

戦闘能力は殆ど無いが禁書の知識を使った精神攻撃を得意とする

王女来日でメイドさんは大忙しです

side ウラノスリー

今日のメイドさん達は大忙しです。本来専属メイドで学園のメイドでない私やエルザも手伝って欲しいと頼むくらいなので相当なんでしょう

理由を聞くと何でもこの国の王女がやって来るらしい

まあ元々主様の仕事は少ないので手伝うのは構わないですけど

「ありがとな！ラスリーちゃん、エルザちゃん。今度何か作ってやるよ！」

料理長マルトーさんも大忙しのようです

料理を運びながら彼方此方を走りまわる

「へーあれがこの国の・・・」

遠目から見た限りではまだその器では無いと思う。どちらかと言うと隣のお爺さんの方が政治面は強そうだ

周りに居るのは国からの警備の方達でしょうか。いずれも中々だと思えます

暫らく足を止めて見ていると野次馬の中に居たキュルケ様と目が合う

「あ！ラスリーちゃんだあ！ねえねえアンリエッタ様と私どっちが綺麗？」

・・・正直困る質問ですね

「え？そうですねーアンリエッタ姫殿下の綺麗と言うのは少女と言う意味合いでしょうけどキュルケ様のは女性と言う意味合いですね」

キュルケ様は数秒考えた後、喜びまた野次馬の中に消えていった

「それにしても大人気ですね」

ふと見渡すとルイズ様と才人さんが居た

私はルイズ様の他とは違う王女に対する視線に首を傾げながら仕事に戻った

夜。王女が居ると言う事でそれは盛大なパーティーが行なわれている。  
・私も主様も人煩く面倒なので部屋で食事を済ませる事にした

「主様。アンリエッタ様は一体何故あれだけ人気なんですか？」

今日一日チラホラと聞きまわった結果。王女は特に武勇伝がある訳でも無いし何か人の為になる事をした訳でもなさそうだった

私の質問が意外だったのか主様はフォークを置いて眼を瞑って確り

考える

「・・・さあ？」

そして出た答えがこれだった

「ええ?!」

「私、この国の生まれじゃない」

ああ、そう言えばそんな話もありましたね

「御姉様、シルフィードにご飯をあげてきましたー。ついでにマルトーさんがきょうのお礼だってパイをくれました」

エルザが嬉しそうにパイを持って入ってくる。地味に先住魔法を使用してパイを運んでいたので主様に窘められた

「うん、美味しいですね」

「ですねー」

「美味い」

この日は夜遅くまで声がしていたのでかなり遅くまでパーティをしていたようでした

side エルザ

大変だった昨日を明け。御姉様と主様が二人仲良く寝ている、私は早起きをしてそれを眺めている

ちなみに意味は無い

二人は薄着で絡み合っているのでイマイチ健全な様には見えない

此処で卑猥な事を想像してしまう私は随分と神様に毒されているのかも知れない

更にちなみに現在はお昼で私は朝方の仕事を終えてからずっと二人の寝顔を見ている

起こせば良いと思うかも知れないけど二人して寝起きが悪いので無理に起こすと少し危険

「ターバーサー！！！」

キュルケ様が大声で入ってきた

「あ、キュルケ様。ふたりならまだ寝ていますよ」

早歩き気味でベットに近付くへ行ったり来たりを繰り返して覚悟を決めた顔をして敷布団を引っ繰り返した

「わぁーお」

思ったより力持ちだなー

寝ていた二人は当然横に転がり落ちて目を覚ます

私を見てキュルケを見る

「・・・どっち」

「ふあゝもう朝ですかあーエルザは早起きですねえー」

主様は私達二人に杖を突き付け御姉様はゆつたりとメイド服に着替えている

「私じゃないですよ、主様。ちなみに御姉様、もうひるです」

私の言葉に反応して主様はキュルケ様に向かって杖を振りかぶり御姉様は窓の外を見て寝坊したと恥ずかしそうにしていた

「ねえエルザちゃん。なんでタバサったら今日はあんなに不機嫌なの？」

「あーあれです昨日のパーティがうるさくて余りねれなかったらしいです」

ついでにあんな起こされ方をしたら大概の人は不機嫌になると思いますけどね

あれから主様は二度寝

「ごめんね。エルザ、朝の仕事、全部させちゃったね」

「大丈夫です。御姉様、それほど多くはありませんから」

「あ、それでキュルケ様は主様にどの様な御用で？」

「ちょっと頼み事をね？」

御姉様は「そうですか」と笑うと主様の眠るベットへ近付く

そして無理やり立たせると私に制服を取るように指示する。そして私が持つていく頃には全て脱がされていて二人掛かりで着替えを済ませる

「。。。。」

主様は無表情で私達を見ている

「タバサ！お願いがあるの！」

「。。。。」

「寝不足の貴方を起こしたのは謝るわ！だからね？」

「。。。。」

主様は私達三人をジトっとした目で見つめる

「えっ、と、その、ね？お願い？」



余りにもジーっと見つめられて流石のキュルケ様も小さくなる

「はぁー・・・分かった」

そしてとうとう何かを諦め溜息を付くとマントを羽織って扉に手を掛けた

「ありがとぉー！タバサー！」

グリフォンの羽毛布団とか作ってみたいです（前書き）

「あら、それは良いアイデアね」

「そうでしょ！神様！」

「うん！そしたら、ふかふかのベットで無邪気に飛び跳ねるウラノスリーちゃんの可愛い姿も見れるものっ！」

「・・・何かガツカリです」

グリフォンの羽毛布団とか作ってみたいです

side ウラノスリー

休憩を挟まずシルフィードで飛行。キュルケ様の用事は、才人さん達が朝から挙動不審気味に何処かに出かけたので追い掛けて欲しいので何よりも速い主様の風竜で飛んで欲しいとの事

「ちょ！あれ！襲われてるわよ！」

あー本当ですねー。でもあのくらいなら才人さんでもルイズ様でも十分相手に出来るレベルなんですけど

「・・・助ける」

「分かりました。エルザ、主様達を宜しく」

崖の上から弓矢で才人さん達を襲っていたので背後に着地して残らず首の上だけ残して埋めた

この方法結構使えるな・・・うん

「才人さん！」

「ん？おう！ラスリーじゃねえか！」

少し距離はあるけど手を振り合う

あとは埋めた人達を強打によって気絶させて掘り出し纏める

そして主様達と一緒に才人さん達のところに犯人を連れて落りた

「有難う、助かったよ」

あ、髭の男性

この人からは余り良い感じがしないな・・・純粹だけど何処か不純

「いえいえ・・・あれ？ギーシュ様じゃないですか」

「やあラスリーちゃん。ミス・タバサ達と一緒に来たみたいだね」

ギーシュ様は相変わらずキザですけど前と違って清々しいキザですね

「・・・で・・・何でアンタ達が居るのよー?!」

?

ルイズさんが大声で叫ぶので皆が注目する

「全く折角助けてあげたのにヴァリエールは無礼ねー貴方達が朝からコソコソしてたからタバサを叩き起こして追ってきたのよ」

それにしても幻獣グリフォン。毛がふかふかしていて気持ち良さそうだなー

・・・そう言えばこの世界でも獣は言う事聞くのかな？龍なら間違いない無く聞くだろうけど

「おいで？」

私は少しだけ龍神としての威圧を出してグリフォンを呼ぶ。すると予想通り乗っていた髭の男性とルイズ様を落として私の方に寄ってきた

「ふわふわー」

羽毛だー。神様も喜びそうな幻獣だなー

「??、き、今日はラ・ロシエールに一旦止まって明日アルビオンに向かおうか」

髭の人は混乱しながらも皆様に予定を説明していた

ラ・ロシエールに到着後、宿を取り。疲れを取る為にそれぞれの部屋に別れた

「何で私とエルザと才人が一緒？」

まあ此方の常識的に平民より貴族優先。空いていた部屋が足りないのだから我慢して三人部屋になるのは当然平民の私とエルザと才人さん

「ん？二人共女の子だもんな恥ずかしいなら俺は今日は下の食堂の椅子で寝るけど？」

「駄目です!」

エルザは今は主様の着替えの手伝いに行っている

「で、でもさ」

「別に私達は気にしませんよ?それに私は男な訳ですし」

「・・・。」

何ですか、その目は!嘘じゃないです!本当は立派な男の子なんです!

「それに才人さんが好きなのはルイズ様ですし」

「ハア?!」

「違うんですか?」

「ち、ちげえよ」

バレバレ・・・と言うか嫌い何て有り得ない。・・・貴方は神の楯なんだから

「二人共」

微妙な沈黙が出そうになった時、ギーシュ様が入ってきた

「あ、何ですか?」

「ああ、キュルケやタバサ、それにエルザちゃんも下で食事してるよ？キミ達もおいでよ」

「……、ギーシュ。お前ラスリーちゃんの前だと少し人変わってねえ？」

え？そうは見えませんでしたけど……ギーシュ様は何時も通り良いキザの方ですが

「な、なにを！僕は何時も通りだよ！それに僕は女性には優しいからね！男のキミと対応が違うのは当たり前さ」

「むー！私は男ですよ！」

「分かってるよ。キミの勇敢さはそこらの男よりずっと凄い」

そう言う意味じゃなーいーいー！！

私が必死に否定する為にギーシュ様の近くに言って反論したら。何故か顔を赤らめられて才人さんには微笑ましい的な目で見られた

side 鈴

私はラスリーお兄ちゃんが好きだ。これは助けて貰った時が劇的だったから心が勝手に勘違いを起こしているのかも知れない……しかし。いや、それでも私はラスリーお兄ちゃんが大好きだ

「マチルダさん。この神社は如何でしたか？」

マチルダさんもこの神社は割と気に入ってくれたようだ

「・・・こ、この料理は何だい？スズ」

「ラスリーお兄ちゃんの故郷の食べ物ですよ」

私はそれしか作れませんし作りたくも無いです

食卓には現在マチルダさんしか座っていません。しかし窓も開いていない部屋に風が吹くと

「スズの姉さん。今日も美味しそうだね」

カガミが美味しそうと料理を覗き込んでいた

全く。何時も扉から入れと言っているのだが・・・

「他の妹達は何処だ？」

「マチルダのお姉さんの監視をしていると思うよ？皆、恐がりだから」

ふう、仕方ない。あとでそれぞれ届けに行くとする

「はあ、ラスリーお兄ちゃんが選んだ人なのだから信用しても良いだろうに」

「まあそんなにすぐには信用出来ないさ。人は・・・」



人？此処に人に分類して良い奴など居ないだろう。人に憧れているモノは沢山居るだろうが

「食べて良いかな？スズの姉さん」

「ああ、良いぞ。良く噛むのだぞ」

「うん！」

今日のカガミは素直なのだな

マチルダさんの事も気に入っているようだし、やはりラスリーお兄ちゃんの人を見る目は凄いな

漢と漢の戦いは勝った方も負けた方も格好良いと私は思います

side 才人

手合わせ願いたい

魔法衛士隊、隊長ワールドはそんな事を言ってきた

当然俺には受ける気なんてこれっつぽっちも無かったけど余りにもウザイので引き受けた

「王がまだ力を持ち、皆がそれに従った時代。かのフィリップ王の治下ではよく貴族が決闘したものさ・・・名譽と誇りをかけて僕たち貴族は魔法を唱えあつた・・・でも実際はくだらないことで杖を抜いていたそうだよ。そう例えば女を取り合ったりね」

くだらない事か・・・俺にはソイツらの決闘に立ち会った訳でもねえけど本当に女を掛けた決闘はくだらないのか

「早く構えて下さいよ」

「まあまあそう急ぐな・・・立ち会いはそれなりの作法がある。介添え人が居なくてはな」

「介添え人？」

「ああ、だから取って置きの子を呼んできたよ」

タイミング良く足音が聞こえてきた

「才人さん？」

「サイト！」

ルイズに・・・何故かラスリーちゃんまで居た

「ワルド様！今は姫様の任務中なんですよ？！今すぐ杖を収めて下さい！」

「だからだよルイズ。僕はキミの使い魔が本当にキミを守るに相応しいか見極めないと」

「だから！今はそんな事をしている場合では無いでしょ！」

「悪いね。僕の小さいルイズ。何だかんだ言って僕も男だからね。どちらが強いかが気になるのさ」

杖から白い光が伸び一本の剣のように見える

「俺・・・不器用ですから。手加減出来ませんよ？」

「かまわん。全力でこい」

ム力つく余裕面だ

足に力を入れ地面を強く蹴り駆け出し何時もの様に素早く近付いて斬り掛かる

「ふむ」

ワールドは特に表情を変えずに受け止めると素早い突きを放ってきた  
それを弾き横合いに薙ぐと後ろに跳ばれ距離を置かれる

「確かにキミの動きは速い。そこらのメイジになら楽に勝ってしま  
うだろう・・・しかし様な本物のメイジには勝てない」

「うるせえ!」

交わる杖と剣

「デル・イル」

奴は一步間違えば剣の攻撃をくらうこの状況で呪文を唱えている

「相棒!魔法が来るぞ!」

「分かってる!」

それでも向こうの攻撃を捌くだけで精一杯

「やはりキミは・・・ただの素人だ」

杖に纏り付いていた白い光が消えて代わりに魔法が飛んできた

俺はそれに直撃してしまい大きく飛ぶと後ろにあった樽の山の中に  
突っ込んだ

「・・・コノオツ!」

そして立ち上がるうとした瞬間目の前に杖があった

「勝負ありだ」

「。。。。」

クソッ！勝てるとは思ってなかった。仮にも向こうは隊長だし・・・でも一撃も入れれないなんて・・・

「分かつたろうルイズ・・・彼ではキミは守れない」

・・・俺ではルイズは守れない

「そんな事ない！・・・それに貴方は魔法衛士隊の隊長なんだから強いのは当たり前で・・・」

「確かにそうかも知れ無い。だがアルビオンに行けばそこは戦地だ。敵は選べない。弱いからと言って向こうも杖を収めてはくれない・・・それともルイズ。僕たちは弱いので見逃して下さいっと言って向こうの貴族達は見逃してくれるのかい？」

正論。胸糞悪りいけどアイツの言う事は正しい・・・俺はルイズを守れない

今回ばかりはアイツの方がルイズには相応しい

「サイト・・・大丈夫？血が・・・」

そう言って立ち上がる俺に近寄ろうとするがふと立ち止まって黙っ

て此方を見る

「行こうルイズ。一先ずは一人にしてやるう・・・さあ」

「そ、そうね・・・サイト。私は・・・私の使い魔はアンタだって思ってるから」

無言の俺にそう声を掛けるとルイズはワルドに引かれて宿に帰って行った

「・・・ラスリーちゃんにも格好悪いとこ見せちまったな」

「格好、悪い。ですか？私はそうは思いませんよ。本当に才人さんの戦っている姿は頼もしいです・・・私が女だったら惚れそうですよ？」

ラスリーちゃんは笑ってそう言うと切れた頬を撫でる

「い」

「あ、ごめんなさい」

前に感じた事がある暖かな感じが体に流れ傷が治った

「・・・？」

「他に痛い所はありませんか？」

顔覗き込むように見てくるのでとても顔が近い

「な、ない！ありません！って言うか女だったらってラスリーちゃん女じゃねえ？！」

「・・・ふう、いい加減に覚えてください。私は男です。なんなら確認でも取りますか？」

確認？！確認つてまさか！・・・

「だ、駄目だよ。そんな事！」

「そうですか？そんなに強く言うのならそうしますけど・・・ああ、才人さん。あのワルドと言う方。気をつけて下さいね・・・あの方は嘘を付いていますから」

嘘？

「それも悪い嘘ですよ。誰かを傷つける嘘・・・まあとにかく気をつけて下さい」

そう言つてラスリーちゃんは背を向ける。がすぐに此方を向いた

「そう言えばお食事に呼びに来たんでしたっ、一緒に行きましょう  
！」

手を握り見た目に似合わず強い力で俺を持ち上げると手を引いて歩き出した

・・・やわらかい手だなー

「ん？少し体が強張ってますよ？やっぱり何処か痛い所を我慢して

「ませんか？」

本当は女の子と手を繋ぐと言うシユチュエーションに緊張していただけなのだが、ラスリーちゃんは心配性なのか勘違いして俺の体の彼方此方をペタペタと触る

「ら、ラスリーちゃん?!」

「少し動かないで下さい」

触診と言っのだろうか。やわらかい手がペタペタと上から下まで触る

更にラスリーちゃんは自分を男と言い張っている。今まではそれでも良かったのだが今回はヤバイ・・・余り言えないけど色々ヤバイ

「って！それ以上は良いから！マジで！本当に！大丈夫だからー！」

「・・・そうですか。でも痛かったら遠慮なく私に言って下さいね」

残念そうに俺の上着を手渡すと再び宿に向かって歩き出した

にしても良かった・・・流石に下は無いよなー



男は護るモノがあれば幾らでも強くなれるそうですよ。(前書き)

「つてな訳でギーシユ様。格好良かったですよ？」

「あ、うん、何だかテレるね」

「最初の頃は私はギーシユ様の事が苦手でしたけど今では全然です。あ、そう言えば修行をしているって言っていましたけど、どの様な？」

「ん？ああ、僕の父が元帥でね。軍所属だからそう言った鍛錬マニュアルみたいなのには事欠かないんだよ・・・ちなみに今はブレイドを使った接近戦を行いつつ呪文を唱える訓練かな」

「へーちよつと意外です。ギーシユ様は余り熱血系の方には見えませんから」

「ま、僕も女性を護る為なら熱くなるさ」

男は護るモノがあれば幾らでも強くなれるそうですよ？

side ウララスリー

才人と一緒に皆様が集まっているラウンジに行く

「遅れました〜！」

「あ、ラスリーちゃん！あーダーリンを連れてきたのね！」

キュルケ様が自分の席の横の椅子を引いて座るようにポンポンと叩く

「では、失礼して」

「ダーリンはギーシユの隣ね」

「あ、ああ」

先に帰ったはずのルイズ様と髭の人が居ない・・・んう

少しは気になったけどすぐに何かが起こると思えないので皆様と  
食事をする事にした

・・・しかし少しと言うか私の食べ始めるタイミングを待っていた  
のか武器を持った人々が乗り込んできた

そしてその人達は行き成り弓を構えた

「・・・伏せる」

「皆！伏せて！」

主様は素早く机を楯にしてギーシュとエルザを隠す。同じくキュルケ様も近くの机を楯にして私と才人さんを隠す

そして二人は杖を構えて乗り込んできた人を見る

改めて主様達の動きの速さに驚かされた

「タバサ。如何思う？」

「・・・さっきの物取り」

「確かに見た目は同じね。何処かのゴロツキの傭兵かしら」

傭兵だしたら雇ったのは誰か気になる・・・しかもこのタイミング。何かを狙っているとしたら考えられない

ルイズ様達は元々極秘任務で来たらしい、その情報が何処からか洩れたの可能性がある

「如何する？逃げるにしても誰か囷にしないとこれは無理ね」

・・・確かに、此処に居るのはメイジとは言え学生この数の傭兵の相手は荷が重い

「なら「僕が囷になる」え？」

私が名乗りだそうとした瞬間ギーシュ様が立ち上がった

「で、でも」

「此処に居る男は僕とサイトだけ・・・だったらメイジの僕が残るのは当たり前だろう?」

ギーシュ様は何時ものように薔薇の杖を手に持って格好付ける

「出来るのね。ギーシュ」

「もちろん」

「そう・・・皆! 此処はギーシュに任せて裏口から逃げるわよ!」

私も残ろうとしたのだけどキュルケ様に引っ張られて連れて行かれた

155

side ギーシュ

僕らしけど僕らしくない。何時もの僕は確かに格好付けただけど意気地なしだった

だけど修行を始めて何だか少し強くなった気がして自信が付いた

僕だってこの数、相手に勝てるとは思ってないけど時間稼ぎくらいなら出来る

「はぁーって言うかあそこで引いたら男が廃る!」

こんな熱いセリフはガラじゃないけど偶になら良いと思う

僕は机からとび出して堂々と立つ

「我が名は青銅のギーシュ！由緒あるグラモン家の子息！死にたくなかったら引くといい！」

杖を振って七体のワルキューレを創り出す

大声を出したおかげか少し怯んでいる

「怯むな！相手はメイジと言ってもただの餓鬼だ！」

リーダー格のような男がそう言うと途端に元気を取り戻し襲い掛かってくる

ワルキューレを半自動制御にしてブレイドを発動する、そしてリーダー格の剣戟を防ぐ

しかし体格的に向こうが大きく力も向こうが強い・・・段々と押されていって膝が崩れ落ちそうになる

そしてとうとう均衡が崩れ浅くではあるが斬り付けられる

「へへっ。頑張ったじゃねえかニイチヤン」

僕の苦しそうな顔を見てリーダー格の男は下品に笑う

ワルキューレの維持で精神力を奪われ大した傷でも無いのに酷く頭

がクラクラする

それに確認してみると実際ウルキューレで倒せた数は半分も満たない

「・・・お前ら！さっきの女たちを追え！」

命令されて複数の傭兵が裏口に向かう

僕は当然ウルキューレを全部裏口に向かわせて傭兵の通せんぼを行なう

「待ちたまえ」

「なんのつもりだ？」

「何って。そこは通行止めだよ・・・通りたいなら僕を倒して行くんだね」

リーダー格は怒った表情をして笑い出す

「ハハハハ！貴族にしては根性あるじゃねえか！そんなに死にてえならお望み通り殺してやるよっ！！」

僕に対しての敬意のつもりなのかリーダー自ら掛かってきた

ウルキューレは先程裏口に回してしまった。ブレイドは一応発動するがかなり精神力が減っている為、強度は期待出来ない

つまりは討つ手無し。しかし時間は稼げたはずだ

大きく振り上げられる剣

それはゆっくりと落ちてくるように見えた

「前から言ってますけど私は男なんですからね」

落ちてくる剣は少女によって手首を押さえられて僕の目の前で止まっていた

「ら、ラスリーちゃん?!」

「戻ってきました」

轟音がした。と思うとラスリーちゃんに抑えられていたリーダー格の音が向こう側の壁にめり込んでいた

「ギーシュ様のおかげで皆様、無事に船に到着した頃と思います・・・有難う御座います」

ペコリとラスリーちゃんは可愛らしく礼をした

僕はいったいどんな表情をしているだろうか

「お、お頭！野郎！」

周りに居た部下の傭兵達はリーダーがやられたのにも関わらず逆にそれを力に変えて一気に襲い掛かってきた

「あぶな」

「い」と繋げようとした所で全てが片付いていた

その時にはラスリーちゃんが最後の一人を埋めているところだった  
何か何処かの死刑場のような有様になっている

「は、はは」

首が沢山

「え、つと・・・あ、宿の主人。これは修理代です」

何でもない風のラスリーちゃんは隠れていた主人を見つけ出して宿  
を修理する為に必要な額のお金と少しばかりの謝罪金を渡した

・・・なんて確りした子だ

「遅れてますけど。行きますよギーシュ様」

「そ、そうだね」

握った手から暖かい力が流れた気がした

そして僕達は皆を追いかける為に小走りで港に向かった



## アタシの一日byマチルダ

side マチルダ

つい先刻の話、雇い主に私の大切な子達を神社に入れても良いかと聞いたところ不機嫌な女性が現れて舌打ちされた挙句に「何である子が居ないのよ」などとブツクサ言ったあと許可が出された

更に驚いたのはあの温厚なスズがその人の食事だけ何か得体の知れない物体を置いた時は笑うしかなかった

ちなみにこんな感じだった

「何かしら？これ・・・」

「知りませんよ。その辺に合ったのをフライパンに打ち込んだだけですから」

「喧嘩売ってるの？えっと「鈴です」そう鈴ちゃん」

二人の間には火花が散っているように・・・と言うか物理的に散っていた気がする

「喧嘩ですか？ええ売ってますよ。ラスリーお兄ちゃんを解放して下さい」

「ハッ、開放だなんて勘違いも甚だしい言葉だわ。それに貴方程度で私に喧嘩を売るなんて調子に乗らないでくれる？」

この後スズの機嫌は直らず偶に発生する強盗が血祭りにあっていた事は私の心の中だけで収めておこう

アタシの一日は神社前の掃き掃除から始まる

「ん？ランじゃないか」

ラン。白く細長い布を体中に巻いていて中の顔は見た事は無いが体格や体のラインから判断するに十代前半の少女なのではと私は踏んでいる

「キャハハ。ぐっどもーにんぐ！毎朝ご苦労だね」

とても楽しそうな弾んだ声で口を横に大きく開いて笑う

「ランこそ何をしているんだい？」

「ワタシ？あー、草むしりだよ」

布の色が白なので鮮やかな赤色や何処かで遊んできたのか土汚れも目立つ。自分の血なのか他人の血なのか一見では分からないが触れないのが一番だろう

「にしてもマチルダさんはぐっどうーまんだよね」

ランは良く分からない言葉をよく使つがまあ今のはきつと褒めてくれているのだろう

「ん？そつでもないけど・・・まあありがと」

「キャハハ。ワタシ達の事を受け入れている時点で本当に良く出来た人間だと思うよ」

「アタシからしたらどいつもこいつも可愛い子供さ」

ランの口が一層横に開く。いい加減裂けないのか？

「キヒツ、キャハハハハハ！」

何だか満足したように笑い尽くし鳥居からおりていった

次に神社内の掃除。拭き掃除がメイン・・・畳は掃きだけど

「今度はカガミか」

「今度は？」

「朝からランに会ってね」

「良く死ななかつたね」

聞かなかつた事にしよう・・・確かに危ない雰囲気纏つた子ではあるね

「ま、そんなの此処に来た時点で覚悟は出来るか」

「ふあゝ」と眠そうに欠伸をして二度寝すると帰っていった

昼は小休止。スズの作ってくれた昼飯を食べてゆっくり寛ぐ

「あの子達は何時頃着くかねえ」

鼻で送った手紙に道と路銀を入れておいたから数週間を着くとは思  
うけど

それにしても此処の書庫は国の書庫以上に保管している本の数は多  
いのではないと思う

更に奥には禁書らしきモノも多数存在していた

「・・・風呂には入ってるかい？」

奥の奥、見ただけでも危なさそうな本ばかりある所に黒くフリフリ  
が無駄に多くついたドレスをきた幼児が座って本を読んでいる

「マキ、聞いてるかい？」

マキは本を読むのを止めてアタシの顔を見る為に視線を上にあげた

「また何日も此処に居るんだろっ?」

コクンと頷く

「なら風呂に入らないとアンタも女の子なんだから」

今度は首を横に振る

そして小さな指で本を指す

つまりはまだ読書中と言いたいらしい

「駄目だアタシも一緒に入ってやるから」

首が斜めに下がる

「ほら、悩むようならさっさと行くよ」

こうして小休止の時間は風呂の時間となった。にしても湯を溜めて入ると言う概念は此処にきて初めて知ったが中々良いものだった・  
・露天などな

夕方。スズが夕食を作っている間はアタシが此処の警固を任されている

とは言え強盗や盗賊や人買いなどなど、此処の特殊な子達を狙う者たちは週二のペースでやってくるので恐らく今日は来ないだろう

「キャハハ、警固ご苦労マチルダさん」

行進のように大仰に大股でランが帰ってきた

「遅かったね。いまスズが夕食を作ってるよ」

「そりゃあタイミングが良かった！ワタシ、じゃすとはんぐりーだからねーキャハハ」

「そうかい」

何気なくランに背を見せた瞬間だった

「まあお腹を満たすだけなら別に美味しいとか不味いとか関係無いけどね」

耳元でそう囁かれ首筋をペロリと舐められる

「ッー！」

慌てて振り向くと既にランの姿は無く私の横を通り抜けて神社の戸に手を掛けているところだった

「キャハハ！安心してよ！マチルダさんは食べないから！」

何の根拠も無くそう告げてランは入って行った

「はあー全く、此処じゃ命が幾つあっても足りないよ」

それでも今では居心地の良い場所と思えてはいるんだがね

普段優しい人に限って怒った時は怖い・・・わ、私の事じゃないですよ？（前書

「ラスリーお兄ちゃん・・・自分から自分だと言っているようなモノですよ」

「キャハハ！あの人はきゅーとな属性の人だからねっ！」

「・・・お前もラスリーお兄ちゃんが好きなのか？ラン」

「ん？ワタシは違うよ！安心してっ！ワタシはもっと年上が好きなのさっ！キャハハ！」

「ラスリーお兄ちゃんも結構年上なんだがな」

普段優しい人に限って怒った時は怖い・・・わ、私の事じゃないですよ？

side ウラノスリー

如何にか私が龍化する事によって先に行っていた皆様とアルビオンで合流出来ました

あ、ギーシュ様なら龍化を見せる訳にはいけないので少し眠ってもらいましたよ？

「御姉様。実は・・・」

アルビオン皇太子に合いそれぞれの部屋に案内されエルザと二人つきりになった、そしてエルザから明日にレコンキスタの軍にアルビオンが特攻を掛ける事を聞いた

数では向こうが圧倒的に多く勝ち目の無い戦いと言うのは皆が分かっている

「そうですね。私としてはウェールズ皇太子には死んで欲しくないんですけど」

恐らく私がアルビオンに加担すれば間違いなく戦況は引っくり返るだけどそれは本当に良い事だろうか

「あ！でも良いニュースもありますよっ！」

「それは良い知らせですね。なんですか？」



「ルイズ様とワルド様が御結婚なさるそうです」

なるほど、それはお目出度い事です・・・たぶん

ワルド。んーなんだかあの人には良い印象は持てない、何故だかはまだ分からないけど

「式はあげるんですか？」

「朝方にあげるそうです。皆さんも出席なさるそうですよ？・・・ただ才人は」

・・・才人さん。好きな人が結婚、どんな気持ちなんだろうか

神様が結婚・・・有り得ないな。うん、あの人がまともに男に興味を示した所を見た事が無い

「では私達も何か送り物でも考えておきますか」

「はい、御姉様」

side 馬鹿上司

やつふうー！久々神様だよっ！

・・・虚しいな

「にしても誰もリアクションしてくれないから寂しいとしか良い様が無いわね」

一応他の神や天使が居ない訳ではないけど興味無いし詰まらない相手だから寄せ付けないようにしてる

あ・・・この間のウラノスリーちゃんの神社に行った時はかなりガツカリだったなー

ウラノスリーちゃんが呼ぶからテッキリ居るのかと思ったたら不在で拳句に何か増えてたし

・・・。

はー、退屈

新しい玩具でも探しに行こうかなー

「そう言えばさっきブリミルの子孫が結婚するとか話してたっけ」

結婚ねー・・・ウラノスリーちゃんと今度式でもあげてみようかしら

うん！それは楽しそうね

「そうと決まったら早速準備！」

side キュルケ

くうー

あのルイズが私より先に結婚しちゃうなんてっ！

まあそれでこそツエルプストー家のライバル、ヴァリエールね！

「それにしても変な話よね。大切な任務で来てるのよね？あの子達」

極秘と言っていたから内容までは聞いてないけど

「これから栄誉ある死を迎えるアルビオンの人達に良い出来事を一つでも増やしてあげたかったのだろう」

「・・・居たの？ギーシュ」

ドヤ顔・・・ムカつくわね

「酷いね。居たさ、ついでに此処に来てから妙にお腹が痛いんだね」

「知らないわよ。昨日のパーティーで食べすぎたんじゃない？」

「んーどちらかと言うと殴られたような痛みなんだけど・・・」

寝てる間に何処かにぶつけたんでしょ

「タバサは如何思う？」

「・・・興味無い」

んータバサも好きな人が出来たら分かると思うよ・・・なんて言わない方が良さそうだから口には出さないけど

「・・・ラスリー？」

「？、ラスリーちゃんなら一応平民って事で端の壁に控えて・・・控えている、普通に。しかし表情が優れない・・・体調でも悪いのだろうか

隣のエルザちゃんはまだで監視しているような目付きでルイズとワルド子爵を見ている

「私、ウェールズ・テューダが始祖ブリミルの名において詔をとなえさせて頂く」

誓いの言葉が始まったわ

結局ダーリンは来ないか・・・

「新郎 子爵、ジャン・ジャック・フランシス・ド・ワルド」

子爵。階級的には低いけど魔法衛士隊グリフォン隊、隊長だし皆から羨ましがられる相手ではあるでしょうね

「はい」

「汝は始祖ブリミルの名において、このものを敬い愛し、そして妻

とすることを誓いますか？」

「誓います」

「……では、新婦。ラ・ヴァリエール公爵三女、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブランドラ・ラ・ヴァリエール」

本来すぐに返事をするものだけどルイズは何故か何も言わず黙ったまま

「ラ・ヴァリエール嬢？」

「ルイズ？」

そしてそれを不思議に思ったワルド子爵とウエールズ皇太子に呼び掛けられてようやくハツとした

「あ……は、はい！」

「どうしたのかね？気分がすぐれないのならば……」

「いえ、大丈夫です」

？

あの何時も元気で煩いルイズには珍しい

その後もルイズの様子が可笑しいまま式は続いていく

……そして

「新婦？」

「あ、あの、あのお二方には大変失礼を致しまして申し訳ありません！このご無礼をお許しく下さい！」

「一体どうしたというのかね？日が悪いなら改めて・・・」

「いいえ」

何か決心した表情でウェールズ皇太子の質問にハツキリ答える

「じゃあ少し休もうか？」

「違うの」

ワルド子爵にも同じ様子

「そうじゃない・・・そうじゃないの！」

「ルイズ?!」

「答えが決まったの・・・私はあなたとは結婚できない」

「え？」

へえ・・・面白くなってきたわね

「し・・・新婦はこの結婚を望まぬと？」

「はい、そのとおりでございます！わたくしはワールド様との結婚は望みません！」

「・・・ワールド子爵、お気の毒だが式は続けられぬようだ」

黙って聞いていたワールドの様子が豹変した。当然同時に私もタバサもギーシュも杖を握った

「世界だ、ルイズ！僕は世界を手に入れる！そのためにキミが必要なんだ！」

「な、なにを？」

「キミは始祖ブリミルにも劣らぬ優秀なメイジになると言っただろう？！僕はその才能が欲しい！」

ボロだした・・・今まで時々思っていたあの冷たい目の理由が分かった

「子爵！式は中止だ！それ以上ラ・ヴァリエール嬢に無礼をはたらけば我が魔法の刃がきみを切り裂くぞ！」

「お願いだよ、ルイズ・・・僕のために結婚してくれ」

ウェールズ皇太子に止められても女々しく引き下がらない

「ふざけないで！誰があんと結婚なんかするもんですか！」

「そうか・・・この旅でキミの気持ちをつかむために随分努力したんだが・・・残念だ目的の一つは諦めよう」

「目的？」

「そうだ、この旅における僕の目的は三つあった。その二つが達成できただけでもよしとしなければな」

旅の目的

私とタバサは聞き耳と立てながら何時でもワルドを抑えられる位置に移動しようとする

「一つはルイズ、キミを手に入れる事・・・二つはキミがウェールズから受け取ったアンリエッタの手紙・・・そして三つ目は」

・・・まさかワルド子爵は！

「貴様の命だ！ウェールズ！」

ワルドは素早く杖を取り出すブレイドを発動させるとウェールズ皇太子に突き立てる

「・・・おい、屑」

「なっ！」

誰も反応出来なかった中、ラスリーちゃんが動いた

「見抜いていたはずなのに・・・これですか、最初から厳しくすれば良かったです」



俯いたラスリーちゃんは誰も寄せ付けない雰囲気を纏いワルドの腕を掴んでいる

「は、離せ！平民！」

「屑が、屑が、屑がつ、屑が！」

ワルドの肘から手首に掛けてくの字に折れる

「あ、ぐあああああ！」

「最悪だ、最低だ、最劣だ」

顔をようやくあげたラスリーちゃんは何時も第一印象に可愛いと思わせる女の子では無くまるで悪魔や吸血鬼、エルフなど恐怖を思わせる何かになっていた

「お前は許さない」

痛みに耐えながら早口で魔法を詠唱していたワルドの口にラスリーちゃんは容赦無く手を突っ込んだ

「あがつ」

「これ以上は何もさせない。呼吸さえ」

ラスリーちゃんが大きく空いている右腕を引いた。弓を引く動作に似ている

ただどその時ふわっと風が吹いた、すると物凄い眠気が私に襲い掛

か  
っ  
て  
き  
た

才人さん・・・えと本当に不思議な人です

side GOD

あ、新しい・・・じゃなくて！やばいやばい！本当になんでこんな事に？！

「なんでウラノスリーちゃんがブチキレてんの?!」

あの温厚なウラノスリーちゃんが・・・

理由はともかく今は止めに入らないと！やばい！あーでも！えつと

世界におりるにはある程度の下準備が居るし、神社に伝えても間に合わないだろうし、エルザちゃんじゃとてもじゃないけどウラノスリーちゃんを抑えるなんて不可能だし・・・て言うかウラノスリーちゃんとガチな戦いで勝てるのは私くらいだし

あー！無理だー！でもまだこの段階でウラノスリーちゃんが人を殺すのは早いのにい

「・・・あつ、同じ神の楯なら」

才人君

無理だな。同じでも質が全く違うしあの子の場合はまだ十分に覚醒もしてない

でも、今は・・・

「一先ず映像を見せて・・・あら？」

既に才人君の目に今の光景が映っている？何で？ガンダールヴにそんな能力は・・・まさか、ウラノスリーちゃん？

そう言えば前に力を送っているはず

まあ全てはあと回し！全力でバックアップしなきゃ！

side 才人

「ルイズ！ラスリーちゃん！」

目に映る危険を察知して教会飛び込んだ俺の目には悲惨な光景が待っていた

全ての柱は壊れ今にも倒壊しそうな教会

中に居る人達は皆一様にぐったりと倒れその中で唯一動いている二つの物体は両方共に真っ赤になっている

「ワルドオオオオオ！」

全身の血液が沸騰していると勘違いしそうなくらい熱い

「くっ、こんな時にガンダールヴ」

ワルドは片手が肩口から引き千切ったように失っておりボタボタと血が流れ出している

「さい、とさん」

ラスリーちゃんはワルドの腕を思わしき物を所持していて何かが違う表情をしていた。それでも俺を見た瞬間だけ何時もと同じ表情に戻る

「ルイズは！」

「ルイズ様なら・・・そこに」

ルイズはウェールズ皇太子の上に覆い被さるように寝ている？

「あーで、ようはアンタが敵なんだな」

「ほお、私に・・・と言いたい所だが貴様が来てくれたおかげでこの子に隙が出来たよ」

「あ、おい！」

逃げた。なんかワープみたいなので逃げた

「ルイズ！」

すぐにルイズに近寄って無事を確認する。どうやらウェールズ皇太子共に本当にただ気絶しているだけのようだ

順を追って他の人も確認するけど皆外傷も無く気絶していた

「ラスリーちゃん」

「……。」

俺は距離を取ってラスリーちゃんと向き合う

「さ、皆で帰ろうか。姫様に報告しないといけないし」

「……」めん、なさい」

「何が？」

ラスリーちゃんは泣いていた、手に付いた血が涙を拭う度に顔についている事も気にせず小さな子供のよう泣いていた

「私をもっと……もっと確りしていれば才人さんの大切な人は傷付かなくてすんだのに」

「それは……俺も同じだよ、俺も皆がこんな目に合っていたってのに一人でイジけて帰ろうとした」

「それに、私は怒りに任せて人を殺めようとした」

「それはお互い様なんじゃないの？向こうも殺る気だったんだし……それにラスリーちゃんが怒ってくれたおかげで皆が無事なんだろ？だったらアリガト、俺は感謝してるよ」

「ズルイです」と呟いたラスリーちゃんは駆け寄ってきて俺に抱き

着く

「ズルイ、本当にズルイです。才人さん」

見上げて俺を見るラスリーちゃんはとても色っぽくて濡れた瞳とか潤んだ唇とか本当に男心を撥られる

だけどその時、俺の思考を遮るように女の人の声が教会内に響いた

「はい！ストップ！止まりなさい！特にウラノスリーちゃん！貴方はそのままの体制で。これは主としての命令よ！」

「あ、神様」

ラスリーちゃんは俺の脇の下から顔を覗かせて女性を見る

「・・・良かったわ。落ち着いてるみたいね・・・えっと、才人君以外はちゃんと気絶してるみたいだし今回はセーフかな」

「・・・セーフ？」

この女性とは前に何処かで会った気がするんだけど・・・

「ああ、才人君。有難うね、貴方が此処に来なかつたら色々計画がおじゃんになるところだった」

「計画？私がこの世界に来たのは思い付きでは・・・」

「あ、ヤバっ」

口を滑らせたと女性を自分の口に手を当てる、と言うかあの人、心の声駄々漏れじゃねえ？

「まあまあ良いじゃない！ほらっ！貴方達、早く逃げないとレコンキスタとかって連中が攻めてくるわよ。蒼髪の子の龍が向かえに来ているしラスリーちゃんも龍化すれば余裕で皆を運べるでしょ」

確かに、この教会も壊れ掛けで危ないし早々に逃げないといけない

「分かりました。今回は何も聞きません、ですが神様も手伝って下さいよ」

「分かってる。ブリミルの子孫と蒼髪の子は私が運ぶから皇太子とキザなのを才人君、そして赤髪の子とエルザちゃんをウラノスリーちゃんが・・・これで良いわね？」

その後も女性的的確な指示によって俺達はトリステインに戻れた

side 神々

かみかみねー・・・なんだか可愛らしいわね

それにしても折角ブリミルの子孫の結婚式のあとにウラノスリーちゃんとのって思ってたのに残念だわ

まあでも最悪の事態だけは回避出来たのだから今回ばかりはこれで良かったとしか言い様が無いのだけど



「それにしても」

拾ってきたは良いけど如何しようかしら、この皇太子

拾ったって言うかすり替えてきたって言った方が正しいのだけど、  
今頃向こうの皇太子は死んだように見えている頃だし

全く、折角組み込まれたと思ったたらすぐに外れるような行動を取る  
んだからっ・・・可愛いわねえもう！

じゃなかったー！

本来なら死んでもらうのが手っ取り早いんだけどウラノスリーちゃん  
が助けた命だしなー。私が殺したなんて言ったら今度こそ「頂いた  
御名前返上します」とか言いかねないしなー

「・・・いつそ神社に放り込んじゃおうかしら」

あの盗賊だった奴も確かアルビオンの出だったはずだし気は合っ  
つて  
しよ

「・・・だけどやっぱり不思議ねー」

何で才人君の目はあの時の光景を映していたのかしら？

side ウラノスリー

あれから数日。アルビオン軍はやっぱりレコンキスタの大軍に敗北したらしい

城に向かう道中にウエールズ皇太子は今までの無理が祟ったのか病で死んでしまう

それでも才さんとルイズ様は城に向かい私達は学院に戻った

「はあー」

「まだ気にして入らしているのですか？御姉様」

私が気にして入る事。それは私の力でもウエールズ皇太子の死を回避出来なかったこと

それほどに弱っていたのか自ら死を望んでいたのか、今となっては分からない

「まあーそれなりにね。でも、もう大丈夫早く主様の服を洗濯し終えましょう」

「はい！」

それに・・・神様が何か理由があつて私を此処に送ったことは分かった。次に会った時には問い詰めないと・・・

私の知らない所でも話は進む(前書き)

「キャハハ！この場を任されたけど一体何を話して良いのか分かんないなっ！ね！マキ」

「……。」

「みすちよいすだよねっ！これって、キャハハ！……え？なに？あーうん、今回はワタシ達のお話らしいよっ」

「……。」

「ま、ワタシとマチルダの愛の劇場でもお楽しみあれってね、キャハハ！え？そんなの無いって？いやいや、言っておけば何とかなるかもよっ！さあマキもっしゅを」

「……。」

「書庫の増築？なるほどなるほど、マキらしいねっ！キャハハッ！」

## 私の知らない所でも話は進む

side 鈴

最悪の知らせが届いた・・・あの横着武人な年増の神野郎が再び此処に来てある人物を加えるらしい

全く、今度はどんな女の子だろうか。調教されてなければ良いのだけれど

もしされていたらその子が可愛そうだ。アイツは此処に入れた者達の半数も記憶に留めていない

ま、私はせいせいするんだけど

「キヤハハ！ぐっどやんぐまん、丁度良い所に来たね！うんうん！ワタシは今とってもお腹が空いていたから本当に丁度良かったよ！！」

鳥居の先の石段の下の方でランの声がした。正直ランは私は苦手だ、一応全ての妹達を纏めている立場ではあるが折り合いが悪い子も居る

「ちょ！待ってくれ！私は物取りとかじゃないんだ！此処に行けと始祖ブリミル様から！」

「キヒヒツ知らないよー、それにお腹が空いている時に目の前の肉は我慢出来ないに決まってる！だよね！」

あー終わったな。下の奴

お悔やみ申し上げます・・・はい、終わり

「止めないのかい？スズ。あれ一応お客のようだけど」

「マチルダさんですか、別に構わないですよ。あれは神様の客ですから、むしろ・・・いや、これは望むモノでは無いですね」

「神様ねー、胡散臭い。おっとこれは独り言だよ？・・・どれどれ、どんなお客か・・・あれはアルビオンの・・・皇太子様じゃないか」  
皇太子と言えば皇位継承第一人者か

マチルダさんは何やら慌てた様子で石段を駆け下りていった

「ラン！止まれ、そいつはアタシの客だ！」

「マチルダの？」

ん？ランの奴マチルダさん呼び捨てにしていたか？

「そうだ」

「え！なになに！マチルダのばーいふれんどって奴！キャハハ！」

「違う。ただ知り合いなだけだ」

「キャハハ！良かった！良かった！それは良かった！うんうん！気が変わったよ、ないすがい！マチルダのお客なら丁寧丁寧に扱わないとね！」

ランの殺人衝動まで抑えるとは、マチルダさんは優秀だな・・・最初はたかがメイジと思っていたが謝っておこう

side マチルダ

ウェールズ皇太子。ある意味では復讐相手だろうか

「ねえねえマチルダ、表情が優れないけど大丈夫？にしても！意外だよねっ！こんなじえんとるまんな知り合いが居たなんてっ！キヤハハ！」

それにしても道中ずっとランは不機嫌だ

口元くらいしか見えてないからイマイチ判断し難いけどテンションの具合から言って機嫌が良い訳では無いはず

「それにしても変わった造りだね、此処は」

「まあ基本城は石造りだからね、でも平民じゃ木造りなんて珍しくないよ・・・ところでラン？」

「何々？如何したの？マチルダ！」

「いやぁー散歩好きのランが真昼間から神社をぐるっついているのが不思議だね」

基本朝か夕にしか見ないからね、それにこつも長時間一緒は始めてじゃないか？

「・・・迷惑？」

何時ものランとは違った萎れた声に少し驚かされた

「いいや、助かってるよ。この男の見張りに打って付けだ」

「・・・キャハ、キャハハハ！最高の気分！おーけー！杖を握った瞬間喰べてあげる！」

「私は美味しくないと思うが・・・まあキミみたいな綺麗な声の子に食べられるなら悪くはないかもしれないね」

流石王族だね、ランを前にして軽口かいイケメン野郎

「キャハハ！ワタシは雑食だからね、何でも食べれるのさっ！」

ようやく客間に着いたアタシ達はウェールズ皇太子を向かいに座らせアタシ達も座る

side ウェールズ

神と名乗る人に会い、始祖ブリミルにあった。その二方によれば私は道から外れた人間らしい

そしてこの世界から隔離された場所で過ごすさなければならぬらしい  
当然我がアルビオンの兵達が勇敢にも戦ってくれた中、私一人がの  
うのうと生き残るとは悔やむ話ではある。しかしそれさえも神から  
言わせれば罰だそうだ

「と言う訳ですよ」

私は此処に住んでいるマチルダ・オブ・サウスゴータ嬢に事の粗筋  
を話し終える

「へー、ふーん。あ、そう」

物凄く胡散臭そうな目で見られた

「キャハハ！死人会ったとか、頭がイタ過ぎるよっ！」

「しっ、ラン失礼だろ？あれでもアイツは真面目に話してるんだか  
ら」

……。フォローを入れてくれるのは嬉しいのだけどキミも思いつ  
きり笑ってるから少女と余り変わらない

「まあ良い。ともかくアンタも今日から住人って訳だ。せいぜい皆  
に嫌われないようにね」

「キャハハ！それはもう遅いよっ！ワタシは既にへいとだからねっ  
！気をつけてね、マチルダが居なくなつた瞬間噛み付いてやるよ！」

少女は口を横に大きく開けて笑う



「キヤハハキヤハキヤハハハハハハハハハハ！あれあれ？あんゆーじゅある！カガミ！覗き見は悪い事・・・らしいよっ！ね！マチルダ」

「ええ・・・え？カガミ？」

「何時気付いていたの？ラン」

「キヤハハ！勿論最初の最初！最初からさ！」

突然、私と彼女達の間にかガミと呼ぶられた少女が現れた

少女の口は確かに動いているがそちらからは声は聞こえずまるでこの部屋全体から聞こえてきてるような気がする

「始めまして、ウエールズ皇太子。私は鏡です・・・じゃラン、私は何時もの様に出掛けて来るよ」

「キヤハ分かった、スズには言っておくよ。遅くなるんでしょ？」

「うん、少し長くなりそうだから」

カガミさんは登場すぐに消えた

魔法なのか忽然と消え去った

「とまあさつきみたいなお子が多いけど普通の子と同じく可愛い子達だから手を出さないでくれよ。ハッハッハ」

高らかに笑ったマチルダ嬢は「それでは」と言ってランと呼ばれた少女を連れて何処かに行ってしまった

取り残された私

「・・・何をしたモノか」

家事や警固は一応手伝えると思うんだが勝手にするのは迷惑だろうし・・・話に出てきた私に割り振られた部屋に行った方が良いか

side 卷

本を読む

童は読む詠む読む詠む

食欲も性欲も色欲も何も要らない

必要で無い

起きていても寝ていてもただ読み詠むだけ

ありとあらゆる本を読み漁る

終わりは無い・・・そこに人が居る限り本は無限に生まれてくる

童は本が好きだ、人の想いが記憶が強いては感情が多く籠っている

それぞれがその者の書き方で書き、どれも被っていない

一つの本が一つの世界と評しても良いかも知れない

語らずして語る

「あれ？間違っただかな？」

誰かが迷い込んできた・・・何時もの女性では無いらしい

翼人でも精霊でも天使でも無いらしい

誰だろ

「あ、丁度良い所に・・・少し良いかな？お嬢さん」

童は彼の者の顔を見る

人だ

特に何も感じない人

「道を迷ってしまって、男性用の寝室が何処にあるか分からないだ  
ろうか」

男性用の寝室

そもそもそんなモノがこの神社にあったらどうか。元々男性がやっ  
てくるなんて予定・・・予想には無かったはずなんだけど

ま、童がこの書庫以外の場所など知る訳が無い

せいぜい何時もの女性と一緒にいるお風呂くらい

童は首を横に振る

「そうか、それは読書の邪魔をして済まなかった」

そう言つて彼が出て行つた

にしても何故この書庫の奥に迷い込んだりしたのだろうか

まあ良いか

何時もの女性に来るまであと数日はあるから読み詠み終わるかな

side 乱

ワタシは時々無性に生き物を殺したくなる

それは食欲に近いと思う

喉が渴き、お腹が減る

殺している時は一種の快樂に近いモノを得られる

だけど詰まらない

最近全てが詰まらない

何かが埋まらない

神様がワタシを拾った時に抱いた感情を最近マチルダに抱いている  
気がする

気のせいだと思っただけど・・・キヤハハ!

まあ悩むのはワタシの性分じゃないかつ!

「や、やあ」

「キヤハハ! ないすがいな、お客さんじゃないですかっ!」

お客さんをブチブチに裂いて租借したら気分が晴れるだろうか

でも結局この人とマチルダの関係は・・・

「えっと、少し道に迷ってしまつて・・・案内を頼めるかな?」

「キヤハハ! 何でワタシ・・・が?」

いや、待てよ? 最近はマチルダに包帯を汚して心配させているし此  
処で良い事しておくのも有りかな?

「キヤハハハハ! やっぱり気分が変わつたよ!」

こうしてワタシは案内してあげたのだが・・・あれは部屋じゃなく

て多分世間一般では物置と言われていると思うなっキャハハ！

神様の私に対する扱いと御姉様に対する扱いの違いにはいい加減泣きそうです

side ウラノスリー

ある早朝、何時もの様に洗濯をしていると威勢の良い声が私の耳に届いた

なんだろう？

疑問に思いながら手早く洗濯を終わらせ声のする方向に向かって行くとギーシュ様が杖を構えて立っていた

「セイツ！」

杖をまるで剣のように振るう

あのギーシュ様が汗を気にせずになだ我武者羅に杖を振るう

そして次にギーシュ様のゴーレム、ワルキューレが出現してそれぞれ複雑な動きをして模擬戦の様な事を行っている

ゴーレムの操作をオートにして自分の敵を想定し模擬戦を行なう

しかし突如精神力が切れたのかゴーレムは消えてギーシュ様は地面に座り込む

「ギーシュ様」

私はそっと近寄って持っていたハンカチで頬を伝う汗を拭う

「わっ！・・・ああ、ラスリーちゃんか、おはよう」

「お早う御座います、お早いですね」

「ん、まあ最近はこの感じで稽古をしているのだよ」

「格好悪いところを見せたね」と笑うギーシュ様に私はいいえと答える

それにしてもあの何時ものキザっぽい行動の裏でこんな努力を・・・

何だか格好良いですね

「まだ続けるのですか？」

「まだ少しね、朝食には間に合うように終わるつもりさ」

「そうですか、では頑張ってくださいね」

「ハハハ、キミみたいな可愛い子に応援されると元気だね！」

・・・この人は私が男だといいい加減覚えてくれているんでしょうか？

部屋に戻ると主様がベットの上でボーっとしていた

「お早う御座います」



「・・・ん」

私は主様の脇に手を入れ立ち上がりさせパジャマを脱がせて行く、そして衣装ダンスから制服を取り出し丁寧に着せる

「はい、終わりましたよ。主様」

「タツバサー！朝食食べに行こ！」

タイミングよくキュルケ様が殴り込んできた

「ラスリーちゃんもおはよー」

「お早う御座います、キュルケ様」

「じゃ！二人とも！さっさと行こうか！」

私達二人の手を取り食堂に向かった

食堂に入るとエルザが私達専用に栄養管理をした料理を準備し終えていた

何故栄養管理をしないといけないのかと言うと此処の食事は貴族用に作られていて脂っこい食事が多い、だけどそれは寿命を縮める事になるし病気になりやすい

そんな食事を主様に与える訳にはいかない

「マルトーさんは怒ってませんでしたか？」

マルトーさんには態々作って頂いているのに本当に申し訳無い

「逆に新しいメニューを知れて喜んでましたよ」

「そうですね、それなら安心ですね」

そこら辺は料理人と言ったところですかね

「美味しいですよ、エルザ」

「有難う御座います、御姉様」

エルザはこの世界出身ですから洋食の料理が得意ですね

私は和食の方が好きですがやはり想いの籠った手作りの料理は美味しいです

side エルザ

私はあの日、御姉様の知られざる一面を除き見た。誰にも見せない為にすぐに眠りの風を協会内に吹かせたからあの場で私が唯一の目撃者と言う事になる

あの時、御姉様は本気で怒っていた

龍の神として圧倒的力で人を平伏させ、あえて人の姿で死なないよ

うに何度も痛め付けていた

あんなの誰も敵わない。勝つとか負けるとかじゃなくて戦いを挑む事自体間違っている

そんな恐怖の対象にも変わる御姉様はまた違う意味で本気で怒っていた

「キュルケ様！何度も言いますが私は男です！」

「んーと言われてもねー、何処か男なの？」

偶に言い合いになる、御姉様が男か女かと言う話

私が思うに肉体的には確実に女だと思う、実際血の味も女のそれだった

でも確かに精神的、思考の類は男・・・正確には男交じりと言った方が正しい。女七割男三割くらいの割合の物の考え方だと思う

「それは勿論これですよ！この逞しい胸襟！」

ああ、何時もの御姉様が負けるパターンが・・・

「日々成長してるわね、将来が楽しみだわ」

「うわああーん！これもそれも神様のせいだ〜！」

全力疾走で御姉様が何処かへ走って行ってしまおう

「キュルケ様、余り御姉様を苛めないであげて下さいよ？」

「分かっているわっ、ふふふ」

分かっているのかな？

ああ、あと御姉様の事で私が疑問に思っているのは神様への態度

嫌いと言口では言っているようですが本音は結構好きと私視点から見れば思わざるえません

それに神様からも御姉様は愛されていますし

「さて、私は御姉様を探しに行きますか」

風の精霊にでも聞けば居場所くらいすぐに見つかるでしょ

御姉様はすぐに発見出来ました。しかし私はすぐには話掛けずに建物の影に隠れています

何故ならキュルケ様と言い合いで負けて泣き逃げした御姉様が打って変わって元気に才人と話していたからです

「才人さんって余り筋肉とか付いてませんが良くデルフリンガーみたいな重い剣を触れますよね」

確かに、言われてみればそうですね。体格的にもあんなに自由自

在に振り回せるなんて思えない

「んー俺もよくそこら辺は分かんねえけどルーンの力みてえ」

ルーン、そう言えば御姉様の体にもその様なのが刻んでありましたね？どの様な効力なのか聞いてませんでした

それにしても御姉様、才人さんに対する態度も少し妙ですね

まるで兄妹のように見える

「そついや何でラスリーちゃんは全力で向こうから走ってきていたんだ？」

「え？あーそれはですね。私が男と言う事をいい加減キュルケ様に覚えて貰おうかと説得していたんですけど失敗しちゃいまして、えへへ」

可愛い！・・・ハッ、御姉様の可愛さには年下の私まで反応しそうになります

「・・・あー何時ものね、頑張ってる？」

「はい！」

・・・あ、また何処かに移動するようです

森。学院の外一帯に広がり夜でなければ比較的安全地帯

御姉様はこんな所になんの様があるのか

少しあとをつけてみると特に何も変わらない木の密集した地帯で唐突に足を止める

「たまには戻らないと疲れますね」

そう聞こえたと思う

すると目の前に大きな白い龍が現れ大空に飛び立った

「あの子、基本あの姿は他人に見せたがらないから結構レアよ？」

「ひゃう！」

耳元で突然話し掛けられたので思わず跳びあがってしまい木に頭をぶつけた

・・・痛い

「アハハ、良いわ。その反応！」

「神様・・・一体何故此処に」

「強いて理由を挙げるなら様子見ね」

様子見・・・何と無くだけど分かってしまう

「まああの様子なら大丈夫と思うけど・・・さて見物は此処からね」

「あの・・・神様？涎垂れてます」

欲望に忠実ですよ。この人？

「うへへ、あ、本当だ。舐めていいわよ？むしろ飲みなさい」

拳句、理不尽だ・・・いやこう言う人の事は変態と言った方が良いでしょうね

・・・でも

「はい」

逆らえないのが私ですけど・・・

「きゃはっー！やっぱりウラノスリーちゃんったら警戒してないから裸だー！」

神様が御姉様が元に戻った瞬間それも正しく目にも留まらぬ速さで特攻を掛けた

「げ！神様！なんで！って言うか私の性別返せ！約束守れえ、神様でしょ！」

「神様だから破るのよん！あはー！久しぶりのウラノスリーちゃんの柔肌ー！もう最近これに触れてなかったから禁断症状が出そうで！」

「そんな症状始めて聞きましたよっ！」

「それは今まで長時間貴方が私から離れる事が無かったからよー」

あー私は帰った方が良いでしょうか

「あ！エルザ！助けて下さい！このままじゃ！私の貞操がっ！」

御姉様・・・無理です。私にはその神様は止められません

主様には今日は帰らないかもとだけ伝えますから

「ちょ！エルザ？！無言で去らないで！くっ、神様！いい加減離れ  
てください！ってうわっ！何処触ってんですか！」

「あら？言葉にして欲しいのお？」

「なっあっんっ」

私には結局最後まで逃げ帰る際、後ろを振り向く勇氣は有りませんでした



目指せ一攫千金！の冒険の始まりです（前書き）

「一攫千金ねー」

「不満そうですね、神様」

「まーね、一攫千金なんて一変にお金が入っても良い事ないわよ？」

「と言いますと？」

「ん、良く言われるのは宝くじに当たったは良いけど、その金目当ての強盗に殺されちゃったとかね」

「……。」

「そういう風に何事も自分に過ぎたモノは得るべきじゃないのよ。人は」

「神様がとっても真面目な方に見えてきました」

「地味に酷いわね。ふーんだ、そんな事言うなら不真面目に今回もウラノスリーちゃん弄りで閉めてやる！」

「や、やめ！ひゃうつうん！」

## 目指せ一攫千金！の冒険の始まりです

side ウラノスリー

お昼、ある程度仕事が終わりに暇を頂いている時間。私は調理場裏の木の木陰で涼もつとやって来たらテントを見つけた

「学院内でテント？」

不思議に思い近付いてみた。一応不審者だったら危ないし、するとタイミングよくジッパーが上上がり才人さんが出てきた

しかも酒瓶を持って・・・未成年ですよね？

「ん？如何した君、何時まで外を眺めて・・・ラスリーちゃんじゃないか」

続けてギーシュ様も出てくる

「二人共相当酔ってますね？駄目ですよ？真昼間から」

「うるへい！ラスリーも加われ！」

才人さんが私の肩に手を回し酒瓶を差し出す

「だ、駄目です。私は仕事なので」

「ああん、俺の酒が飲めねえってかあ？」

キャラが、才さんが壊れいく

「そつだよなあー俺なんかの酒なんか」

今度は泣きだしてしまった

「い、いえ！そつでは無いでは無いんですよ？！ただ、そのお酒は苦手で」

「じゃ、口移しで！」

突然過ぎてついていけませんよ！

「ええ！？」

「ズルイぞ！君だけ！僕も！」

そして何故かする事が既に決まっているみたいな会話になっているし

「ギーシュ様まで！私に同性愛の趣味は無いですよ？！」

何やら目の据わった二人があともう少しで私の唇に触れようとした時、火炎が目の前を過ぎ去り二人を焼いていた

「酔いは冷めたでしょ？出掛けるわよ、三人とも」

「キュルケ様に主様！」

はぁーようは才人さんが余りにも可愛そうなので宝探しで稼いでゲルマニアで貴族にしようと言う訳ですね？

「なるほど？でも確か貴族は魔法を使える事を前提にしてませんでしたか？」

「あーそれなら大丈夫よ、お堅いトリスティンと違ってゲルマニアはお金さえあれば誰も貴族になれるから」

「ゲルマニアは野蛮だね」

ギーシュ様は才人さんが貴族になるのは賛成だそうですけどゲルマニアのそう言った風習は余り好きでは無いようです

「そんな堅い事ばかり言っているからトリスティンの国力は年々疲弊して言っているのよ」

今回着いて来たメンバーは全部で私含めて七名。才人さん、キュルケ様、ギーシュ様、主様、エルザ、あとメイド仲間のシエスタさん

「ちなみに最初は何処に行くんですか？」

「オークの巣窟」

亜人とか魔物の類ですか

「なんでもそこにオークが溜め込んだ金とかがあるらしいわよ？」

「なるほど、それで・・・僕達は勝てるのかい？」

「まあオークくらいなら私とタバサで如何にか出切るわよ」

ギーシュ様は心配していますが私が思うに私やエルザを抜いてもこのメンバーならドラゴンの討伐くらい出来そうですね

オークの巣窟に向かう道中、丁度オークの狩りの時間帯と重なってしまった  
しまいオークと遭遇してしまった

「ウインディアイシクル」

主様は一番に氷の槍を飛ばし串刺しにしていく

「ファイアーボール！」

続けてキュルケ様が炎の球体で焼き尽くしていく

「ゴーレムクリエイト」

「デルフ！」

「おう、抜け！相棒！」

そして私達を狙って向かってくるオークをギーシュ様のゴーレムと才人さんが薙ぎ倒していった

戦い始めて十数分。此方が圧倒的に優位だったおかげか誰も大きな

傷などは無く勝った

そして歩いていくと巣窟に辿り尽く

薄暗い洞窟に主様が魔法で光を灯し才人さんを先頭にして歩く

先程狩りに出ていたオーク達以外にもオークは居るはずなんだけど  
運が良いのか遭遇せずに一番奥まで来る事が出来た

「外れね」

しかしこれと言った宝は見当たらない

「一番目から外れって幸先悪いですね」

「仕方ないですよ、御姉様。宝の地図なんて八割は偽物ですから」

夢も希望も無い話ですよ

「ま、落ち込んでいても仕様が無いし。まだ宝の地図はたんまり準備してきたから次に行きましょう！」

幾つか外れを回った後、シエスタさんの故郷にある竜の羽衣を見に行く事になりました

名前からはイマイチ想像出来ませんがシエスタさんの話ではシエスタさんのひいお爺さんの所有物だったそうです

「タルブはまだなの？」

「んーこの様子だと今日中には無理そうですね」

今までシエスタさんの生活スキルに助けられた皆様はシエスタさんのその言葉を聞いて暗くなる前にと野宿の準備を開始した

ちなみに私はシエスタさんと一緒に料理担当です

「今日は何にするんですか？」

「私の故郷の料理、ヨシエナベです！」

材料は野菜やら肉やら何だか寄せ鍋みたい、流石に醤油等は存在しないので寄せ鍋再現は出来ないでしょうけど・・・

「そしてこれが我が家秘伝のソースです！」

・・・前言撤回します。シエスタさんが堂々と取り出したソレは間違い無く醤油です

作成されてからかなり年が入っていると思われませんが保存調味料ですから問題は無いでしょうけどね

「・・・それを何処で？」

「ひいお爺ちゃんの持ち物だったんです」

またですか、竜の羽衣もひいお爺さんでしたね。その方は一体何

なのでしょう」

「それはひいお爺さんがこの世界で作った物ですか？」

「？、えつと、あ・・・」

ん？如何やら何か心当たりがあるらしい

「どうかしました？」

「実はひいお爺さんは変な人でして・・・自分は竜の羽衣に乗って他の世界からやってきたって言い張ってしまして」

竜の羽衣に乗って？

しかも他の世界から来た？！

有り得ない。この世界は何だ！才人さんだけでも例外なのに、他にも世界移動が出来る人間が居た？

拳句に話によれば竜の羽衣に乗って・・・その羽衣は世界移動を可能にする道具なの？！

「そ、それは事実ですか？」

「んー私の村で信じる人は居ませんでしたね。竜の羽衣もひいお爺さんが言うには飛べたそうですけど、皆の前では一度も飛べませんでしたし」

「そうですか」



今回の宝は少し期待出来そうですね

「皆さん。出来ましたよー！」

そう言えばシエスタさんの髪と瞳の色は黒。才人さんも、日本人特有の色だ

まさかシエスタさんのひいお爺さんと才人さんは同じ世界からやってきた、うん、可能性はある

だとしたら一つの世界と一つの世界は繋がっている？

「美味しいわねー」

「・・・美味しい」

「何か懐かしい味だな」

「そっなのかい？」

やっぱり才人さんは懐かしいと感じるんですね

「御姉様？如何かしました？才人さんをジッと見つめて」

「え？あーあーちょっと考え事」

取り合えず明日になれば分かる事が

食事が終わると男女別れたテントに入って寝る。鍊金で丁寧に作っ

た物なのでベット完備

「いい加減突っ込みたくなかったんだけどさ、ラスリーちゃんが居ると俺達が寝難いんだけど」

「気にしないで下さい」

「僕もレディと寝るなんて・・・」

「慣れて下さい・・・それに私は男です、そこは譲れません」

譲ると神様が本格的に私の性別を返さなくなってしまいます

って言うか何であの神様は執拗に私の性別を奪うんでしょうか？返して貰ったのでだってもう何百年前の話か。しかも一年としない内に罠に嵌められて奪われましたし

・・・寝よ

たまにお袋の味と言うのが無性に食べたくなります

side 才人

シエスタの故郷に竜の羽衣は俺の世界の戦闘機、ゼロ戦だった

「海軍少尉佐々木武雄異界二眠ル。か」

佐々木さんの墓石には確りとした日本語でそう書いてあった

「あー！才人さん！何処に行ったかと思えばこんな所に」

ラスリーちゃんか、皆に言われて探しにきたのか？んー夕食の時間には少し早いと思うんだけど

「泣いているんですか？」

「ほえ？」

トコトコとラスリーちゃんが近寄ってきてハンカチで俺の頬を拭う

「あー思い出した・・・のかな？」

思い出した。うん、そうだな

ゼロ戦を見て俺も故郷を思い出したんだな

「思い出したですか。成る程、そうですね、私も少し才人さんを見ていると思います」

「え？俺を？」

「うん、才さんは似てるから多分、境遇が」

境遇？異世界に放り出されるとか？・・・な、訳ないか

「さ、皆の所へ帰りましょう！才さんが居ないとゼロ戦の調子が分からないんですからっ」

そっか、今更だけどガンダールヴって便利だよな。触っただけで戦闘機の何処が正常とか以上とか一発で分かっちゃうんだからな

side かみー

みー

「って今回私、特に何も無いわよ？」

ってな訳でさっさと話を進めましょうか

side ウラノスリー

ゼロ戦を学院に持ち帰りガソリンをコルベール先生と言う方に作っ

て貰うらしい

これで才人さんは元の世界に戻る手掛かりを見付けた訳だ

少し覗いてみたらルイズ様との仲直りも出来たようでしたし良かったです

「久しぶりですね、此処も」

宝探して一段落と言うか久しぶりに日本料理を食いたいなーって事で神社に帰ってきました

「え？あ・・・」

ん？見覚えの無い人が増えてますけど神様の仕業？

「えと始めまして私は龍神ウラノスリー、気軽にラスリーと呼んで下さいね」

「はい、私はティファニア・ウエストウッドです。テファって呼ばれてます」

「ラスリーお兄ちゃん！」

くうー私をちゃんと男と認識してくれるって言うのは最近無かったからとても嬉しいです

「鈴！」

「どうしたんですか？突然のお帰りで」

「ええ、少し貴方の手料理が食べたくなりまして」

「本当ですか?!なら張り切って作ります!」

それは嬉しいですね。此処くらいしか調味料の製造をしてませんしにしてもテファさんはエルフですか、エルフと言えば精霊の結びつきが強いのが定番ですけどこの世界のエルフもそうなんでしょうか？

「さて、私は他の人に挨拶して回りますか」

「皆喜びますよ」

テファさんはこれから買出しとの事で一緒に出来ませんが一先ずは書庫に向かった

書庫に入った私は迷い無く真つ直ぐ置くに進み前に見た時と殆ど同じ体制の巻を見付ける、唯一の違いは読んでいる本か

「久しぶりですね、巻」

巻はゆっくり私を見上げると縦に頷く

「変わった事はありませんでしたか？」

今度は横に振る

「そうですね、本を読むのは良いですけど程々にして下さいね」

縦に振る

にしても結構増えましたね。此処の書庫も・・・

書庫から出るとすぐに私を待っていたのか扉の横に鏡が立っていた

「貴方も久しぶりですね、鏡」

「あう」

頭を撫でてあげると小さく息を吐いて喜ぶ

「鏡も変わった事はありませんでした？」

「えっと、最近やってきたウェールズのお兄さんの周りの精霊が少し〜」

ん？ウェールズ？まさか皇太子？いやいや、まさかね、同じ名前なだけだよ

「精霊がどうしました？」

「ざわついていると言いますか、嵐の前の静けさの言いますか」

ざわついているのか静かなのか、どっちなんだろう？

ま、鏡がそう言っただからそうなんだろうけど

「それは注意した方が良いでしょう」

「分かった・・・そうだ、スズが妙に嬉しそうだったけど？」

「え？うん、ちょっと日本料理が食べたくてね、張り切って貰ってるんだ」

「成る程、じゃ今日の晩御飯が楽しみだ」

「うん」

室内に不自然な風が吹くと鏡は消える

暫らく歩き他の子達にも声を掛けて行く中、妙に普通の子供が増えるなーと考えているとマチルダさんに出会った

しかも驚く事に乱が腕を組んでいる

「キャハハ！久しぶりだね！学院に居るって聞いていたから長い休みの時に来るモノとばかり思っていたよー」

更に驚くべきなのは巻かれている包帯が綺麗。もしかたらマチルダさんが巻いた・・・さすがに無いか

「そ、それより珍しいですね、貴方がそこまで気に入るなんて」

チラッとマチルダさんを見ると両手の平を水平にあげてよく分からないと言った仕草をした

推測になりますが恐らく何気無いマチルダさんの言葉に惹かれるモノがあったんでしょう



「気に入る？キャハハ！うんうん！気に入ったんだよ、ワタシはこれでも美食家だからね！こんな甘ったるい人は喰えないのさ」

甘ったるい

胃の中に入って栄養になれば何でも同じと言っていた乱が・・・凄  
い成長だ

「やっぱりマチルダさんは良い人ですね」

「な、なんだい急に、照れるじゃないか」

「あ、ところでテファさんや途中見かけた普通の子供達はマチルダ  
さんの関係者ですか？」

「あーあつたのかい、そうだよ」

そう言えば前に手紙にそんな事が書いてあつたな

「そう言えば聞きたい事があつただけどさ、何でアルビオンの皇  
太子が来てるんだい？」

・・・はい？アルビオン皇太子？

「すみません、それはウェールズ・テューダーさんですか？」

「んあ？そうだね」

可笑しい、あの人は確かに死んだはず。それはこの目で私やその場  
に居合わせた人が見ていた

偽者にしても此処はそんな嘘を付ける場所じゃない

生き返らせたと言う線も有り得ない。私が自ら死体を利用されないように焼いたはず

最後の可能性が逆に死んだのが偽者・・・それも有り得ないか私を騙せるのなんて・・・かみ、さま・・・神様が

「えーとウエールズ皇太子は神様がどうか言ってみせませんでした？」

「あー言ってたねー、あんまり信じてはいなかったけど」

神様〜！

貴方ですか！今度は何の企みがあつて・・・

「分かりました、有難う御座います、少しウエールズ皇太子を探しに行きますので」

「ああ、皇太子様なら外の庭園で和んでいると思うよ」

「そうですね、では」

「ああ」

「キャハハ！じゃ〜ね〜」

水の流れる音、林に風が通る音。自然の音はどれも心を落ち尽かせます（前書き）

「此処は和むねー」

「なにやってんだい皇太子様よおー」

「ああ、ミス・マチルダじゃないか」

「アンタ、やる事無いからって此処最近ずっと縁側でノホン状態じゃないか。働け」

「そうだね、取り合えず庭の手入れでもするよ」

「よほど気に入ったんだね」

水の流れる音、林に風が通る音。自然の音はどれも心を落ち尽かせます

side ウラノスリー

和風庭園

幾つか大きな石を立てて砂利を川の流れの様に敷き詰める、池には鯉などを放し飼いでいる

「和むなあ」

なに一国の皇太子がこんな辺境神社で和んでいるんですか

「皇太子」

「ん？あーキミは確かタバサ嬢の御付メイド、ラスリー君で良かったかな？」

・・・まさかただのメイドの名前まで覚えているなんて

「ええ、覚えて頂いて光荣です」

「ああ、それと私はもう皇太子じゃないよ」

何故だかウェールズ皇太子のその言葉に体の血が沸騰したかの様に熱くなる

「それ・・・今まで貴方を支えてきた人を捨てるという意味か？」

「へえキミはそんな顔も出来るんだね、ビックリしたよ・・・それと私は別に今まで私を支えてきてくれた人を見捨てる訳じゃない、償う・・・いや、背負って行くんだ。それにこれから支えてくれる人も見捨てない。私は私や私の周りの人の事、全てを背負うよ」

全てを背負う、なんて大言を吐く人だ。これがこの世界の王族か

「そうですか・・・すみません、私はどうも線に触れると熱くなりやすいみたいで」

本当に前回のジャン・ジャック・フランシス・ド・ワルドとの時もそうでしたけど明確な線を越えると途端に激情してしまう

治さないとな、うん

「みただね。フツ可愛らしい顔付きなのにキミはとっても凛々しいんだね」

「むう・・・では私の用件は済みましたので他を周りますね」

「分かった」

歩き出すと後ろから「あ、そう言えば」とウエールズ皇太子が私を呼び止める

「近々多分大きな戦争が起こると思うから気をつけてね、私は参戦出来ないらしいから」

「・・・分かりました」

戦争、アルビオンが崩れた辺りからチラホラと小耳に挟んではいましたが近々ですか、全く何時の世も争いだけはどうやっても無くないんですね

side 鈴

ラスリーお兄ちゃんが期待して待っていてくれると思うと心が弾んで何時もより多めに作ってしまった

「美味しそうですね」

私が丁度食事を並べ終わると同時にラスリーお兄ちゃんが食堂に入ってきた

ちなみにこの神社は大勢を困う為に作られているので食事場所も大きい、なので一人で準備するのは結構骨が折れる作業なのだ

「有難う御座います、ではカガミに皆を呼んできて貰いますのでラスリーお兄ちゃんは今少し我慢して下さいね」

「んー中々厳しいですね、こんな美味しそうな料理を目の前にしてふふっ、声に出して言うとは落ち込むから言いませんけど目の前の食事を我慢するラスリーお兄ちゃんはとても可愛いです

「カガミ、皆を呼んできて貰えますか？」

「うん、分かった」

姿は見えなくとも声は聞こえるので何時からかは知らないがそこに居たのだろう

にしてもラスリーお兄ちゃんも完成から少し時間を空けてこれば待たなくても済んだんじゃないかな？

「まだかなー」

うう、この場に一緒に残っていたらつい可愛いとかそれに類する言葉を口走りそう

「ラ、ラスリーお兄ちゃん、カガミ一人に行かせるのは少しあれなんで私も皆を呼んできますね」

「ん？うん、分かった」

私は自然な早歩きで食堂から出る

そして扉に背を預けて心を落ち尽かせる為に一息付く

「なにやってんだい？スズ」

「キャハハ！どうせ中であの人が可愛らしい姿振りまいてるんだよねっ！うんうん、分かるよー、ワタシもたまに本当には女の子じゃないのかな？と思って牙を立てたくなるもん」

当たっているのか当たってないのか微妙な所だな

「ラスリーお兄ちゃんは正真正銘男だ」

「まーそれはともかくとしてマキは来ないってよ」

「そうか、残念だな」

出来れば全員で一緒に食べたいと思っていたのだが、まあ仕方ないか

「ティファニアさん達は？」

「あの子達なら遅れてくると思っよ」

こうなると残りは恐らくカガミが既に周っているだろうから私が出  
てきた意味は殆ど無くなったな、まああの空間から出たかっただけ  
だから問題は無いのか？

「だけど冷静になればあれはお兄ちゃんと二人っきりになれるチャ  
ンスだったのでは・・・」

「なにがチャンスなんだい？」

「ひゃいっ！」

「ちょ！剣を収めてくれ！」

ああ、ウェールズさんでしたか・・・突然背後から声を掛けるので  
驚きの余り本気で斬るところでしたよ

「全くこれでも私は武人なのですから不意に後ろに立たないで下さ  
い」



「その武人が後ろを取られても良いのかい？」

「・・・さっさと入れ皆も待っている」

全く、この男は飄々としていても掴めない

何時も笑っているが別の事を考えているような気がしてならない

「さて、そろそろ私も入りますか」

適度に集まった頃でしょう

私はラスリーお兄ちゃん的笑顔に心を洗われながら自然と笑っていた

決断の時。私が選ぶのは最善でも最良でも、ましてや最悪でも無い……ただ自

side ウラノスリー

戦争が始まった

戦争と言うよりは単なる数の暴力による襲撃と言い直しても良いかも知れない

アルビオンの時と同じくトリステインにレコンキスタを打倒する力はない

このままだと確実にアルビオンの二の舞

「主様も神様も自分の好きな方を選べって」

そもそも神様は私が大きな戦いに介入出来ないって知ってて言ってますね

学院の人は殆ど帰省してしまい。ギーシュ様やルイズ様、軍に所属している人間は戦地に派遣されているらしい

「才人さんも居ないし」

まあ使い魔なのでですから当たり前ですけど

「御姉様！」

何時も主様が外で読書する時の木の下で考え事をしているとエルザ

が走ってやって来た

「如何したんですか？」

「レコンキスタが宝探して行ったタルブまで進行を終えたそうです、そこでトリステインも軍を出したそうですけど相手は空中戦艦と竜騎士に対し此方は地上兵と魔法隊だそうです！」

絶望的だー！

って言うかこの世界での主流の竜は火竜、上空からブレスで攻められれば地上兵だと蹂躪されるだけだ

魔法の射程も実はそこまで遠くない

「なるほど選択の時ですか」

はあー全く困った人だ。ギーシュ様やルイズ様、そして才人さんが戦場に居るのに駆けつけられない訳にはいかないじゃないですか

「御姉様」

エルザの手の平に古びたお守りが置いてある

私はそのお守りを知っている。と言うか知らない訳が無い・・・あれが私の性別を奪っているモノその物

所謂、封印具？

「神様が御姉様にと、ただ・・・」

「ん？」

「今度会った時に自分から私にキスしてね。だそうです」

かみさまあー

何で代償があるんですか、むしろこれは正当な報酬でしょうに。元々この世界に来るのが性別を返してくれる条件だったんですから

「もう良いですよっ！やれば良いんでしょ！」

私はそれを乱暴に受け取る

すると神の楯、龍神ウラノスリーとしてじゃなくて神様に会う前。まだ私が男の子だった時の名を思い出す

「おね、えさま？その髪と瞳」

「ああ、私って才人さんやシエスタさんのひいお爺さんと同じ世界の出身なんですよ。では自己紹介をしておきます。七乃瑠璃ななつのるり、龍の神にその身を捧げた男の子です」

「男……ですか？」

何ですか、その反応。今回こそは正真正銘男性の肉体ですよ？

「御姉様は男でも結構可愛かったんですね。女としてめげそうです」

「男としてめげそつだよ！」

side エルザ

七乃瑠璃、御姉様が名乗った名前自体。女の子っぽいような気もしますが神様の言っていた「あの子って男の娘なのよねー」と言う言葉にも納得してしまいます

御姉様は少し背丈の伸びた体の調子確かめる為か準備運動の様な動作を行なう

そして私に鼻便で神社に手紙を送っておいて欲しいと頼むとニコツと可愛らしく笑ってその場から消えた

「にしても単に名前を返して貰っただけで性別が変わったり強さが変わったりって有り得るんでしょうか？」

「それは勿論、名前は物事の全てだもん」

独り言に返事が返ってきた。驚いて振り向くと「やつほー」と気軽に手を振りながら神様が近付いてくる

「御姉様には会っていかないんですか？」

「私はね？話を聞かずに勝手に力を使ってあとで可愛く悩むウラノスリーちゃんが見たいの」

最低だ

「話を聞かず？」

「ええ、この世界に来るのが性別を返す条件、キスをするのが名前を返す条件、ならこの私の楯の役目を勝手に止めた分は？」

何て神様だ

ようはあとから適当な理由を付けてまた悪戯しようと言う魂胆らしい

「まあ貴方に言っても仕様が無いけど、さっきの話だけど例えば貴方の名前がゴキブリだったら如何する？」

「ゴキ？！・・・どうって言われましても私は私です」

「外れ。何故なら誰かに貴方を紹介する時に私の知り合いにゴキブリが居るんだけど言った際に相手はあの黒いのを連想する。それだけで貴方はあの黒いのもと同じになるのよ」

「屁理屈じゃないですか。なら私自身が恥ずかしいですけどゴキブリって名前なんですってハッキリ言えば良いじゃないですか」

何で私は自分をゴキブリ呼ばわりしているんだろう

そして何でこの神様は私の例えをゴキブリにしたんだろう

「はあく分かって無いわねー。私は名前を司る神よ？あと神様は信仰によって成り立っている。そして人は名前である程度外見を想像するのよ」

つまりは名前を操りモノを自由に操るのが神様の力で御姉様の様な

神は名前によって想像され信仰される力を得ていると

ややこしいですね

「ま、分かり難いなら私は林檎を梨と言い張れば梨に変える事が出来る神様って覚えておいて・・・だからいまのあの子は私の手から離れているのよね」

神様にしては珍しくとても寂しそうな表情をしている

とても人をゴキブリ呼ばわりして楽しむような人の表情には見えない

「ところで御姉様の名前、七乃瑠璃って女の人の名前じゃないですか？」

「ん？あーだってあの子、女の子として育てられて小さい頃は自分が女と勘違いしていたのよ？クススッ」

昔を思い出しているのか懐かしそうに目を細める

「あの子は小さい村の長の家生まれ龍神湖の巫女として育てられたのよ。まあ巫女なんて名ばかりで形ばかりだったのだけど、ある時天災が起こったの」

その天災は数ヶ月と続き畑等は全滅、村に貯蓄していた食べ物もスツカリ無くなりかなり苦しんでいたらしい

「そして村である会議が行なわれた。それは形ばかりだったはずの巫女を使うって言うね」

村には昔からの伝承で村一番の可愛らしい娘を龍神様に捧げれば何でも一つ願いを叶えてくれると言つモノだったらしい

当然そんなモノを本気で信じている人は居なかったかも知れないが人々はそれに縋るしかなかった

「で瑠璃ちゃんは仕来り通り儀式通り湖の龍神に捧げられた」

「……ん？でも神様、御姉様は生きてますよね？」

「ええ、ここから急展開を見せるのよ」



急展開な過去。私の出生の秘密らしいです（前書き）

「やっと戻れたー！」

「そんなに嬉しいのかしら？あんまり変わってないのに」

「余り変わらないと思っていたなら早々に返せば良かったじゃないですか・・・まあこの際もう良いですけど。男に戻れた事ですし口調も少し変えてみますか」

「どんな風に？」

「俺は七乃瑠璃、宜しくな・・・的な？」

「んー似合わないわねー。大体瑠璃ちゃんって基本容姿は単に少し男の子寄りになっただけで、普通に女の子で通用すると思うし長く女の子だったから細かい癖とか修正は無理じゃないかしら」

「な、・・・まさかこんな所に後遺症が」

「まあまあどうせすぐに女の子になるんだから」

「逃げますー！」

「逃げられないわよー」

急展開な過去。私の出生の秘密らしいです

side かーみん

普通にその辺に居そうな名前ね

むかーし、むかし。ある所におじいさんとおばあさん……の割合がそこそこ高い小さな村がありました

そしてその村の一番偉い人の家にとても可愛らしく女の子と見間違える程の男の子が居ました

彼は巫女と言う特別な役割を担ってはおりますが生涯気にせず生きていけるはずだったので

しかし誰の悪戯か天災と呼ばれる大きな災害が村を襲い古く信憑性の低い言い伝えに頼る程になっていました

「暇だ」

私はその物語が進んでいる時には確か暇だなーとか考えながら目の前のニヤつく男を睨んでいた様な気がする

「きみは毎日暇そうだね」

人を喰った様な笑顔と表現される男の顔は見るだけで私の心を不快にさせる

こいつとの付き合いは長い……のかな？

まあ長いとしてこいつの性格は余り良いものではない。むしろ悪い部類に入る、そしてこいつはトコトン私と馬が合わない

「ところできみの好きそうなネタを拾ってきたんだけど」

「ん？アンタが教えてくれる情報なんて疑わしくて信用出来ないわね」

「そうかい？とっても面白い不法投棄物を見つけたのだけど」

不法投棄物？何か宝具の類いでも発見したのだろうか

だがとってもと言われると少し気になってきた

「おやおや？気になってきたのかい？」

「そんな訳ないでしょ」

「そー、ふーん、これは本当にきみ好みだと思ったんだけど」

男の手の平の上に小さな鏡が現れその不法投棄物の映像が映る

・・・人、小さな人だった

こいつにとって者も物も等しくモノか

「生き物みただけど？」

「人だね」

ズームアップされていく

近づくにつれ私の胸は熱くなる

今まで私好みの子には何度も会った。でもこんな気持ちは初めてだった

「なに、この子」

「へ〜きみでも分からないのか。本当に餓鬼って言うのは素直だよね、可愛いからうと、そうでなからうと、私にその違いは分からないし一人の命程度で。と言うか人の命程度で神様が動く訳無いじゃん。それなのに大人を信じて神は動くと言っていてるんだよ」

男は本当に馬鹿だねと笑う

「・・・そうか。この子には疑う気持ちがこれっぽっちも存在していないんだ

ただ、村の皆の為だけに命を投げ出して苦しいのを我慢し一心に願っている

「叶えてあげても良いじゃない？」

「んんー？本当にきみは変わった事を言うね、昔から・・・父である神に逆らい、母である神に逆らい、兄妹、姉妹である神に逆らい。そして関わりの無い全ての神に逆らって孤高の神として君臨した神」

そんなの昔の話だ

私は生まれてすぐとある疑問を持って逆らい今では下に就く神は沢  
山いても同じ位置にいる神は一人でさえ居ない

当然上の神なんて一人も居ない

「だから？貴方こそ、そんな神に付き纏ってる変わり者じゃない」

「そうだね。私は変わり者さ」

男の姿が変わり水に沈んでいっていた人の子の姿になる

そして沈んでいた子が居なくなっていた

「なんの真似？ウラノス」

ウラノス。それがこの人を喰った様な笑みを浮かべる男の名前

「さー？私はきみに嫌がらせをするのが大好きなのさ」

ブチ殺してやるのかなどと考えているとトントンとウラノスは自分  
の頭を叩く、すると髪の色が変わっていき瞳の色が変わる

「なるほど・・・」

何かを確認する様に目を瞑って頷くとパチリと目を開けた

「アンタはなにやってんの」

「ひゃうい！な、なに?!」

先程から意味不明な行動発言が多いのでいい加減説明させようと声を荒げると突然女の子の様な声を出した

・・・えーつと、これはー、ん？

「・・・ごめん、貴方は誰？」

「え？え？あれ？此処は？」

まさか。なんてふざけた考えが脳裏を過ぎる

「落ち着いて。それより貴方は誰なの？」

「私ですか？私は七乃瑠璃ですけど・・・」

人の名前

もしかしてさっきの沈んでいた子の名前か

嘘じゃないみたいだし

「アイツはツ〜！」

なにを考えているんだ

恐らくアイツが行なったのは自分の体をこの子に与えて死を回避させた

別に他の方法も沢山あるのにそんな奇怪な方法を・・・

「あ、あの貴方は？」

「私？私は『よ』」

「え？」

「だから『』・・・あー理解出来ないのか。そうね、神様って呼んで」

「神様?!」

彼女は私の手を握りグイッと近付いてくる

「ええ、そうよ」

「お願いします！村を助けて下さい！」

「あー」

今の貴方なら自分で出来るわよ？と言ってあげても良いのかしら？

「分かった、そんな事はもう終わらせたいから・・・ん？」

「どうかしました？」

このまま、タダですのもアホらしいわね

「そうね！村は助けてあげる・・・でも当然代価はあるわ」

「私の命では足りませんか？」

「ええ、足りない」

だから、と繋げて私は彼女から名前を取り上げた

「貴方が私の下で一生仕えるのが条件ね。分かった？ウラノスリーちゃん」

この後、私は実はこの子は人の時は男だったなどビックリな事実を知らされたり、ちよつかいを出してきた神を意図も簡単に薙ぎ払ったウラノスリーちゃんに驚いたりと散々だった

そして私は今に至る

「なんてなが〜い歴史があるのよ」

「……って事は神様も御姉様を最初は女の子と思っていたんですか？」

「うん。それにあの子だけが何故か私の命令に逆らえたり、不思議だらけよ」

今でも偶に思う

ウラノスの奴は一体何をしたかったんだろう？と

「そのウラノスって神は御姉様なら神様を孤高や孤独から解放出来るって分かったんですかねー」



「どづかしら？私の知ってるウラノスはそんな男じゃないわ」

物も者もモノも全て平等に等しく興味の無さそうな表情で見ている  
アイツには瑠璃ちゃんが輝いて見えたのかも知れないわね

戦争で勝つ為には過剰戦力くらいが丁度良いと思います

side ギーシュ

レコンキスタ。改め、新政アルビオン対トリスティン王国

戦況は計るまでも無く劣勢だった。元々新政アルビオン側の方が三倍以上、勢力がありメイジこそ少ないモノの竜騎士や飛行空挺とそれを補うに余るモノが充実していた

それにトリスティン自体、年々国の上層部の汚職などが目立ち如何しようも無い程に疲弊していた

更に性質が悪いのはプライドが高く隣国のゲルマニアの事を野蛮国と言って協力を求めない

正直戦場に立っている人間からしたら代わりに死んでくれと言いたくなる

だがトリスティン貴族は負けるのが分かっているても名誉の為と格好良く散っていく

僕も前は名誉の為に死ぬのは良い事だと思っていた・・・でも今では死んだあとの称号なんかに興味は無い

だからメイジとして貴族として見つとも無く無様にまだ生き残っている

「ワルキューレ!!--!」

如何いう手を使っているのか敵は巨大な亜人を手懐けている

僕は自分のゴーレムに背を預け戦っている

仲間は既に散っていったかも知れない、正直他人に構っている暇は無い

空の竜騎士はサイト君が頑張ってくれているらしいがああ鉄の竜で何処まで頑張れるか、負けとなっても良いから生き延びて欲しい

幸運な事に僕はこの戦いでメイジとしてランクアップしてトライアングルになれたおかげで精神力はまだ保っていられる

近くの森に逃げ込むか

でもそこには避難した子供達が居ると聞いたし巻き込みたくは無いです。そ神頼みでもしたくなってきました

始祖ブリミル様に祈ったとしてこの戦いは終わるだろうか。それならば僕は友人や数日お世話になったタルブの村の人の無事の為に祈りたい

「僕には手を組んでいる暇は無いんだけどねっ!!」

その時、僕を囲んでいた人の壁が綺麗に吹き飛んだ

「風のメイジの救援?!」

「んー近いですけど私はメイジでは無いですよ、ギーシュ様」

聞き覚えのある声の少女が見知らぬ白に赤のラインが入った服を着て歩いてきていた

「ラスリーちゃん?!」

「今はその名前じゃないんですけど・・・まあ大丈夫なようですね」

「うん、怪我はしていても命は無事だよ」

敵もただラスリーちゃんを見ているだけでは無い。当然自軍の兵ではないので攻撃を仕掛ける

それを見て僕は僕より強いと分かっているだけでも助けに行こうと駆け出そうとした

「邪魔。しないで下さいね」

柔らかい口調でのお願い。しかし何処か強制力があり敵兵は圧倒されている

「ギーシュ様。お疲れ様です、あとは私が引き受けますから休んでいて下さい」

「フフツ、それは嬉しい言葉だけど」

本当に喉から手が出そうな誘惑だな

「僕はレディを置いて敵に背を向けれる程、まだ無情には成り切れ

ていないんだ」

薔薇の杖を構えた僕をラスリーちゃんはポカーンと口をあけて見上げていた

彼女から見たら相当の馬鹿に見えただろうか

「ふふっギーシュ様が女性に人気な理由が分かりますよ。でも一つだけ」

ラスリーちゃんの手が僕の胸に当たると心から何かが沸き上がり傷の痛みが無くなる

「私は男ですって」

僕等が立っている所から少し円を描いた外側全ての地面が浮き上がり取り囲んでいた兵隊を全て無力化した

「では今度は空のお掃除をしてきますので私はこれにて」

ぴょんと跳んで浮き上がった地面の一番高い所に行つて空を見上げ一気に飛んだ

「凄いな、彼女は・・・」

さて僕は何をしたら良いか

かなりの数を先ほどの地面浮上で無力化出来たとは言えまだ残っている

「・・・なら考えるまでも無いか」

僕は杖を振って敵への道を開く、そして再び戦場へと駆け出した

side 新政アルビオン軍

悔っていた

まさか疲弊したトリステインがまだこんな化物みたいな奴を飼っていたとは伝説の烈風に勝る戦い振りだ

全身白い布の人型の何かが戦場を楽しげに走っている

「キャハハ！そんな逃げないでよおー！喰い合い（たたかい）に来たんでしょ！だったらほらーハヤクウウウ！！！」

声からすると少女なのだろうが幾ら傷を負おうが魔法で焼かれようが気にせず人を喰らい続けている

比喩などでは無い、本当に人に口をつけ歯を立て喰いちぎり租借している

別の分隊では此方ほど激しくは無いが何処か不思議な少女が歩き何かを行い私の仲間を切り裂いていた

少女に近付く者は例外なく細かくスライスされていた

「ランは元気だね」

此方は見える恐怖で彼方は見えない恐怖か

一番まともなのは私の方だろうか

「ラスリーお兄ちゃんの頼みとは言え私は余り人目は避けたいですね」

凜と落ち着きを払い細い剣を越に携えた少女

彼女は恐ろしい速さで剣を振り抜き斬っている

驚くべきは魔法さえも斬っている事

「滅茶苦茶だ」

遠くで地が浮き上がるなんて幻覚も見えてきていた

「次は貴様か」

「クソッ！私は！新政ある」

「長い」

せめて・・・名乗り上げてから斬って欲しかった

「ったくなんでアタシがこんな所まで餓鬼の引率をしなきゃいけないんだい。マキも引っ張ってこれば良かった」

沈む意識の中、自分の髪をクシャクシャと掻き面倒そうに辺りを観  
察する女性の姿を見た



私の巫女服はコスプレでは無く正装ですからね。神職ですもん（前書き）

「にしても何時もながら面白いね。』』の近くは」

「??。ウラノスリーちゃん?どうしちゃったの?」

「今は瑠璃が名では無かったかい?まあ私にとっては如何でも良い事だけど。それにしてもきみが退屈そうで無くて何よりだよ」

「ッ!その人を喰ったような笑みは、アンタ!ウラノスね!」

「正解、正解。素晴らしいね」

「なんでこんな所に!それに瑠璃ちゃんの顔でその表情を作るな!」

「友情出演だよ」

「・・・は?友情出演?」

「そう、私ときみの悪友情出演・・・なんてねハハッ」

「い・ま・す・ぐ!瑠璃ちゃんに体を返しなさい!」

「おや?性別を何時まで経っても返さなかった、きみが言うのかい  
フフツ。流石・・・おっとこれはネタバレと言うヤツになるか、ま  
あ今回は時間も尺も無いし安心してよ。ちゃんと返すから」

「じゃ、尺?」

「では皆さん。』の狼狽した姿は如何でしたか？私は結構気に入っているんですけどね。では次があったら合いましょう、さようなら」

私の巫女服はコスプレでは無く正装ですからね。神職ですもん

side 才人

やっぱりゼロ戦すげえ！スピード、火力ともに竜種の比じゃねえしガソリンも豊富にコルベール先生に作って貰ったおかげでエネルギー切れの心配も無い！

と考えていたのが数分前で

ワルドの野郎が出てきてからは一気に状況が変わった。ワルドの竜は火力こそ火竜に劣るモノのスピードが段違いで速いと言う風竜に乗っておりブレスの代わりにワルドの魔法がゼロ戦を襲った

「ルイズ！急いでくれ！」

いまはルイズが何か大きな魔法を使う為に詠唱をしているので俺はその時間稼ぎ。デルフ曰く俺本来の役目だそうだ

「ガンダールヴ！もう諦めたらどうかね！」

何ワルドの魔法はデルフである程度無効化するが何発かもらってしまい機体に穴が開く

そして攻防を繰り返している内に機体がガクンと傾く

「相棒！なんかヤベエぞ！」

「分かってる！」

異常を調べると燃料が急速に減っていつているのが分かった

「クソッ！魔法が当たった箇所から燃料が漏れてる！」

ルイズの魔法が完成するまで持てば良いんだけど

「ガンダールヴ！もう終わりだ！」

ワルドの後ろから援軍の竜騎士が来ている。ワルドとの攻防に集中し過ぎた結果かつ

ワルドの掛け声で一斉に火竜のプレスが放たれる

魔法の完成まであともう少しなんだ！

デルフを構え吸収を試みる・・・予定だったがプレスが俺達に届く前にまるで空気の壁があるみたいに一定所で衝突した

「神出鬼没は神様の方法ですけどまあ助けに来ました。才人さん」

機体の先頭に巫女服姿のラスリーちゃんが立っていた

「巫女?!」

「あ、そつちに反応するんですね」

ラスリーちゃんは少し考える仕草を取ったあとに敵の方に手を出して握って開くと言う動作をした

「え」

俺は何をするをするのかと見ていると敵側が爆発した

ルイズの爆発とは違い煙も何も見えなかったが確かに音がした

「ら、ラスリーちゃん。なにを？」

「空気を固めてですね？一気に開いただけです」

圧縮と開放

こんな凄い魔法初めてみた

「才人！準備出来たわ！」

「やっとか、ルイズ！ラスリーちゃん！こっちに！」

「はい！」

ラスリーはトコトコと操縦席に入り衝撃に備えて俺の腕の中に納まる

その時若干ルイズがむっとしたのは見なかった事に・・・オシオキ  
怖い

「いくわよっ！エクスプロージョン！！」

辺り一帯を白い光が包んだ

side 瑠璃

凄い。さっきの一撃で全ての敵がやられている

しかももっと凄いのはあれだけの威力だったのに死者が一人も居ない

「・・・才人さん」

「なんだ？」

「落下・・・してませんか？」

この機体

「だねー」

「ですねー」

しかもルイズ様は先程の魔法で精神力を使い果たしたのか才人さんに寄り添って寝ている

「ま！大丈夫だって！燃料切れでもある程度は安定取れるから」

「んーそんな安全装置多分使い捨ての機体に付いているとは思えないんですけど」

「・・・だねー」

「ですかー」

つて二人で納得し合ってる場合でも無いですけど

「仕方ないですね！私が如何にか風で無事に着陸させてみます！」

「ん、頼む！」

私は空に出て風でレールを造る、機体はそのレールに沿って円を描き地面へ近付いていく

「才人さーん。意外といけそうですよー！」

「あー！みたいだねー！」

私達は離れている上空の上なので声が聞こえ難くつつい大きい大きな声で話していた

機体が地面に接触する度にガリガリと削れ徐々に速度が落ちていった

そしてようやく止まる

「ふう疲れました」

機体から降りた私は草原に座り込む、すると操縦桿から降りてきた才人さんが私の頭に手を置く

「ありがとな」

「・・・はい」

ゆっくり撫でる手の暖かさを堪能していると遠くから神社から来てもらったマチルダさんとランが此方に気付いて近付いてきていた

「ん？ガンダールヴとかつて子じゃないか」

「誰だっけ？」

「あん？・・・あーこっちの私は知らないか」

「マチルダ、マチルダ！このわーくらすちゃーな少年は知り合い？  
キャハハ最近マチルダは男友達が異様に増えてる気がするな！もお  
こおゝなんて言うのかなー？喰いたくなるねっ！」

ランは口調に似合わず拗ねているみたいにマチルダさんのローブを  
ぐいぐいと引つ張る

「変な含みのある言い草だね、ラン。コイツは私が学院に勤めてい  
た時に会った奴だよ」

「学院？あー！セクハラされてた人！」

才人さん。強ち間違いでは無いですけど、もっと別の覚え方があつ  
たのではないですか？

「セクハラ・・・まあそれで良いか」

マチルダさんも何だか説明を省く為にそれで納得してるし

「雇い主さん。頼まれた事はこれで終わりで良いんだよな」



「はい、問題無く終わったと思います」

「そう、なら私達は早々に立ち去るよ。トリステイン軍もやってくるだろうしね」

マチルダさんはランに皆に帰る用に伝えるようにと言つとダルそうに帰って行った

「しかしあの包帯の子、何のコスプレだったんだろな」

「はい？」

ランを見てもビックリしないと思っていたらそんな風に思っていたんですね

「んーあともうちよつとでてきそうなんだけどー」

その後も才人さんは心当たりが何かあるのかギーシュ様来るまで唸り続けていた

夢。寝ていても疲れるなんて理不尽だと思いませんか？

side 馬鹿上司

・・・初期設定ね

人の争いは一先ず落ち着きを見せた、瑠璃ちゃんはそのあと恥ずかしそうに私を呼び約束通りキスをしてくれてその際私は再びあの子から名前と性別を取り上げる事に成功した

不意を突いた作戦だったので若干怒っていたがまあ一時的なモノなので気にしない事にしましょう

時間が解決してくれるわ

平穩

言葉にするならそれが相応しい

あの世界に取り合えず平穩が戻った、あれ程大きな選択はまだ先になるはず

「なんて柄にも無く深く考えてしまったけれどウラノスリーちゃんに関わった人物が徐々に本来と違う道を歩んでいるわね」

あの盗賊が良い例だけどそれ以外にも様々な場所で影響を及ぼしている

「さてさて、此処までは取り合えず計画通りかな？」

まー正直今回ので直接的にあの子が殺した数は0だったみたいだし不安だったけど蓋を開けてみたら心配するほどでも無かったわね

「まーこれからもウラノスリーちゃんの為に頑張りますか！」

何て言いながら半分以上は私の為の様な気もするのだけどね

side ウラノスリー

「さて、ようやく私も満を帰して登場かい」

・・・え？

目の前に私が絶対しない笑顔を作っている私が立っていた

「登場と言ってもこれは夢だから私ときみと読んでいる人しか知らないけどね・・・ま、十分か」

「読んでいる人？」

「あースルーしてかまわないよ、私が言うのは何時も戯言だからね」  
たわごとですか

夢。直感的に分かったのですけど何だか意識がハッキリとし過ぎて  
いる

「貴方は私？」

「んーきみはきみさ。そして私は私」

別人と言いたいのでしょうか

ですが私の顔で余りその顔をして欲しく無いですね

「あーそだ、私はきみに用事があつたんだよ」

「私にですか？」

「そう、きみに・・・きみは『』の事が好きかい？」

『』。神様の名前、この名前を呼んだ人は私は私以外知らない

「好き？」

悪戯さえなければとても良い神様だと思うし

「うんうん、はいはい、なるほどねー」

目の前の私は答えてもいないのに悪意的に笑う

瞳は何も興味無さそうに何か先を見ている、如何してこんなに冷めた目ができるのか

そう思ったからなのか自然と私からも質問していた

「貴方は神様が嫌いですか？」

「ん？嫌い？私が？」を？あははは！無い無い！あんな面白いモノ嫌いにはならないよ」

者では無くモノですか

「・・・結局貴方は何者なんですか？」

なんだかとても夢の中とは思えなくなってきました

「私かい？私はウラノス。まーきみの名前の元になった人物できみの心臓みたいなモノさ」

ウラノス。単に私の名前からリーの部分を抜いただけのようだけど  
要は別人ですか

「心臓？」

「あー別に本当に私がきみの臓器と言う意味では無くて」

知ってますよ。て言うかそんなグロテスクな勘違いはしていません

「勿論です」

「ん、そっか。・・・私はきみに真実を告げにきたのさ」

「真実ですか」

「うん、『はね。きみの器作りの為にこの世界に来たのさ」

唐突に告げた

器？

私が混乱する中。目の前の私は「うんうん、混乱するよねー」などと興味無さそうにしながら戯言を吐く

「いきなり何を」

「いきなりって言うか単にきみが第一のポイントを通り抜けたからあー本当にやる気なんだねーって思ってた出張ってきただけさ」

あの神様が自分の計画を他人に喋るとは到底思えない

しかしこの目の前の私の言葉は何故か嘘では無いような気もしてくる

「・・・出張ってきたですか」

それにしても他人だとしたら何で私の姿で現れてしまうんでしょうか

「あれ？急に感じが・・・まあ良いか、うん。』はね？きみを失うのが途轍もなく恐いのさ。だから神の器が将来生まれる可能性があるあるこの世界にきみを送った。自身だと余り干渉出来ないからね」

「それなら何で私にそれを言わないんですか。一応私の事なら私もその器を探索しますよ」

私に関わる事ならある程度私も協力しますよ

「何で？それは当然その器が人だからに決まっているじゃないか、人程度に神が納まる訳ないけどきみの場合は元が人だからね。神の力を抜いてきみと言う人だけを納めるには十分だよ」

何で私が態々別の体に入らなければいけないのかがそもそも謎ですが何となく話しは理解出来る

「『』は思っただろうね。人の命を対価にきみを助けるなんて言うものならきみは当然反対する、だから気紛れの様に見せ掛けて向かわせて自然に器が生まれる流れに乗せる。とね」

勿論反対ですよ。例え私が命の危機に瀕死ようと他人の命を犠牲にしてまで助かりたいとは思えない。他の人にはキチンと生きていて欲しいから

「そんな後付みたいな事を言われても信じれません」

「まーそうだね。こんな電波で厨二な話を信じろって言う方が難しいよね」

「い、いや、そこまでは言ってますし思ってます」

「うん、私もそこまで思っているとは思ってないよ」

そうですか

「さて、尺とか気にせずに『』の秘密を暴露出来て私はもう満足だ

」

「嫌な性格ですね」

「違う違う。嫌味な性格なんだよ」

自己評価が既に最悪ですね。って言うか結局この自称ウラノスさんは一体何者なんでしょうか

「あー今度の私の出番は何時かなー本当にそればかりが心配だよ」

「出番ですか。演劇団にでも入っているんですか？」

「演劇って言うか、んー物語と言う意味合いでは演劇も似たりよったりか」

訳の分からない事を真顔で話す人だ。私の顔で無かったなら確実に「すみません」の一言を残して立ち去ったと思う

「まー何でも良いじゃん、はい終わり。そろそろ目を覚ます時間だからね。』に宜しくねー」

「・・・はい」

結局夢な訳だし起きた頃には忘れてるかもね



夢。寝ていても疲れるなんて理不尽だと思いませんか？（後書き）

建宮です

遅くなつてしまい、すみませんでした。言い訳っぽくなつてしまふんですけどスランプ気味なんです！

なんか持ってるコミックの所は終わっちゃったしー・・・ふうー

ま、これからはアニメ版で知識補充しながら書きたいと思います。

感想待つてまーす・・・悪評でもOKですよーむしろ「ここはこうの方が良いだろー」的な感じのは参考になりますし、これからも宜しく願いますねー！

他人の考えが目に見えないのはそれなりの理由があるんです(前書き)

「神様ーちよつと良いですかー?」

「ん?ウラノスリーちゃんから用事なんて珍しいわね、良いわよ?何でも聞いてちょう」

「では少しこの眼鏡を掛けて貰えませんか?」

「・・・悪趣味な眼鏡ね。まあ良いわ」

「ではルイズ様と主様とキュルケ様の写真を見て貰えますか?」

「良いわよ・・・で?」

「あれ?無反応?写真じゃ駄目なのかな?・・・だったらエルザ」

「はい、御姉様」

「どうしたの?ウラノスリーちゃん、エルザちゃんと三人でお話?」

「・・・あれ?何で無反応?!では神様!一度それをエルザに渡して再び掛けて下さい」

「??、今日のウラノスリーちゃんはよく分からないわね。まあ別に構わないけど・・・ん?急に眼鏡が光ったり音が鳴ったりしてるけど何なの?これ?」

「な・ん・で!私を見た時だけ反応してるんですかーッ!!」

「え？え？エルザちゃん。ウラノスリーちゃんったら何かあったの？！」

「オ、オ、オ」

他人の考えが目に見えないのはそれなりの理由があるんです

side ウラノスリー

戦争が終わり。親政アルビオンの進軍も止まり一先ずの平穩が訪れた  
私も平穩な日常に戻り何時もの様に文明の利器も無いのでエルザと  
一緒に手洗いで洗濯をしていた

「・・・にしても変な夢を見ましたね」

変な。靄が掛かったようで細かな所までは思い出せないのだが何だ  
か変な夢を見た気がする

「変とは？」

「夢ですから少ししか思い出せませんが。如何にも心がざわつく  
夢だった・・・としか表現出来ません」

「心がざわつく？御姉様がですか・・・そ」

考え込むような表情になったエルザが何か言おうとする前に爆発音  
に言葉を掻き消された

「「爆発？」」

私達二人は首を傾げながら爆発の方向を向いた

「ルイズ！ちよ！待っ！」

才人さんは変な眼鏡を掛けて走ってきていた

「お早う御座います。才人さん」

「おおっ、よう！ラスリーちゃんにエルザちゃん」

ピコンピコンと変な電子音が眼鏡から聞こえる。ついでに変に裝飾された宝石がこれ見よがしに光っている

「・・・マジックアイテムですか」

「知ってるのか?!ならこれの外し方分かんねえか?」

「え?いや、そこまでは」

特別悪意のある物では無いみたいですね

「そっかーなら仕方ないか」

「こらー!サイトー!」

ルイズ様がとても怒った様子で走ってきている。しかも杖を装備して

「サイトってば!んゝツ?!まさかこんな小さな子まで厭らしい目で見てたのね!」

厭らしい目?まさかあの眼鏡は色欲に反応するタイプの魔法が掛かっているんですかね

ん？だとすると才人さんは私やエルザでえっちな事を考えていたと言ふ事に・・・いやいや  
性欲と言つても程度がありますし早計でした

単純な好意に反応している可能性もありますし才人さんを疑うなんて本当に早計でした

「ルイズ様はこれから何処かお出掛けですか？」

疑ったりして悪いなと思ひ私は少し庇うようにルイズ様と才人さんの間に立つ

「あ、うん。ちょっと街の方ね・・・戦勝パレードがあるの」

ルイズ様は魔法の発動を邪魔されたおかげか少し冷静さを取り戻して才人さんを睨む

「そうですか。では馬の用意を致しますね。エルザ、洗濯物を干して主様に遅れて戻ると伝えて下さい」

「はい、御姉様」

side 才人

メデューサの眼鏡。送り主以外に厭らしい又卑猥な視線を向けると音と光で反応するマジックアイテム

この学院は貴族のお嬢様ばかりで女の子の水準が高いから鳴って爆発をくらうを繰り返していた

そんな時、ラスリーちゃんに遭遇して何だかんだでルイズから逃走成功

「鳴り止みませんね」

ラスリーちゃんが先頭を歩いているので顔は見えないけどさっきルイズが厭らしい目で反応するって言っちゃったし何だか気まずい

「そ、そう・・・だねー。ラスリーちゃんが可愛いからかなー？あ、あはは」

流石に苦しいか

「嬉しいです」

一言ハッキリそう言って黙ってしまった

馬小屋に到着すると慣れた様子でラスリーちゃんは馬を二匹借り色々を道具を馬に取り付け始めた。その頃には眼鏡の音も鳴り止んでいる

「手伝おうか？」

「いえ、すぐに終わりますから」

作業中、少し暑かったのかメイド服の上のボタンを外す、その瞬間また鳴り出した

「……。」

「あー」

ラスリーちゃんの無垢な瞳が俺をジッと見詰める……視線が痛い

「……見たいのですか？」

「全く全然そんな訳無いよ〜！」

大袈裟に笑って誤魔化そうとするが当然の事ながら余り誤魔化せてない

「そうですか、そうハッキリ断られるとそれはそれで傷付きますけど。んーやっぱり少し好意的な視線だけでも反応するようですね」

試されていたみたいだ……。にしてもむっと拗ねた様に頬を膨らませるラスリーちゃん可愛いっ！……。落ち着け落ち着け、こんなじゃ一生鳴り止まねえ

作業が終わったラスリーちゃんはおもむろに俺の顔に手を伸ばす、そして何故かルイズしか外せないはずの眼鏡をアツサリ外してみせた

「派手な装飾ですよー」

「え？外、れた？」

「あ、許可も取らずにすみません。掛けますか？」



いや、むしろそのまま何処かに放り投げて欲しい

「遠慮しておく」

「そうですかー。にしても面白いアイテムですね」

ラスリーちゃんはそのまま、その眼鏡を自分に掛けた。そしてラスリーちゃんが眼鏡を通して俺を見た途端宝石が光って音が鳴った

「……。」

「……。」

「……恥ずかしいですね、これ」

「だな」

この眼鏡を掛けた者にしか分からない気持ち共有し、よく分からないけどなんか仲良くなった気がした

「うしっありがとラスリーちゃん」

「有難うねラスリー」

「いいえ、それよりパレード楽しんできて下さいね。ルイズ様、才人さん」

何時もの様に笑顔で送ってくれているが先程の事もありほんのり頬が赤いような気がしないでもない

・・・ちなみに眼鏡はあのあとラスリーちゃんに回収された

その事についてルイズは怒るより先に不思議がっていたのでお仕置きは無く結果オーライだった

私、トコトン運が無い気がしますbyエルザ

side エルザ

お遣い。単純に言ってしまうえばそれだけだった、しかし何故か今の私は危機的状況に陥っていた

明らかに高位のメイジ一名に中位が十数名と勝っても重症は免れない

おまけに一人で来てしまった為に救援も呼べない

「答えなさい。何故侵入したのかしら？吸血鬼」

しかも私が吸血鬼と一瞬で見抜いた

はあー何故と聞かれても乗っていたドラゴンが何かに反応してこの屋敷の上空で止まったと思ったたら私を振り下ろして何処かに飛んでいっちゃったから。とした答えようが無いけど人間が吸血鬼の言う事を信じるとも思えないな

「何も喋らない・・・そうですね。分かりました、何の目的があったこの屋敷に訪れたのかは知りませんが吸血鬼を野放しには出来ません」

何だそれ・・・吸血鬼じゃなかったら野放しにするのか

大体吸血鬼が人間に何をした。そりゃ血を少しばかり吸われた人も居るだろうがソイツだって動物を殺して肉を食っているのだから文句を言う資格は無いはずだ

「仕方ありませんね。片付けてしまいなさい、見た目に騙されないように幼く見えますが吸血鬼に老いはありませんから」

気にしなくても私は十分に若いですよーだ

「お母様!！」

相打ち覚悟で一気に突破しようと思構えたその時、遠くから息を切らしながら走ってくる女性が見えた

まだ少し大人しくしておいた方が良さそう

「カトレア?!危険ですから出てきてはいけないと!！」

危険なのは小さな子相手を十数人で取り囲むアンタの方だと言いたい

女性は何故か私の前に立つを私を守るように抱きしめた

「・・・え?」

予想の斜め上だった。てつきり貴族の娘だし吸血鬼見たさに興味本位で出てきたのだと思っていたのに

「お母様!小さな子供相手にこれは何ですか!」

「カトレア、見た目に誤魔化されてはいけません。それは吸血鬼、貴方より年上です」

それって・・・いちいちムカつく

「違います！この子は見た目通りの年齢です！」

・・・これは驚いた。それに何だかこの人からはとても甘い香りがある、惹きつける香りだ

「貴方は」

「カトレア・イヴェット・ラ・ボーム・ル・ブラン・ド・ラ・フォンテーヌ・・・ごめんなさい、長いわね。カトレアって呼んでル・ブラン・ド・ラ？ちょっと待って、フォンテーヌでは無かったけどそのフレーズは聞いた事がある

しかもピンク色の髪

「ル、ルイズ様の」

「あら？ルイズのお知り合い？」

「・・・どう言う事かしら？吸血鬼、如何して貴方の口からルイズの名前が？」

「って事はこの高位メイジは母親辺りか」

私が少し困ったようにしているとカトレア様はふっと小さく笑い口笛を吹く

「カトレア?!」

すると上空から私の乗ってきたドラゴンがやってきてカトレア様と私を乗せて飛び立った

・・・何でお前が此処に居るんだ

side カトレア

今日は可愛いお客さんが訪れた

それは昼頃に近くを飛んでいたドラゴンに目を向けた時だった、ドラゴンは長時間飛行をしていたのか何処か疲れていて私の所で休む？と届かないだろうけど声を掛けると不思議とドラゴンは此方に真っ直ぐ飛んできた

乗っていた子を振り落として

私はすぐに乗っていた子が子供と気付き庭に向かうとそこにはお母様が警備のメイジを引き連れて取り囲んでいた

吸血鬼だと言ってお母様は目の敵にしていたけど私から見たら小さい女の子なのでさっきのドラゴンさんに少し働いてもらって自分の部屋まで連れて来た

「ごめんなさいね、お母様も悪気は無いんだけど」

「悪意はありましたけどね。むしろ悪い吸血鬼を殺すんだから善意なのかな？」

女の子は捻くれたように私から顔を背けドラゴンを睨む

ドラゴンはそのような視線に耐え切れないのか私に一瞥して空に逃げた

「あ、逃げた」

「まあ仕方無いわ、疲れていたみたいだもの」

「……。」

返事を返さず部屋の中を見渡すそして少し考え込む姿を見せると初めて私の方を確りと向いた

「動物園を目指しているんですか？」

「どつぶつえん？」

女の子は私の部屋に居る様々な動物が珍しいらしい

「心底不思議な方ですね。物好きと言い換えましょう。ひよっとすると御姉様レベルなのかも知れません」

「お姉さんがいるの？」

「血は繋がってないので吸血鬼ではありませんよ？残念でしたねー」  
やっぱりさっきのお母様の行動に怒っているようだ。当たり前か、私も動物の肉を食べて生きている。同じようにこの子も動物の血ちひで生きている……結局は同じなのだからそれで迫害されるのは嫌な

んだと思う

「ごめんね」

私の一言で何かが変わる訳じゃない。でも私達はこの子に謝らないといけない

「……。」

女の子はムスツと元々不機嫌そうな表情を更に濃くする

「何故貴方が謝るんですか？」

怒っているようにも聞こえた

「え？なんでって」

「貴方が……カトレア様が謝る必要はありませんよ」

様が……私はあんまり好きじゃないんだけど

「様はいらないよ、あとお名前教えてくれる？」

「エルザです。私はエルザ」

私と私のお友達はエルザちゃんに抱き着く

「重ッ！動物達も乗ってきた？！流石の力持ちの吸血鬼でも私は子供なので無理ですー！！」



その後はエルザちゃんが涙目で止めてと言っただけ続いた

可愛いからって愛で過ぎると離れる一方と学んで欲しいです(前書き)

「つか、れた」

「あらあら、エルザちゃんは皆に人気ね」

「カトレアさまぁー。なんで百単位で貴方の部屋に動物が訪れるんですかー」

「えーっと、怪我の治療とかしてあげていたら此処が居心地良くなっちゃったみたい・・・だから治って出て行った子達も割と頻繁に帰ってくるの」

「もしかして魅了の魔法とか使ってます?」

「んー疑う気持ちは分からなくも無いけど使ってないわ」

「はぁーそうですか」

可愛いからって愛で過ぎると離れる一方と学んで欲しいです

side 才人

戦勝パレード後、一匹の梟が持つていた手紙をルイズが受け取ると  
買出しの途中だったシエスタを連れてルイズの実家に行く事になった

「なあ何が書いてあったんだ？」

「別に」

別に。とはまったく答えになってないがルイズが怯えたように仕切りに空を見て何を誤魔化そうとしているので深くは追求出来ない

「ところで何でシエスタまで連れてきたんだ？」

「貴族が侍女も無しなんて世間的に悪いでしょ」

さも当然と此方の常識を教えられた

ルイズの家まではそう遠くは無い。そして家に着くと俺はルイズが本当に貴族のお嬢様なんだなーと実感させられた

立ち並ぶメイドと執事。無駄にデカイ屋敷と言うか最早、城

出迎えられてすぐに向かった場所でルイズとよく似た女性が出迎えた・・・但し何故かとても怒っているように見えた

「ルイズ」

「ひゃいつ!」

どうやらルイズが恐がっていたのはこの女性のようだ

「お、おおお母様もお元気そうで何よりです」

「ええ」

なるほどー母親かー流石親子。結構似てる

「ところでルイズ。吸血鬼を知っていますか？」

吸血鬼。確かエルザちゃんが最初に名乗った時に言っていたっけ？

「え？あ・・・知りません」

何でルイズは嘘をついてんだ？ついでに多分バレてんぞ？目が泳ぎすぎ

「本当ですか？」

「はい!」

「では・・・質問を変えましょう。エルザと言う名に聞き覚えは？」

「ッ!」

何でルイズの母親がエルザちゃんについて知ってるんだ？この様子だとルイズ本人が言ったとは思えない

ルイズは覚悟を決めたような表情をすると恐がっていた顔から何時もの堂々としたモノに変わった

「・・・友人です」

「そのエルザと言う者に吸血鬼の疑いが掛かっています。それでも貴方は友人だと？」

「はい、お母様。エルザは私の大切な友人です」

立ち向かうような姿勢で言った

ルイズがっけえ

「そうですか、貴方は吸血鬼が危険な存在だと分かった上で、教会から異端と呼ばれる覚悟があつて友人と名乗っているんですね？」

「何を言っているんですか？お母様。私はエルザを危険とも思いませんし友人を大切に思う事を始祖ブリミル様が認めてくれない訳ないじゃないですか」

何だか今日のルイズには歡心ばかりしてしまいそう、普通だったらあんなに睨まれて詰問されたら誰だって常識や一般的に傾いてエルザちゃんの友人とは名乗れないだろう

「はあーまったく我が子ながらカトレアも貴方も、誰に似たのですかね」

間違いなくアンタだと思う

「カトレア、もう出てきていいわよ」

「ちい姉さま?!・・・ってエルザちゃんまで何で?!」

ある一部だけ遺伝子革命を起こしたルイズを優しくしたみたいな女性が扉から入ってきた

「お帰りなさい、小さなルイズ。そちらのお連れの方は始めまして」

「あ、はい」

あんな風に綺麗に微笑まれると何だかとても恥ずかしい

「・・・才さんにルイズ様にシエスタ」

エルザちゃんはとても疲れたように俺達を見る

「お疲れだね」

俺が言うとエルザちゃんは無言で頷いて溜息を吐く

「お遣いのつもりだったんですけど」

「あらあら、女の子がそんな深く溜息を吐くものじゃないわよ」

ルイズのお姉さんはエルザちゃんを気に入っているらしく抱き着いて頬ずりしている

あー何と無く分かった

構われ過ぎた猫だ。うん、そんな感じだな

「ち、ちい姉さま？なんでエルザちゃんを？」

「庭であつたの」

「この人に私が乗ってきたドラゴンを落とされまして」

ドラゴンを落とした？！お淑やかに見えてやっぱりルイズの家系って事なのだろうか

だったら迂闊な発言はヤバイ

「あらいやだ、落としたなんて。そんなつもりじゃなかったのだから」

お姉さん系に見える人が少し拗ねたみたいに見えるのとギャップ的なアレなのだが「そんなつもりじゃ・・・」そんな似た様な言葉をルイズから聞いて俺が爆破されなかつた事は余り無い

「大体動物を無条件で従えさせる能力なんて反則気味ですよ」

ん？お？なんだかこの人は直接的暴力の類では無い？それだったら不安も無いかも

「一番可笑しいのは幻獣種にまで懐く事ですよ、その気になれば小さな国なら落とせません？」

・・・もしかして一番の危険人物？

「大丈夫よ、そんな事はしないから」

「ッ！」

エルザちゃんに言ったんだよな？俺の方に視線を向けていた気もするけど・・・考えは口に出してないし杖も持っていないから魔法も使っていない

「さて、お母様。ルイズ達には私から詳しい話をするわ」

「出来ますね？」

「はい、勿論」

「分かりました、ルイズ。明日にはお父様が帰ってきますから挨拶しなさいよ」

「はい！」

ルイズ父か・・・今度はどんな恐い人が出てくるんだ？・・・ん？  
そう言えばルイズは道中、姉は二人と言ってなかったっけ？

・・・ま、いずれ会つか



閑話休題。私もまだ若かった、そんな風に思う時期があったのです（前書き）

「あの〜神様？前々から気になっていた事、聞いてもいいですか？」

「ん？いいわよ？なに？私と貴方の前で遠慮なんていらないわよ」

「まあ些細な話ですけど、私のウラノスリーの由来ってなんですか？」

「あー。それはね？ウラノスって何とも奇妙な奴がいたんだけどソイツの名と少女を意味するコリーツイって単語のアクセント部分のリーを取って繋げて少女ウラノスって意味にしてみたの」

「・・・意外と単純ですね」

「名前なんて単純なのが一番よ。ま、間違っただけで単純に少女なんて意味を加えちゃったから貴方は女の子なんだけどね。結果オーライよ」

「ノーコメントで」

閑話休題。私もまだ若かった、そんな風に思う時期があったのです

side ウラノスリー

「恋愛、ですか？」

多分これは私がまだ神様と出会って当初の頃のお話

「そう！ウラノスリーちゃんって恋とか愛とかした事あるの？」

「私は基本巫女ですから御法度ですね、それに余り容姿も良い方ではありませんから」

私がそう答えると神様は嬉しそうな悲しそうな寂しそうなと実に器用な表情を作る

「巫女ねー、そうね。巫女と言えば純潔ですものね、役割的に……  
ってあれ？」

「どうしました？神様」

「いや前に聞いて驚いたけど貴方って見た目はどうあれ性別は男だったんでしょ？」

「ええ、不本意ながら今は女の人に何故かなっちゃってますけど」  
神様が始めて私を見た時、女の子と勘違いしてしまっただけで名前を女の子用にしてしまったらしい

「でも男の子に純潔とか関係なくない？」

「・・・関係、無いですね」

言われてみれば

「まーそこら辺は教育上の無意識だったのかな。まあいいや巫女としての力は一応備わっているんだし」

「あ、そうだ」

せつかく神様と一緒にいるのだから前から聞きたかった事を聞いてみよう

「なにかしら？」

「何で神様って赤子をコウノトリに預けるんですか？どう考えたって危ないじゃないですか、落ちたら悲惨ですよ？」

「・・・。」

何故か神様は驚いた表情をしている

「？」

「あーなんて言ったらいいのかしらー。えーっと別に私はコウノトリなんか赤子を預けた覚えはないわよ？」

「え？」

「大体鳥が赤子を運ぶなんて場面見たい事無いでしょ？」

た、確かに

「でも夜中に運んでくるから子供の私の活動時間とズレてただけで」

「違うわよ。って言うか子供の生まれ方から学ぶ必要があるわね」

神様は何も無い空間から最初からそこにあったみたいに薄い本を取り出した

side 神様々

馬鹿にされてる感が否めない

「あうあう」

何故赤子をコウノトリなんかには運ばせるのか。そんな質問がウラノスリーちゃんの口から出た時はこの子の親がどうやって誤魔化してきたかが薄っすら分かったけど現在ウラノスリーちゃんは性のお勉強をしている

真っ赤になったり仕切りに私を見てきたりと、とても可愛い反応を見せている

「どーお？」

「あ、あと少しです」

年齢的に興味はあったのか本に釘付け

そこで私は何と無く面白い事を思いついたのでウラノスリーちゃんにコツソリ近付いて後ろから抱き着く

「何処まで読めた？」

「？ % ！！」

何だかよく分からない反応を取られた、そう言えば今のウラノスリーちゃんって意識的の女寄りなのかな？男寄りなのかな？

「かみひやま?!なにをきゆうにい!」

「いやー私が渡した訳だし参考になったかなーって」

「さ、参考にですか?！えーっと、その、あの、は、はい!なっただです!」

覗き込むと既に四分の三は読破されていた

ウラノスリーちゃんは私の視線に気付くと即効で本を閉じる

「大人は嘔吐きです」

「結果がそれなのね」

顔が赤いところを見るに本心は違う事を考えているのでしょーうね

「ふうー私が学ぶにはまだ早いものでした」

「それでもないわよ？」

「え？」

今度は正面から抱き着いてあと少しで唇が触れそうな距離を維持する

「か、かみさま？」

「備えあれば憂いなし。確か貴方の世界の言葉でしょ？」

「そう、ですが」

「今から体験しておく？」

「にゃっ！」

動揺したのかウラノスリーちゃんは顔を俯ける・・・が私は結構密着していたのでウラノスリーちゃんのおでこがモロに入った

「はっっ」

「あ、大丈夫ですか神様?!」

「う、うん。大丈夫、気にしないでいいわ」

本当にこの子の前だと私は駄目になる

「まったく、神様も冗談が過ぎますよ」

「冗談、ね。そうね・・・それよりっウラノスリーちゃんは何か欲しい物とかある？」

「唐突ですね」

「ん？ほらっウラノスリーちゃんもまだ此処に来て慣れてない事が多くて大変でしょうから私からのプレゼントで元気を出してもらおうかなーって」

本音は単にウラノスリーちゃんの好みを知りたいだけなんだけど

「欲しい物はありませんね。今で満足です」

「欲しい物が無い？比喩なしで本当に何でも揃うわよ？金も富も人も、それこそ愛でも恋も、いっそ全世界の財宝でも貴方が望めば手の中よ？」

理由は分からないけど私は少し焦った

「いりませんよ、って言うか此処で金や富って意味ありますか？まあ人だつて私の為なんかには・・・ですね。そして愛や恋は自分で得る物です・・・財宝も正直興味無いです」

今更になつて気付いたけど此処にはウラノスリーちゃんを縛る物が一つも無い

「じゃ、じゃあ」

「大丈夫ですよ」

「え？」

ウラノスリーちゃんが私をじっと見詰めそして自分から抱き着いてくれて私は包容されていた

「貴方を一人にはしませんよ、」様

「・・・男前ね」

何だか良い風にウラノスリーちゃんに纏められたわね



好かれるのも度が過ぎれば呪いと大差無いです

side カトレア

久しぶりに私の小さなルイズに会えたおかげか今日はとても体調が  
良い

「はあー、それでエルザちゃんは向こうに帰れずに此処に留まっ  
ていると」

「はい、そうなんですよ。帰れない訳じゃないですけどヴァリエー  
ル家から学院まで結構距離ありますし、ね」

エルザちゃんは私を動物に好まれる不思議人間と称しているが少な  
からず此処の動物はエルザちゃんに好意的

「そいや幻獣もいるって言ってたけどこの部屋に？」

ルイズの連れてきた不思議な雰囲気を纏う男の子は警戒するように  
部屋を見ている

「大丈夫よ、私の部屋には小さな子達しかいないから・・・大きな  
子達は」

窓を開けて指笛を吹く、すると遊びにきていた火竜が数匹おりてき  
てくれる

「ええールイズ・・・お前の姉ちゃん最強じゃね？」

「かもね、今日のちい姉さまは体調良さそうだし」

「え？それって」

あらあら、ルイズにはあんまり心配掛けたくないのだけど

「昔から重い病を患っちゃってね、これのせいでルイズにも迷惑掛けちゃうし嫌ね」

「迷惑だなんてっ!」

「うん、ごめんね。分かってる、ルイズはそんな風に思う子じゃないわよね」

分かってるんだけど、やっぱりどうもマイナス思考になって駄目ね、ほんとお

side ウラノスリー

・・・遅い!

エルザに数日前、街で主様の洋服を買ってきて。とお願いしたのだが、エルザはその日を境に行方不明になってしまった

一応危険があるといけないので空を伝って調べてみると無事なのは確認できた

ドラゴンの調子が悪くても日帰りで帰ってこれる予定だったはずな  
んだけど

「はぁー」

「どうしたんですか？ラスリーちゃん」

「ああ、シエスタさんですか。実はエルザが買出しに行つて何処か  
で油を売っているみたいで」

「ふふ、まあ私達平民は街に出る機会が少ないですし、つい羽目を  
外しちゃってるんじゃないですか？」

そうだとっても一旦は戻つてきて欲しい

私はシエスタさんとお話をしながら厨房の仕事を終えると肉を持っ  
てシルフィードのご飯を貰つて森に行く

「きゅい？それでラスリーはエルザを向かえに行くのね？」

「んー私が行つてしまつと主様のお世話をする人がいなくなるので  
・・・」

「そっかー」

本当に如何したモノだろうか。私以外の人に向かえに行つてもらふ  
ように頼むのが一番なんだけど

でも神社にいるマチルダさんに頼むと今度は神社が廻らなくなるし  
唯一暇を持て余していて尚且つ頼みやすい相手となると・・・

「で、私が呼ばれたのね」

神様くらいだった

「やつほーイルククウちゃん、久しぶり〜貴方のその肉体と精神のギャップは好きよ〜」

「あ、ありがとうなのね」

本当に神様は暇だったのか割とテンションが高い

「神様、エルザを迎えに行つて欲しいですんけど」

「嫌」

ビックリするほど即答だった。もしかしたら言い終える前に断られた気もする

「一応理由を聞きますけど？」

「だつて折角ウラノスリーちゃんと一緒にいるのに何でエルザちゃんなんかを迎えにいかないといけないの？」

冗談ではなく本気でこんな事を思っているからビックリするのだが、だからこそ私は神様をお願いを通せる取って置きの秘策を考えていた

「神様」

「なあに？」

「神様、おねがいです・・・だめ？ですか？」

テンションの高い時の神様ならこの上目遣い子供っぽくで多分落とせると思っけど・・・

「ッ！うう、反則ね。分かった、ウラノスリーちゃんに免じて行つてあげる・・・もお本当は駄目な事なんだからね」

よし！伊達に神様と長い付き合いじゃないです！

「あーあ、まったくウラノスリーちゃんは本当に悪い女の子ねえー」

「男です」

「女の子ね」

訂正を言つとすぐに返される

「でもそれもウラノスリーちゃんの魅力ね、ふふっ」

くるりと楽しそうに背を向けるとその場からいなくなる

うん、神様は不真面目な性格だけど私のお願いは割と聞いてくれるし少し待てばエルザと戻ってくるかな

「さて！私は私の仕事に戻りますか！」

「おかわりなのね！」

「まだ食べるの？」

まあ厨房にはお願いしてみるけどさー

side エルザ

久しぶりにテラスでの家族団欒の食事だと言うのに嫌な空気に包まれていた

主に原因は私がルイズ様の父親と母親に睨まれているせいなのかルイズ様の戦に行く宣言が悪いのか・・・それとも両方が

「ともかくあんな負け戦に娘を送り出す事は出来ん」

なぜ私を睨みながら言うのか。ルイズ様の親類でなければ一思いに殺れたのに

「親方様！」

執事服を着た初老の男性が慌てて入ってくる。まだ皆には聞こえないだろうけど遠くで多少騒ぎが起きている

「どうした、食事中だぞ。控えろ」

「で、ですが侵入者が」

「賊か？」

「それが・・・賊では・・・」

どうも歯切れが悪い、此処は天下のヴァリエール家。そんな所に表から入るとは凄い人だ

「どうした。まだ捕らえないのか」

「その・・・メイジのようで」

「メイジ？それならこの屋敷の護衛にも居るだろうが」

「相手はトライアングル以上です」

「スクウェアと言うのか?!」

スクウェアといえば魔法使い達の最高ランクだったか。御姉様や神様にしてみれば雑魚なんでしょうけど

「ご主人様！侵入者が屋敷に入りました！」

「くっ、カリン」

「分かってます。慌てなくても私の風が既に捉えています」

ルイズ様の母親が淡々と敵の接近を皆に伝える、私も一応見掛けだけ戦える体制を取る

正直面倒なので、戦闘開始と同時に逃げようと思います

そして侵入者が扉の前まで来て母親が風の攻撃を放った瞬間、テラスの木枠に手をおいて乗り出そうとした

だが侵入者は一番に私を狙ったようで逃走は失敗に終わった・・・なぜ？



犬耳属性に芽生えやがりました(前書き)

「じゅるっ」

「ひいっ」

「う、ウラノスリーちゃん」

「嫌です!」

「即答しなくてもいいじゃない。ね?ちょっとだけ!一回だけむぎゆってさせて!」

「嫌ったら嫌です!」

「……こうなったら無理やり」

ダッ 逃走音

「あ!逃げた!!!」

## 犬耳属性に芽生えやがりました

side 神様ちゃん

思い付きには出来が良い

・・・っと、ウラノスリーちゃんにお願いされたので渋々・・・渋々！エルザちゃんの居る場所に向かったのだが如何にも面倒な場所に居た

屋敷に入ると同時に多数の人間に囲まれる

そして私に向かってゴチャゴチャと何か言っていたけど耳障りだったから全て無視して進んだ

その際何か魔法とか矢とかブレスとか一杯飛んで来た気がしたけど、まあ私の障害にはならなかったわね

ようやくエルザちゃんが居る部屋を発見し中に入ろうとしたら強い風で妨害されそうになったので取り合えず何故か木枠から外に身を乗り出そうとしていたエルザちゃんを捕獲しておいた

「いえーい、取り合えずウラノスリーちゃんとの約束半分くらい達成」

「放してっ」

「黙れ」

あ、思わず

「ひいつ！あ、か、神様」

「久しぶりね、エルザちゃん」

周りは突然の事に騒然としているが私がエルザちゃんの知り合いであると認識したようで多数の人間を下がらせていた

「貴方は此処がトリスティンのヴァリエール公爵家と知ってやってきたのですか？」

・・・あれはブリミルの子孫

私に杖を向けた状態でピンク色の女性は質問する

「知らなかったわねー、これっぽちも・・・だって興味ないし」

「興味ない・・・ですか。では貴方もメイジのようですけど何処の家の者ですか？」

「は？」

全く礼儀の知らない人達・・・行き成り見知らぬ他人に杖を向けるなんてどんな思考を持っているのか

やっぱりウラノスリーちゃんの頼みとは言えこんな面倒な事は引き受けるべきじゃなかったわね

「黙れ、今から私が許可するまで誰も喋るな」

最初からこうしておけば良かった

「ーッ！」

女性は口を開けたり閉めたりと何か言いたいようだけど私が許可してないので声は出ない

「才人君、久しぶりね。あ・・・貴方は特別ね」

「アンタはラスリーちゃんと一緒にいた」

「そうそう、その通り。ところで才人君はなんで此処に？」

「ここルイズの実家なんだよ」

実家、あー実家ね。って事は里帰りかしら・・・エルザちゃんが居る理由ではなさそうね

「エルザちゃん」

「はい！」

「なんで、あなたは、こんな所に居るのかしら？」

「それ・・・その・・・」

「私に手間を取らせた罪は重いわよ？」

これで気に喰わない奴だったら即効処刑ね

なんて言ってるとうラノスリーちゃんに怒られるのであくまで心に  
思うだけで留めようと思う……うん

「ちよつと……乗っていた……竜が……」

「別に貴方なら歩いてでも帰れるでしょ？」

「帰れます。けど……遠いですし」

「帰れるのね」

「はい」

それにしてもこの家は妙に動物が多いわね、さっきから精霊の集まり  
具合も変だしすぐに帰った方が厄介ごとに巻き込まれずにすみそ  
うね

「エルザちゃん、帰るわよ。それじゃ才人君、またね」

「あ、はい」

才人君が確り頷くのを確認してエルザちゃんを掴み一気に空間を跳  
び越えた

side エルザ

恐い

私の心を一色に染めているのはその感情だった

隣で感情の一つも無い無表情で先を見ている神様はたぶん私が煩わせてしまったせいで怒っている

「あ、あの」

「なにかしら」

声を掛けたは良いけど次が続かない。しかしすぐに目的地に着く

「ウラノスリーちゃん！エルザちゃんを連れてきたよー！」

笑顔一色。同一人物とはとても思えません！

「あ、エルザ。遅かったじゃないですか、心配しましたよ、もお」

御姉様は抱き着こうとした神様をひらりとかわして私の方に近づいてきた

「ぶー！今回は珍しくおふざけ無しでウラノスリーちゃんの頼み事を聞いてあげたのにー」

「なに柄にも無い拗ね方をしているんですか」

「ふーんだ！こうなったらウラノスリーちゃんが実は男性を意識して大人の下着を穿いてるって広めてやるもんね」

「なっ！なんで貴方が知ってるんですか神様！」

御姉様・・・すみません。私も普通に知ってます

「まったく何時もはやれ自分は男だと主張しているウラノスリーちゃんもちやつかり女物の下着を着用しちやつてるのよねー」

「だ、だって仕方ないじゃないですか！認めたくは無いですけど今は女の子なんですから！」

「今も・・・ね！」

「今は！」

その後も神様は生き生きと御姉様をからかって帰って行った

「エルザ！私は男ですからね！」

「は、はあ」

「これでも村では人気のあった男の子だったんですからね！」

・・・御姉様の人気は普通のベクトルとは違うんじゃないんでしょうか？まあ私は御姉様の住んでいた所を知らないので余り分かりませんけど

「では、主様も心配していたので会いに行きますよ」

「はい！御姉様！・・・ところで御姉様？」

「なんでしょう」

突っ込むまいと思っていただけだよっぱり気になって仕方ないので言ってみる

「その犬耳と尻尾。外せないのですか？」

「……。」

正直目の前で揺ら揺らと気になる

「……は……はず……です」

「はい？」

「はずれないんです！……！」

「あー」

「私だつて。私だつて嫌ですよっ！さっきだつて神様は「ヤバい！萌える！犬娘、結構イケる！」とか言つて暴走仕掛けたんですからね！」

ご苦労お察しします

「エルザは気にしないで下さい！」

「はい！見て見ぬ振りに全力を尽くします！」

それでも主様のもとに向かう間に好奇の目には晒された



## メイドのお仕事も慣れてきました

side タバサ

突然な話になるが私の御付メイドはとても優秀で何も言わなくても大概の事ならテキパキとこなしてくれる

口下手な私は本当に助かっている

だけどそのメイドの一人、ラスリーには少し変わった所があった

「主様、いい加減私の前でそう行き成り着替えないで下さい。一言いえば外に出ますから」

「?。」

やれ自分を男と思っている所がある。別にそれ自体は何て事ないので特に追求した事はなかったが翌々考えてみれば少し不便かも知れない

ラスリーは私が着替え始めるとそそくさと部屋を出て廊下で程好い時間待っている

「主様、朝食です」

「御姉様、洗濯が終わりました」

ラスリーに続いて入ってきたのはエルザ。幼いながら頑張っている良い子。一言で表現するなら、やったら出来る子と言った感じだろ

うか

でもエルザはラスリー意外の人には少し抵抗感があるようにも見える

「今日の授業は午後からですけどその間は何をします？」

「・・・本」

私は机の上にあった一冊の本を持ち二人に見せる

「イーヴァルディーですか。随分と読んでいますけど、好きなんですか？」

「・・・うん」

「それでは」二人はそう言って私の読書の邪魔にならないように外に出る。人に聞いた話では暇な時は普通のメイドの仕事を手伝ってららしい

あ・・・そろそろ新しい本を仕入れにいかないといけない

side エルザ

私と御姉様は何時もの様に暇が出来てしまったので厨房の手伝いをしていた

「やあエルザちゃん、今日も大変そうだね」

広場で給仕をしているとギーシュ様が声を掛けてきた、胸にある薔薇は一体何処に咲いているのだろうか

私はそんな感想を持ちながら笑顔で対応する

「ところでラスリーちゃんは？」

「御姉様なら厨房の方に」

「ん、そうか。ありがとう」

キザったい笑顔だな。此処まで来ると違う意味で凄い

それにしても本当にそんな束に出来る程の薔薇、何処に咲いているんだろうか。もしかして自家栽培？

322

side ウラノスリー

厨房で一通り昼食の下拵えの手伝いをさせてもらったあとはエルザと合流する為に広場に向かっていた

「あ、エルザちゃんの言った通り」

「はい？」

向かい側からギーシュ様が少し慌てたように走ってきた

「どうしました？」

ギーシュ様から声を掛けてくるのは珍しくは無いですけど、こんなに目に見えて慌てているのは珍しい

「ラスリーちゃん！折り入って頼みがあるんだ」

「頼みですか？」

これまた珍しいです、ですが真剣なようなので出来る限りは手伝いたいですね

「実は知り合いの店で数日働いて欲しいんだ」

「はぁ・・・え？」

「それがちよつと特殊な店で可愛くて優秀な即戦力が欲しいらしいんだよ、それで僕の中でその条件に一致するのはラスリーちゃんだけかなって」

いやいや、まあそう思って下さるのはとても嬉しいんですけど。お店での仕事となると主様の方を投げ出す事になっちゃいますし今回は断るしかありませんね

「ちなみに特殊な店ってどんな店ですか？」

「・・・変わった飲み屋かな？」

なんだか急に曖昧になりましたけど、そんなに変わった店なんですし

ようか。それは一度見てみたいですね

「とても興味のある話ですけど主様のお世話もあるので断らせて頂きます」

「む、そうかい・・・それはしょうがないね」

「あ、いえ」

「いやいや、僕も悪かった。急な話だったね」

何気に思った以上に残念そうです。本当にそれ程の飲み屋とはどんな場所なんでしょうかね

今度機会があつたら行ってみたいですね

324

side ギーシュ

残念ながら大いなる野望は失敗した。まあ無理やりは僕の流儀に反するので無理と言つのなら諦めよう

・・・でもなー

本当に惜しい事をしたよ、魅惑の妖精亭への手伝い。知り合いの伝手で如何にか席を確保出来たけど・・・んー

「ギーシュー!」

「ん？あ！モンモランシーじゃないか！どうしたんだい？」

「探したわよ！ギーシュ！」

探した？

「それはすまない。少し用があつて厨房に」

「そんな事はもう如何でも良いけど！これ！飲んで！」

モンモランシーが差し出したのはワインだった。特に変わった物じゃないと思うんだけど何でメイドに頼まず直接持ってきたのだろうか

「ワインかい？」

「そう」

「ありがと、丁度喉が渴いていたんだ」

特に断る理由も無いので受け取って飲もうとしたのだが直前で僕を呼ぶ声がしたので一旦口をグラスから離す

「ああー」

「あのー！ギーシュ様ー！」

「ん？ラスリーちゃん？」

走ってきたのか息が乱れている

「はあはあ、先程の、話、はあはあ、のお店の名前を聞くのを」

「落ち着いて、ゆっくりで良いから。飲む？」

「あ！ちよ！」

「有り難う御座います」

他人から頂いたモノを更に他人に渡すのは少し失礼だがこの場合は仕方ない

ラスリーちゃんは丁寧にお礼言つてワインを飲み干す

「あゝ」

「ん？どうしたんだい？モンモランシー」

「い、いえ」

なんだか今日のモンモランシーは様子が変わだな、熱でもあるのだろうか。それなら今すぐに部屋に連れていかないか

「あ、そうだ。店の名前だったね、ラスリーちゃん」

「ええ、み・・・あうえ？」

パタン、綺麗に倒れた

最初行き成り過ぎてよく分からなかったが数秒後にラスリーちゃん

が倒れたと認識する

「ラスリーちゃん!!?」

「え?!なんで!?薬にはそんな効果は!」

「薬?」

しまった。とそんな様子でモンモランシーは口を押さえているがもう遅い

「モンモランシー。少し、話を聞いても良いかな?」

「うん」



拒否権なんて有りません（前書き）

「あの、ギーシュ様。随分と前から気にはしていたんですけど・・・  
何処から持ってきてきているんですか？薔薇」

「ん？これかい？大部分は実家からだけど少量は寮の自室にあるよ」

「・・・好き、なんですか？」

「薔薇は僕のトレードマークだからね。欠かせない品さ」

「薔薇の棘、痛くないですか？」

「あ、その事なら大丈夫。キッチンと加工してあるから、ラスリーち  
やんも持ってみるかい？」

「有難う御座います・・・いい香りですね」

「だろっ?」

## 拒否権なんて有りません

side 才人

ルイズの実家はラスリーちゃんと共に居た女性が去ったあと、警備の強化やら女性の搜索やらで慌しくなっていた、ルイズは一応父親に自分の胸の言葉を言ったのだが一蹴されて自室で謹慎を言い付けられた

「あーもう！お父様ったら！何が飾りよ！姫様だって頑張ってるんだから！」

ちなみに言い合いの最中にルイズの幼馴染のアンリエッタ姫の悪口を言われたせいでもかなり怒っている

「頑張ってるってあの親父さんの言った通り若いんだろ？だったら政治は難しいだろ」

日本だって三十後半からじゃないと立候補は出来なかった・・・っけ？

と言うか血筋だけの王位即位なんてその内質が低くなるのは歴史が証明してるよな

「なに？アンタまで姫様の悪口を言う気？」

「いえ！何でも有りません！！」

はあー

心の中のため息を吐くとタイミングよくノック音が聞こえルイズのお姉さんが入っていた

「来ちゃった」

「ちい姉さま?! どうして? 表は執事が見張って・・・」

「退いてもらったの」

退くって俺が少し抜け出そうとした時、五人は居たぜ? 幾ら主の娘でも謹慎くらってる娘の所に入れさせてもらえるのか?

「そうなんだ」

ルイズがアツサリ信じていたので俺からは何も言わないでおこう

・・・何故かルイズ達より一番この姉さんが強敵なような気がするんだよねー

「貴方達は此処から出るべきよ」

「え? ちい姉さま?」

「貴方達はこんな所でゆっくりしてちゃ駄目」

につこりと優しげにルイズの姉さんは笑う、包容力のあるルイズと年が近いとはとても思えない

思わず見蕩れてしまう。だけどそれもすぐに破壊音で目を覚まされる

「うわぁ」

「ち、ちい姉さま？」

「なあに？二人共」

壁を破壊して入ってきたのは前に見たドラゴンだった、当然それだけ大きな音を立てれば人が近付いてくるのだがドラゴンの一息で誰も近寄れない

「さぁ行つて」

「ちい、姉さま」

「ルイズ、そんな相性の良い彼氏、放つておいちゃメよ」

ルイズの姉さんがルイズの額を小さく小突くとそれを合図にドラゴンが俺とルイズを啜えて背に乗せた

「ありがとう！」

「ありがとうございませす！」

「どうも・・・あ、エルザちゃんに宜しくね」

「「はい！」」

こうして俺たちはルイズの姉さんの協力もあり謹慎生活を抜け出す事に成功した・・・まずは姫さんの命令を待つ為に学院に戻らないと

side タバサ

ラスリーが倒れた

慌てて私の部屋に飛び込んできたモンモランシーがそう言った。モンモランシー自体、私は余り喋った事が無いので一瞬何の事かと思っただがすぐに理解する

「・・・どう言う」

杖を構えてしまったのは自然と。ワザとでは無い

「その、あの、私の魔法薬が・・・ひいつー!」

魔法薬で倒れる、私の記憶から引つ張り出されるのは母様の記憶・・・  
・私がいまどんな表情を作っているのかは分からないけど多分とても我慢している

「・・・教えて」

「此処からは僕が話すよ」

モンモランシーの横からギーシュが現れた、そして庇うように私の杖の先を自分に向ける

ギーシュはこんな奴だっただろうか、もっとヘタレだと思っていた

のに。前回の戦争で何か変わった？

「半分以上は僕のせいだからね。うん、僕が説明しないと・・・ラスリーちゃんはモンモランシーが僕の為に作ってくれた惚れ薬を飲んだ」

「・・・惚れ薬？」

「そう惚れ薬、本来の効果は飲んで始めて見た人物を強制的に惚れさせる薬。それこそ本来はこんな効果は出ないはずだったんだ」

「・・・言い訳」

「そうだね、言い訳だ。効果時間は学生が作った物だからね、せいぜい一ヶ月が好いところ」

「そうだ。所詮は学生が作った薬・・・だけど、それはあくまで人間の薬。韻竜、龍神ウラノスリーは竜種、人ではない」

「・・・解毒薬は」

「ない、そうだよ。材料の精霊の涙が足りない」

「精霊の涙。確かそれは別名で本来は水精霊の体の一部、かなり位の高い貴族でもそう簡単には手に入れない」

「モンモランシーもギーシュもトリスティンでは中級だったはず」

「・・・現地調達」

だが私の覚えではモンモランシーの実家の近くに水の精霊が居たはずだ

「それ、は……でも、私の家との契約はとつくの前に……」

「……やれ」

ベッドで寝ているラスリーの表情は安らかで普通に眠っていると思えない

「なに表で騒いでいるんですか？」

エルザが仕事を終えて帰ってきた……あれ？やばい？

「ん？んん？御姉様がこんな時間にお休みとは珍しいですね」

「じ、じつは……」

サイレント

この話は絶対にエルザには教えてはいけない気がする

「実は何ですか？」

「……エルザ」

「なんですか？主様？」

適当に近くにあった手紙を渡す

「これは？」

咄嗟の判断だったので良く分からないが冷静に見ると国からだった、騎士としての仕事の依頼の手紙だ。依頼といっても嫌がらせに近いがそれでも従うしかないから仕方ない

エルザは無言でそれを開くと一通り確認し丁寧に畳んだ

「分かりました、了解です」

え？なにが？

「行ってきますねー」

ポケットの中に入れて持って行ったので結局何の手紙か分からない  
サイレントを解く

「いいのかい？」

「・・・いい」

「て、事は僕達はエルザちゃんの帰宅までに精霊の涙を手に入れな  
いといけないって事かい？」

成り行きでしょう。ああ、キュルケにも手伝ってもらおうかな



一目惚れとかロマンチックですよね！

side タバサ

ラグドリアン湖。トリスタニアとガリアの合間にある湖でハルケギニア随一、そこには古くから水の精霊が住んでいる

モンモランシーの一族は昔、精霊と人との仲介役をしていたそうだが、ある歴代の仲介人が精霊を怒らせてしまい仲介役を取消にされたらしい。とは言え少々精霊の涙を所持していたモンモランシーはそれを使い、法で禁止されている惚れ薬を作成、解毒分を忘れていて解毒薬を精製出来ない

そして私達は間違つて惚れ薬を飲まされたラスリーの為に昔の仲介人の血を引くモンモランシーを頼りに水の精霊へ交渉に来ていた

「断る」

「.....」

私、ギーシュ、モンモランシーは余りの即答に言葉を失う

それは確かにすぐに頂ける物では無いと覚悟していたがこうもあっさり断られるとは思ってなかった

「帰れ」

「お願いします！何でもしますから！」

「知らん」

くねくねと水の精霊はすぐに湖に溶けて行くこととする、それをギーシュとモンモランシーが食い止める

「理由だけでも教えても貰えませんか!？」

「襲撃に備えている・・・以上」

「襲撃?!」

「・・・いい加減。私も忙しい」

ジツとその場に居る時間さえ惜しいのか何度も水に溶けようとしている

「水の精霊を襲撃・・・それは人ですか？」

「いいや、確かに人の形ではあったが人では無い」

「亜人って事ですか？」

亜人。精霊を襲撃出来る程の亜人となれば限られてくるが魔法学院の生徒如きが相手に出来るとは思えない

「では私達はその襲撃者を追い払えたならば体の一部を分けて下さいますか？」

「・・・考えよう」

「分かりました」

ようやく一区切り尽き、水の精霊は湖に溶ける

「って事になっちゃった」

「・・・仕方ない」

うん、仕方ない。ああでも言わないとあの場は凌げなかった

「そうだね、僕も亜人相手に何処まで相手取れるか分からないけど  
頑張るよ」

はあ、水の中の精霊を襲撃するには少なくとも風の魔法は使えない  
といけない。亜人ならば先住魔法、しかもにわかではなく本物の

此方の戦力はトライアングル一名、ライオン二名。風と土と水

「僕が前衛を務めるから後衛を頼めるかい？」

「そうね」

「・・・私が」

幾ら何でもギーシュに前衛が務まるのかは不安だ、戦場に行ったら  
しいが私とはそれこそ場数が違う

「レディを前にして僕が後ろだなんて考えられないよ」

「・・・。」

「ギーシュはこう言う奴よ、タバサ」

勝手にしろ

side 才人

人が混乱に陥った時にはまず何をするべきか

そつだな・・・うん、振り返ろう

俺はルイズと学院に帰ってきてエルザちゃんにカトレアさんからの伝言を伝えにタバサの部屋まで行ったんだ

そしてノックをしても返事が無いから開けるとラスリーちゃんが寝ていて他には誰も居なかった

よし、此処までは大丈夫

問題の原因が発生したのがこの後だ、時間的に偶々夕食が近かったので俺はラスリーちゃんを起こす事にした

思いのほか寝付きが良かったのか中々起きなかったが凄く揺さぶったら起きた

「ふにゃあ、才人さん？」

その時は寝ぼけているのだばかりに思った

「おはよ、ってそんな時間じゃねーけどな。ラスリーちゃん、エルザちゃん知らない？」

そう様子が可笑しいと思ったのはこの時。俺がエルザちゃんの名前を口に出した時だ

「・・・知りません」

ラスリーちゃんは明らかに不機嫌です。と言った感じに頬を膨らませそっぽ向く

「？、まーいいや。じゃ俺はルイズ待ってるし行くわ」

ラスリーちゃんに背を向け歩き出す、するとすぐに袖が引っ張られ後ろに一歩下がる

「・・・えつと、なに？」

「私も一緒に行きます」

一緒。の部分強調された気もするがルイズが待っているのを思い出したのでラスリーちゃんを連れてすぐに歩き出した

「バカ犬。ご主人様ほったらかしにして何イチャイチャしてたのかしらっ」

結構待っていたのかルイズはご立腹

「ルイズ様！才さんを犬呼ばわりしないで下さい！！」

おお！初めて他の人から庇われた気がする！

「……って言うかなんでラスリーちゃんはバカ犬の服なんか搦んでるわけ？」

「え？ええと、その、うう」

「「？」」

ハッキリとしない感じに顔を赤くしたり俯いたり密着度が上がったり

「す

「す？」

「すき……だから、です」

思考停止

停止

うん、ついでに痛覚とかも遮断出来ねえかなあー

ルイズが杖を構えるのがスローで見た気がするぜ

爆発。何時もの様に虚無の魔法でドカンと一撃・・・なるはずだったのだが、爆発は俺の目の前に発生した光の壁が全て防いでいた

「・・・ラスリーちゃんか？」

「えっと、はい・・・迷惑でしたか？」

凄げえ

そして首を傾げるラスリーちゃん可愛い

「う、そ」

今までと違い、俺が無事だった事がそんなにも意外だったのかルイズは信じられないような目でこっちを見る

「なんの話でしたっけ・・・そうでした、私が才人さんの事を好きと言う話でしたね。失礼ですが別にルイズ様に如何と言われる筋合いは有りません。確かにルイズ様は才人さんの主ですがそれだけです。別段恋人でも夫婦でも無いのでしたら口を挟まないで欲しいです」

呆然とするルイズにラスリーちゃんは怒ったように早口で告げる

「さいとさん・・・すきい」

そしてルイズに見せ付ける様に抱き着き俺の首に手を回す

「ちょ！ラスリーちゃん?! さっきから変だって、どうしたんだよ」

「変、ですか？」

悲しげに呟くラスリーちゃんの瞳は潤っていて唇も何だかとても魅力的、そしてそんな感じて美少女の括りのラスリーちゃんに迫られて俺は物凄く混乱し回想冒頭に戻る

一通り考えたけどやっぱり分かんねえ

ルイズはショックを受けてはいるみたいだけどラスリーちゃんの豹変に戸惑っている方が大きそう

「さい、とさん」

理性と理性や理性などが悲鳴を上げていた・・・あーもう！結局どうなってんだよ！！



メイドの本分は御奉仕する事です(前書き)

「くくっ、何で私なんかにもまた出番が来たんだろっね、」

「本当に何でアンタが居るのよウラノス」

「さあね、いまのあの子じゃ勤まらないと判断されたからじゃないのかい？」

「？、判断って誰によ」

「ふふ、さあねえ、誰だろっねえ」

「……。」

「おっと、そんなに怒った表情はきみには似合わないよ」

「私ね、アンタの前では大体は余り良い表情じゃなかったと思うんだけど」

「ん？そうかい？ああ、そうだったね」

「そうよ、ふんっ」

「それでは皆さん、お楽しみあれ」

「……誰に言ってるのよ」

「さあね」

## メイドの本分は御奉仕する事です

side ルイズ

まさか虚無の魔法を防がれるとは思ってなかったけど、この豹変振り。昔、どこかの書物で見た気がする

病的までに人を愛させる秘薬

惚れ薬

でもあれは精製禁止の違法魔法薬でギリギリ許されている一般の市販の物は一時間と利かない粗悪品のはず

目の前のサイトとラスリーちゃんは私を如何し様も無いくらいにイライラさせるがそれで感情的に動いては魔法学院座学トップの名折れ・・・まあさっきのはノーカン、挨拶みたいなもんよ

「・・・取り合えず夕食ね」

ラスリーちゃんは一先ずサイトに押し付けておけば大丈夫、兎に角タバサを見付けないと

side エルザ

御姉様が珍しく疲れて眠っていらしたようなので私が代わりに受け持った訳ですけど・・・精霊殺しとはまた凄い事を考えますね！

手紙の内容はイマイチ長々としていて意味不明だったけど分かり安く解釈すると行き成り湖を広げ始めた気違いな精霊をちゃっちゃんとぶっ殺せって感じだったと思う

昨晚一回挑んでみたけど作戦無しにはやっぱり辛かった

「んーあの湖近辺の精霊はどうしても向ここの味方だしなー」

こう言う時は御姉様が居てくれると楽で助かるんですけど、もしくはかみさ・・・まに頼ると危ないので却下です

そもそも折角御姉様が普段の疲れを癒す為に寝ているのに神様は起こしかねない

取り合えず水の精霊を殺す方法は封印するか小精霊を根こそぎ奪うしかないのかな？

何にしてもチャンスは吸血鬼の力が増す夜

そう何度もチャンスは無いだろうから次に掛けないと

side ウラノスリー

メイドとは何たるか

ご主人様に御奉仕する者の事

御奉仕とは何たるか

ご主人様の望む事を忠実に行なう事

ご主人の望みとは何たるか

最良を予想し、最善の先読みし、最速の行動をした結果がそれに対応すると思う

結局私が言いたいのはメイドは頷くだけでは務まらず自発的行動も必要と言う事

「才人さん？主様の部屋でお探し物ですか？」

才人さんの寢床が藁と聞いてすぐさまに取替え寢床を確保して主様の部屋に帰ると才人さんが何かを探していた

「え？あ・・・その、ルイズにな。少しタバサの居場所を調べて欲しいって言われて」

「主様のですか？」

才人さんが困っているのなら是非も有りません

「ラグドリアン湖に居ますけど？」

「え?!行き先聞いてた?!」

「行き先は聞いてませんけど分かります。えっと……それだけで  
すか？」

「ん？う、うん」

それ以外に手伝える事が無いと分かると少し心が苦しくなる

もっと才人さんの役に立ちたい

「あ、あの！」

「なに？」

「才人さんは！……その、才人さんは元の世界に帰りたくは無い  
ですか？」

348

side 才人

ラスリーちゃんから言われた一言。元の世界に帰りたいか

「帰れるのか？」

俺はその場で時が止まったように硬直し聞き返していた

「私なら多分可能です」

今までチャンスはあったけどルイズの為に見送ってきた・・・それ自体は後悔してないし自分の選択

だけど未練が無いとは言えない

帰れるのならばすぐにでも帰りたい・・・でもこっちの皆を置き去りにも出来ない

「帰ったら・・・またこっちに来れるかな？」

「え？あ・・・分かりません」

そうだよな。そう都合良くは無いよな

「で、ですが！才さんが望むなら！私は何だって出来ます！」

ラスリーちゃんは鬼気迫る感じで足を進め俺の目の前に来ても止まらない

俺は自然と後退しベットの淵に躓いてベットに倒れた

「才さん」

ゆっくりとした動きで熱のありそうなくらい朱く染まった表情のラスリーが迫る

「ちょー！ラスリーちゃん？！ラスリーちゃんはいま惚れ薬のせいだ」

「なら良いじゃないですか」

「え？」

ラスリーちゃんは泣きそうな声で悲しそうに呟いた

「薬のせいなんですよ？だったら良いじゃないですか。いまはルイズさんじゃなくて私を見て下さいよお、才人さん」

心音がとくんととくんと小さく聞こえる

「ドキドキしてます」

「ま、まあ。うん」

「えへへ、嬉しいです」

ぎゅっと存在を確かめるように強く確りを抱き着いてくる、俺はと言うと緊張して如何して良いか混乱中

そもそも生まれてこの方こんな美少女にこんな事されたの始めてだし、ルイズとは・・・あつた気もするけど状況が状況だったもんなー

「・・・ルイズ様の事考えてます？」

「ッ?!ち、ちが!」

何でそこで誤魔化すんだ、俺!

「むういまは私だけ考えて下さい。誰が何と言おうと才人さんに責任は有りませんから」

あくまで薬のせいです

そう遠まわしに言っている気がした

「いまの主様は才人さんです。才人さんが望むなら……この体、滅茶苦茶に出来ますよ?」

最早両者の吐息が掛かる距離まで近付いていた

俺は……

「……ルイズ」

「ッ?!」

自然と口から出た咳きにラスリーちゃんはバツと置き上がり慌てて後退し躓くそして尻餅を付きながらも信じられないような目で見ながら後退していた

「なんで……」

「ごめん、やっぱりルイズが良いわ」

「そう、ですか……そうですね」

立ち上がりはしたもののふらつきながらラスリーちゃんは出口まで辿り着く

「私は……それでも才人さんが好きだと覚えておいて下さい」



「……。」

許さねえ。ラスリーちゃんにこんな顔をさせる原因になった自分にも惚れ薬なんて馬鹿下駄もんを作った奴も……ぶん殴んねえと気がすまねえ！

上には上が居る。

side タバサ

「いい？ギーシュ。敵は大方風のメイジだろうからタバサの魔法に相殺して貰ってアンタはその内に敵を捕獲しなさいよね」

「分かった」

例え敵がスクウェアクラスでも守りだけを考えれば私でも十分守れる

ギーシュは多少の戦力になっても今に考えればモンモランシーは戦力にはならなかったかも知れない

はあー、まだ後ろに下がって貰った方が良いかな？

「来たわよ！」

夜目は十分利いているから目を凝らす

体型はまだ幼く、男性では無く女性。少女くらいだと思っ

少女は無造作に手を振ると少女に風が集まり空気が膜を作った

ヤバイ、湖の中に潜られる！

「・・・エアスピアー」

私が飛ばした風の針は少女の空気の膜を破壊しながら地面に当たり

土煙を起こす。その間に別の場所に隠れていたギーシュが飛び出す

「ゴーレムクリエイト！ブレイド！」

三体のゴーレムとギーシュはほぼ同時に少女に向かって剣を下ろす

しかし狙ったように地面が突起し三体のゴーレムとギーシュを弾き飛ばす

そして敵は標準をギーシュに付ける

「・・・エアハンマー！」

「ウォーターシールド！」

「アアアアア！めんどおー！！！」

ドオンと地面が陥没し土煙が晴れる、同時に一直線に敵は私目掛けて飛び出す

「・・・エルザ？」

目の前で鋭い爪が停止する

「あれ？主様？どうしたんですか？まさか精霊の死ぬ瞬間を見に来たとか？」

「・・・あれえ？」

side ルイズ

タバサの部屋に行ってもらってたサイトが物凄い怒った顔で帰ってきた

「どうしたの?!」

「許せねえ」

何だか怖い

「さ、サイト?」

ドンと壁を殴った音が響く。サイトがやった

私がピンチでもあんな怒った事ないのに・・・

非常事態と言うのに私はラスリーちゃんに嫉妬した

「サイト!」

「ん?ああ、悪いルイズ」

上の空な返事をしたサイトはデルフを背負う

「ちょっと!何処行く気?!」

「コルベール先生に解毒薬を作ってもらおう」

「なっ！」

出来なくは無いだろっけど本当に惚れ薬だったら一体幾ら掛かるか  
まあそれは良い。家に頼れば多分如何にか出来る。だけど材料が足  
りない可能性がある

惚れ薬の材料は高価。当然解毒薬も高価・・・それだけ拾得が困難  
なのだ

「無理よ！素直に効果が切れるのを待った方が得策！」

「うるせえ！・・・迷惑はルイズに迷惑は掛けねえって」

「・・・。」

迷惑は掛けない？なにその他人事みたいな物言い

使い魔がえらく偉そうじゃない・・・ふふっ貴族も舐められたもん  
ね！

「ふ・・・」

「ん？」

「ふざけないで！」

「うおっ！ルイズ？！」

「なにが迷惑は掛けないよ！アンター一体何様？！平民に一体どれだけの事が出来ると思ってるのよ！それにこの私が友人が訳の分からない状態になってるのに関係ないなんて言葉を吐くと思ってるの！  
！ヴァリエール公爵家三女のルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールを舐めないで！！！」

やったるうじゃない！ラスリーちゃんに薬を飲ませた何処かの馬鹿！首を洗って待ってなさい、貴族の友人を傷つけた罪は重いわよ！

side 才人

ルイズがキレた

俺も大概怒ったけどキレたルイズは凄まじかった

図書室。もはや図書館だったけど・・・そこに乗り込んで記憶辿りに惚れ薬の書籍を引っ張り出してコルベール先生や水系統の先生に材料を貰いに行った

そして足りない物はすぐに鼻便を飛ばし発注。如何しても手に入れるのが困難なのは自分で取りに行くと言い出した

その際ラスリーちゃんが俺に引っ付いて離れなかったけどルイズがラスリーちゃんに睡眠薬を盛って静かにさせた

「行動力パネエ」

「サイト！置いてくわよ！」

「馬慣れてないんだよ！」

馬車より馬単独が速いと言う事でそっちを採用したが尻が痛い

ラスリーちゃんが落ちないように注意するのも大変だし中々スピード出せない

ラグドリアン湖、確かタバサもそこに居るそうで・・・ん？まさかタバサも精霊に会いに行ったのか？

湖に付くと今度はどうやって精霊を呼ぶかが課題になった

「エクスプロージョン」

「ええ?!?!」

ルイズが楽しそうに湖をひたすら爆破、水柱が彼方此方で上がる

「一段落着いたと言うのに」

水がポコポコを泡立ち人の形を取った

「アンタが精霊ね」

「そうだ、始祖の子よ」

「体の一部を渡しなさい」

流石ルイズ。精霊相手でも堂々としてる

「い」

何か言おうとした精霊の体が爆破された

「渡しなさい」

「そちらはガンダールブか」

俺に矛先を変えやがったよ、この精霊様

「ああ、そうだ。俺達は精霊の涙、ようはお前の体の一部が必要なんだ」

「少し前に来た人の子等の関係者か」

「ん？」

タバサの事か？

「たぶん、な」

「そうか、む？その子は」

「あ？そうそう、いま眠ってるラスリーちゃんの治療の為に必要なんだよ」

「神の側近か。始めてお会いした」



何で土下座？好きなのか？

「いやーすみません、マジすんませんしたー、まさか神の側近の方とは」

急にフランクになった上、精霊たちの上下関係を垣間見た

「ラスリーちゃんの知り合いに精霊を恐がらせる程の奴がいんのかー」

「どつでも良いわよ。で、渡すの？渡さないの？」

「全部持っけていっけてもらっけても構いませんよ、樽とか持っけてます？」

全部っけてそれはもう精霊の一部では無く精霊なんじゃなからうか

「いらぬわよ、そんな、うにようによしたの。小瓶を数本持っけてきてるからそこに頂戴」

「はい」

精霊の指先から伸びる水が小瓶を満たす

これであとは学園に戻って解毒薬を作れば良い

生涯の黒歴史かもです（前書き）

「・・・私だけ置いてけぼり」

「ん？キュルケ様、どうしたんですか」

「あーエルザちゃん。実は皆だけ湖に行ってきたらしくて」

「行ってましたね、私も一応行ってますし楽しかったですよ？」

「私も行きたかった」

「なら今度御姉様と一緒に行きましょ！御姉様も今回は眠ってて行けませんでしたし」

「そうね！そうするわ！」

## 生涯の黒歴史かもです

side タバサ

エルザは私が渡した手紙の内容に従って湖のかさが増えた原因の水の精霊の討伐指令を遂行しにきたらしい

水の精霊を殺せば精霊の涙が手に入らないし、かと言って精霊の涙を手に入れるには国の依頼に逆らわないといけない

結局私達は四苦八苦で説得し解毒薬を作れるギリギリの量をもたらした

足りるのかな？

「・・・あれは」

「サイト君だね」

「ラスリーちゃん起きてるわよ？」

「え？御姉様が起きてると変ですか？」

ピクトリアン広場で風のメイジの私でも驚くほど速い速さで鬼ごっこをしていた

「いっやくにがいのやく！」

「大丈夫！たぶんそんなに苦・・・くは無い！」

「その間はなに〜!!?」

速いなー

私達はよく分からない状況に呆然としてしまった

「せっかくルイズが作ったんだって!」

「いやー! 才さんが作ってるならまだしもルイズさんなんて信じられないですよ!」

走っているとサイトが私達に気付く、一瞬だけ歴戦の戦士みたいな鷹の眼になった気がしたが困ったように笑って手を振る

「おい! ちょっとラスリーちゃん捕獲に手伝ってくれない!!」

杖を振るう

風で見えない壁を作ってラスリーの移動を制限する

「よっしゃー!」

「きゃっ!」

サイトがラスリーを押し倒しようやく鬼ごっこは終わる

「ルイズはどうしたのよ」

「んあ? モンモンか、ルイズは疲れたって部屋で寝てる・・・ほい、口開けて」

ラスリーは口をきゅっと閉めて首を横に背ける

何だかやっぱり普段の性格とズレが出ている、これは惚れ薬のせいなのかそれともタガが外れた素なのか

「ラスリーちゃん、お願いだ。少しで良いから飲んでくれ」

「嫌です。それは私の才人さんに対する感情を消す薬です。そんなの嫌です・・・私はそれに耐え切れる自信がありません」

惚れ薬は虚空の愛をラスリーに植えつける。だけどラスリーにとってそれは立派に自分の感情の一つ

失うのは怖い

「大丈夫だってラスリーちゃんは惚れ薬なんか頼らずにキチンと誰かを好きになれるって」

「.....」

ラスリーはアツサリとサイトを押し上げて裾の汚れを叩いて落とす

「分かった。才人さんが言うのなら信じます・・・」

小さな口を精一杯開けてサイトが飲ませやすいようにする

サイトはそれを察したのか慎重にラスリーの口のなかに液体を流し込む

「ん・・・んぐ」

「よしっ、たぶんこれで惚れ薬の効果は消えたはず」

「どうやら先ほど飲ませたのは解毒薬だったらしい、って言うか私達の努力は・・・まあラスリー治るなら別に良いけど」

「ラスリーちゃん、俺の事どう思う？」

「サイトはゆっくりと確認を取るように言った」

「どうってまた不思議な事を聞きますね。才人は、如何したんですか？っと言うか皆様お集まりで」

「ラスリーは首を傾げながら私達を不思議そうに見る」

「薬の効果期間の記憶は消えているらしい」

「よかったあ〜」

「・・・よかった」

「よかったわ」

「一時は如何なるかと思っただね」

「ん？御姉様がどうかしたんですか？」

「安心して脱力する皆を事情を知らないラスリーとエルザは混乱しながら見詰める」

「うしつ！今度は犯人探しだな！見付けたらぶつ殺してやる！」

サイトの勢いある言葉にギーシュとモンモランシーの二人はギクリとしながら苦笑い

「じゃ、じゃサイト君。僕たちは少し遠出で疲れたから部屋に戻るよ」

「おう！分かった犯人探しは任せとけ！」

「行く、モンモランシー」

「そ、そうね」

私も少し眠い

「・・・部屋に戻る」

「あ、はい。では才人さん、またこんど」

「ああ、またこんどな」

こうして私はラスリーとエルザと一緒に部屋に戻ったが犯人である二人はどのタイミングで謝るのだろうかとかその後サイトに殺られな  
いだろうかとか少し不安要素が残り眠れなかった

ついでにキュルケに置いてけぼりにした事を怒られた

side ウラノスリー

・・・なんで私はあんな事を

皆様には忘れていているふりをしたが私はしっかりと惚れ薬を飲んだあとの記憶を覚えていた

にゃあああゝゝ！！！！「この体、滅茶苦茶に出来ますよ？」とか甘えた声で男の私がなに言っちゃってるんですかー！

龍神の体ならあの程度の薬が通じるはずなのにどうなってるの？！

それにしても惚れ薬と気付けなかった私の責任をどう償えば良いんでしょうか

多くの人を悪戯に動かしてしまった

ギーシュ様には何の店か聞けなかったけどあの時の話を受けよう

モンモランシー様には水の精霊との仲介役の再会を協力しよう

ルイズ様には・・・何だろう？あの人の欲しがるモノが想像出来ない

タバサ様には今まで以上に尽くす事にしよう

心配して下さっていたキュルケ様とは今度一緒に買い物でも行きましょう



エルザとは今度神様と一緒にお茶会で良いでしょう

「はあー」

私は深夜の森の奥で夜空を見上げる

それにしても才人さんを最初に見たせいで異常な程に好きになったのは分かる。そこまでは良い

だけど私にもそれを受け入れていた感があるのがよく分からない

本来なら体が異物を浄化するはずだ。それなのに今回私は才人さんを好きでい続けた

何よりも大切と思い何を差し置いても良いと思う程に

本当にどうしてしまったのか

・・・まさかとは思っけど

有り得ない

こう言う時には神様の無駄に明るいテンションが懐かしく思います

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1240u/>

---

気分屋な神様の横暴

2011年9月30日09時55分発行